

福島町^{たてき}館崎遺跡出土の円筒土器—その型式学的変遷について

(公財) 北海道埋蔵文化財センター

(公財) かながわ考古学財団 (令和元年度から出向中)

影浦 覚

館崎遺跡から出土した円筒土器の概観とその学術的価値

2009 (平成 21) 年～2011 (平成 23) 年にかけて、(公財) 北海道埋蔵文化財センターが調査を行った福島町館崎遺跡から出土した土器の総数は 91 万 7,571 点であった。うち縄文時代前期後半の円筒土器下層式が 33 万 8,942 点 (37.0%)、中期前半の円筒土器上層式が 40 万 1,604 点 (43.8%)。円筒土器で出土土器全体の 8 割強を占めており、検出された大型盛土遺構 (物塚・もの塚 福井 2013・2020) もその大部分が円筒土器文化期の造成であった。

円筒土器は下層 c 式から上層式の末までの各型式が間断なくあり、中でも多いのは円筒下層 d1 式～上層 a2 式であった。円筒土器の系統だった変遷、とりわけ下層式から上層式へと移り変わる過程を、数百個体の復元土器によって観察できる点において、館崎遺跡から出土した土器は学術的にきわめて良好な資料群であると言える。

改めて円筒土器とは

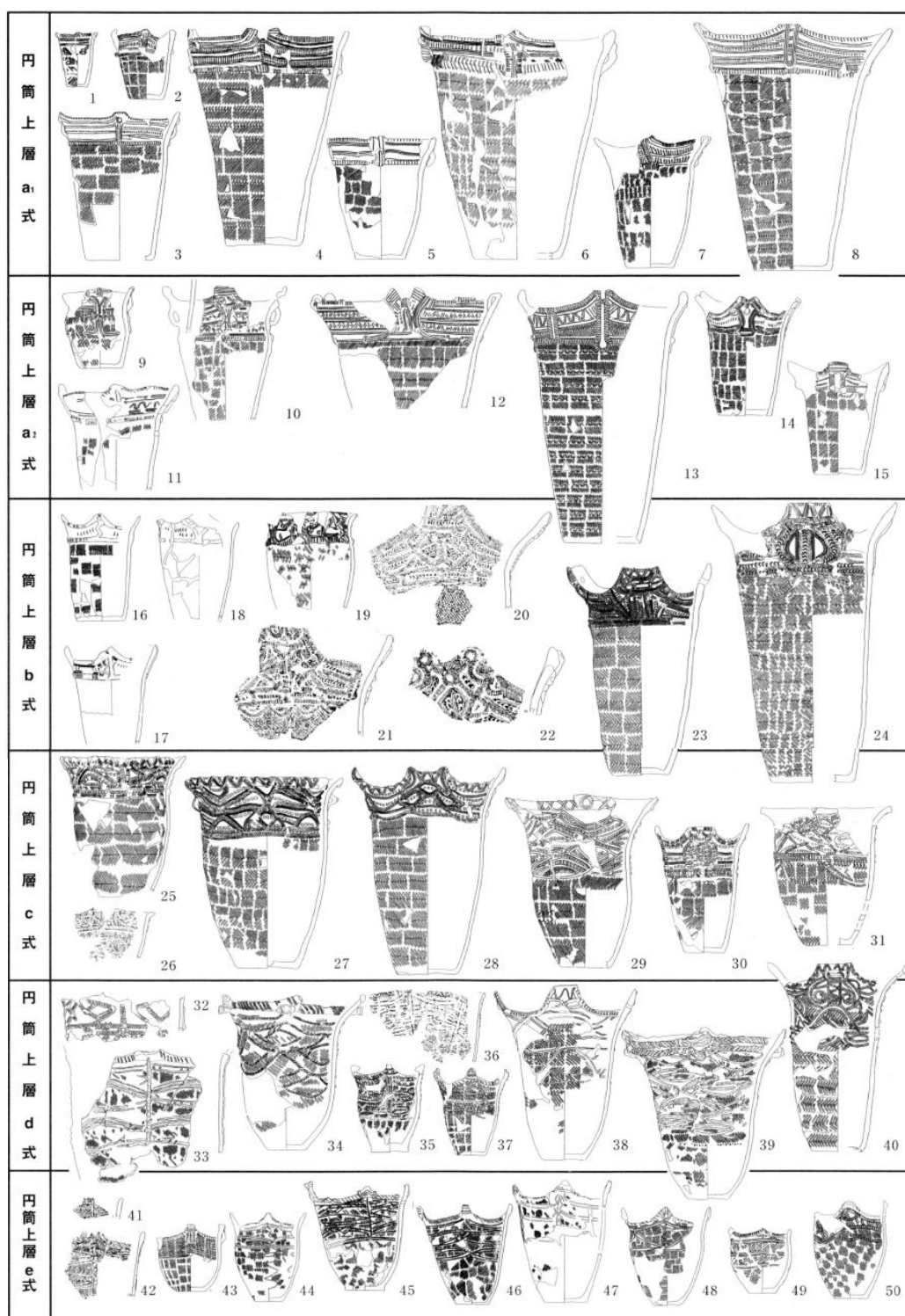
東北地方北部から渡島半島を中心として、縄文時代前期後半から中期前半にかけて盛行した一連の土器群を、その系統だった器形から円筒土器という。前期後半と中期前半とで土器の形態や、文様、胎土など視覚的な印象が大きく異なることから、下位の古い地層から出土した前期後半の土器について円筒土器下層式、上位の新しい地層から出土した中期前半の土器については円筒土器上層式として大別されている。

円筒土器下層式	円筒土器上層式
胎土に植物繊維を多く含む。	胎土に植物繊維をほとんど含まない。
口縁部はあまり開かない。	口縁部が大きく開く。
大型突起を持たない。	大型の突起を持つ。 (突起を持たない平縁土器もある)。
口縁部文様帯を粘土紐の貼付で区画しない。 (d2式ではアクセント的に粘土紐を貼付したものがある)	口縁部文様帯を粘土紐の貼付で区画するものが多い。
地文は撚糸文 (縦位施文) が多い。(下層a式を除く)	地文は縄文 (横位施文) が多い。
円筒土器下層式と上層式の大きな違い	

その細分案は諸説あるが下層式は a～d 式、上層式は a～d 式ないし e 式に細分されていることが多い。そして今日では、下層 b 式を下層 b1 式と b2 式、下層 d 式を d1 式と d2 式、上層 a 式を a1 式と a2 式というように、最初期から終末までを 10 数段階に細分することが通例になっている。ただし、後述するように細分案や型式判定の定義は様々であり、細分化が進むその一方で、今なお各型式の定義が研究者により流動的であるという問題を抱えている。



円筒土器下層式編年図（茅野 2008 より抜粋）



第2図 円筒上層式変遷模式図

1～18：三内丸山287住第3層 9～13：三内丸山鉄塔間層24 14・15：三内丸山144住床面 16～18：三内丸山6次第8層 20～22：三内丸山213住堆積土 23：三内丸山334埋 25・26：三内丸山43住床面 27：三内丸山481埋 28：三内丸山160埋 29：三内丸山304住炉 30：三内丸山145住堆積土 31：三内丸山141埋 32・33：三内丸山266住炉 34・35：三内丸山690上 36・37：三内丸山404住床 38：三内丸山362埋 39：三内丸山598埋 40：三内丸山380埋 41・42：三内丸山226住炉・床面 43：三内丸山447住炉 44：三内丸山641住4層 45・46：三内丸山（市）2住堆積土 47：堆積土20賢6層 48：三内丸山995土2層 49：三内丸山遺構外 50：三内丸山71住炉（縮尺：1/12.5）

円筒土器上層式編年図（小笠原 2008 より抜粋）

円筒土器研究略史

円筒土器研究の歴史は約 100 年に及ぶ。その嚆矢は、1925（大正 14）年、青森県のオセドウ貝塚における山内清男の採取資料、翌 1926（大正 15）年の是川の一王子貝塚で山内清男と長谷部言人が発掘した資料に端を発する。

これらの出土資料を受けて長谷部言人は「円筒土器文化」（長谷部 1927）を発表、はじめて「円筒土器」と命名した。この段階ですでに「突起及び外反



館崎から出土した直立状態で埋納した可能性がある土器

は上層の土器に著明で、下層のには目立たぬ」などと円筒土器が上層と下層で大別できる可能性について言及している。また円筒土器が「土器塚」より発見されたとした青森の佐藤^{じょうみ}部の報告や、円筒土器が直立状態で埋没してみつかりと指摘した武藤一郎の報告も紹介^{註1}している。

次いで 1929（昭和 4）年に山内清男は「関東北に於ける繊維土器」（山内 1929）を発表する。ここで山内は是川一王子貝塚で出土した円筒土器を上層式と下層式に大別。上層式を中期、下層式を前期に位置づけるとともに、下層式を a・b・c・d に四細分、上層式については a・b に二細分した。

戦後の研究も、基本的には山内清男の細分案をベースにしながら出土事例の増加に伴って、その都度に定義や細分案が付加されていったが、各研究者の細分基準、各型式の定義が二転三転したため、判断材料であるはずの土器の類例や層位的成果が増えるに従い、解釈をめぐる混乱も深まっていく状況になった。先学の層位的成果や、定義についての十分な検証がなされぬまま、新資料が増加するたびに継ぎ足し的に定義を付加し、新しい細分案を提示したことによって、絡まった糸のような袋小路に陥ったものと思われる。特にアルファベットによる細分記号の示すものが研究者によって異なっていた点などは、その最たるところであろう。円筒土器上層式の型式観を巡る混沌の実際^{註2}について少し触れる。

たとえば、円筒土器を細分した山内清男は、後年になって円筒土器の終わりについて、「円筒上層 c 式としてもよい。ただし d 式という区分はない」などと言及した（山内 1964）。これは沈線を施文したものは大木式系土器の影響を受けているから円筒土器には含められないという意味合いでの発言であったが、そうであれば今日広く上層 d 式と認識されている貼付による文様体を持つ土器が山内のいう c 式であり、沈線で文様帯を構成する上層 e 式が、円筒土器の区分にないとした山内の d 式であったことになるであろう。山内が 1920 年代に円筒土器の最初の細分案を示した時、上層式は a 式・b 式の 2 細分であり、その後、新資料の増加で他者により上層 c 式以降が追加された経緯からすると、決して山内自身の発言に齟齬はないが、ここで山内が言っている上層 d 式と今日の研究者が語る上層 d 式とは明らかに異なる型式である。

事実、この問題について、鈴木克彦が「円筒上層 e 式の沈線文による技法は円筒土器に含まれない」（鈴木 1982）との発言をしているが、山内の d 式が e 式に置き変わっただけであり、言っていること自体は山内とほぼ同じことであろう。山内清男や鈴木克彦が沈線文によって文様帯を描くものは円筒土器に含まないという見解を示した一方、三宅徹也は円筒土器の文様についての属性分析をおこない、e 式も円筒土器の系統にあるとの見解を示した（三宅 1978）^{註3}。

一方、石神遺跡を報告した江坂輝弥は山内とは異なる再定義で円筒上層式土器を a～f 式まで細分し、それぞれをさらに算用数字を付す形で細分した（江坂 1970）。村越潔は江坂の細分案をおおむね踏襲したが江坂が上層 f 式 1 類とした土器については上層 e 式とした（村越 1974）。この江坂輝弥の上層 f 式 1 類＝村越の上層 e 式は貼付文に代わって沈線文で文様帯を構成するものであり、江坂、村越も三宅同様、これを円筒土器として認めている立場である。

こうした動きの中でも発掘調査に伴う類例の増加により、円筒土器の様々な細分案が断続的に提示されていく。1960（昭和 35）年に大和久震平は、秋田県内の出土資料をもとに上層 a 式を 2 類、b 式を 3 類に細分する案を提示した。ここで新たに案出された上層 b 3 式は、隆線が沈線文に置き換わったものであり、山内の d 式、江坂の f 式 1 類、村越の e 式に相当すると考えられるものである。

1971 年、三宅徹也は青森県野木和遺跡の調査成果から円筒上層 a 式について 3 細分の可能性を示した。この細分案を受けてのことか、鈴木克彦は中の平遺跡の報告（1975）において上層 a1 式～a3 式という細分名を使用し、上層 c 式についても新たな細分を案出した。

しかし、上層 c 式について鈴木が細分案を示したのとはほぼ同じころ、大島直行は知内町森越遺跡（1975）の調査結果から上層 b 式と c 式は共伴すると報告している（大島 1976）。

その北海道では、函館市サイベ沢遺跡での層位的な調査（児玉・大場 1958）から、その層位的な成果として、円筒土器についてサイベ沢式という独自の型式名が冠せられていた（吉崎 1965）。円筒下層 b 式相当がサイベ沢Ⅰ式、下層 c 式相当がサイベ沢Ⅱ式あるいは森川式というように別個の型式名が充てられたのである。今日でも円筒土器上層式後半段階の土器についてサイベ沢Ⅶ式という型式名が用いられてはいるが、それ以外については東北地方北部に足並みをそろえて円筒土器の型式名を使うことが一般的である。

サイベ沢Ⅶ式は 2 種 2 対の突起を持つか、結節、綾線の縄文を地文にもつ古手と想定されるものをサイベ沢Ⅶ a 式とし、それ以外のものをサイベ沢Ⅶ b 式と新旧細分する案が示されていた（高橋 1972 b）が、函館市石川 1 遺跡の調査（道埋文 1988）においてサイベ沢Ⅵ式とⅦ a 式とが混在して出土する状況があったことなどを受けて、円筒上層 b 式の後について、サイベ沢Ⅶ式古段階、サイベ沢Ⅶ式新段階とした新たな細分案が提起されてもいる（立田 2006）。

館崎遺跡での型式名もこれに依拠した形で上層 b 式の後についてサイベ沢Ⅶ式古段階・サイベ沢Ⅶ式新段階という細分名を採用したが、後述するように整理を進めていく中で、型式を特徴づける属性の多寡、計測と数値化によって、型式間の線引きを行う分類方針（セリエーション）を採ったため、立田が案出したサイベ沢Ⅶ式古段階・新段階の概念、その前段のサイベ沢Ⅶ a、Ⅶ b 式とも必ずしも合致する内容にはなっていない。

サイベ沢式に関しては、「本州の所謂「円筒土器」編年は研究者によって認識のずれがある中で、同様に認識のずれのある北海道独自の編年を用いることによってさらに混乱を来しているように見受けられる。学史は学史として尊重すべきであるが、少ない資料を基にした型式に対して膨大な資料が掘り起こされた今日、改めて見直す必要性を感じているのは（略）筆者だけではないだろう」（福田 2005）と指摘されているとおり、再考の余地があるであろう。

このサイベ沢遺跡の標識資料について、高橋正勝も「発掘地点が傾斜地であることによる層位の攪乱と、資料の十分な吟味不足による細分不足は否定できないであろう」（高橋 1972a）と、半世紀前には別の観点から型式設定の不備を指摘している。ただ、そう指摘しておきながら、同文献で「東北と北海道との円筒土器は、このサイベ沢Ⅵ式（円筒土器上層 c 式相当 筆者註）か

ら変化を始めるのではなかろうか。その根拠は大木式土器の北上に伴う東北地方の円筒土器の変化があげられる」云々と続けており、このあたりがサイベ沢Ⅶ式という型式名が道内型式として浸透定着するに至った淵源かともみられるのだが、「北海道においても、サイベ沢Ⅵ式土器以後の円筒文化の急激とも思われる後退により—これは北筒・余市両式土器の発生によるものであるが一わずかに地方的な特徴を強めた円筒土器（智東B式 筆者註）が存在する」（高橋同上）と、筆者の誤解でなければ、サイベ沢Ⅵ式すなわち円筒土器c式以降、北筒・余市両式土器の発生により、道内の円筒土器上層式に東北地方の円筒土器とは異なる変化が生じ、それがサイベ沢Ⅵ・Ⅶ式や智東B式の成因になったというような説明が続いている。仮にそういう解釈であったならば、今日的に「北筒・余市両式土器の発生」は中期の終末段階になっているので、ますますサイベ沢Ⅶ式の成因について（そもそも型式として円筒土器上層d式・e式と分かťほどの明確な違いがあるのかどうかも含めて）、再検討の余地はあると言えるのではないだろうか。

つい、人は、俗説をもう一ぺん疑って見ようとはせず、簡便な意見として、うっかりそのままを信じて了（しま）うものである。 宇野千代『行動することが生きることである』P.30・集英社文庫

懐疑の課題がないなら、真理の探究はできない。

倉田百三『絶対的生活』

信じてしまえばそれでそのことについての探求は、確かに止まってしまいます。既成の考えを、定説であれ、偉大な先生の学説であれ、ともかく疑ってみる。それでこそ、学問は前進するのです。

佐原眞『発掘を科学する』岩波新書

何かの真価を本気で見極めようと思うなら、信じるのではなく疑わなければならない。

ヤマザキマリ『国境のない生き方 私をつくった本と旅』小学館新書 215

しかし、ときに前提を疑うということが大切なのです。前提を考えるということは、自分で骨組みを作る、ということにもつながります。

養老孟司『自分の壁』新潮新書

以上、円筒土器の研究史とその現在地を上層式を中心に概観したが、「（この円筒土器については 筆者註）十分に研究されてきたとは言いがたい。（略）編年の問題は発掘を通して語ることが原点だと考えるならその責任は重く、21世紀には問題意識のある発掘を心掛ける必要がある。（略）編年研究の基本は、相互補完の関係にある層位的発掘と型式学（分類）にあるが、相互に援用してこそ有意義なものとなり、在地研究としては当然前者に比重が求められ、その資料が共有化されることによって編年の問題だけでなく、編年学のもう一つの大きな課題である地域性研究などの裾野の広い充実した研究が行われよう」（鈴木 1999）と、こうした状況を踏まえた上で今後の方向性を示した鈴木克彦による発言が改めて注目される。

「発掘を通して語ることが原点」「当然前者に比重が求められ」とし、「層位的調査とその結果が正当なものかは判断しなければならないが、型式学的方法は論者の主観に基づいて構成されるがために、異論が生じやすく見解の相違を来すことが多いから」（鈴木 同上）とし、型式学的方法の主観性を問題視している。なぜ、この発言が注目されるのかと言えば、同様の考え方は、鈴木克彦に言われるまでもなく考古学の研究者、発掘調査員の中に常識知として広く浸透し

ているものであり、と同時に私自身はそこに疑問を感じるころが大であるからに他ならない。

実際、研究史を概観すれば明らかであるように、円筒土器ほど発掘調査による層位的成果や共伴事例に基づいて研究が進展してきた土器様式は他にそう多くはないであろう。それは下層式・上層式と型式名に層位が冠せられていることから明白である。要するに新旧の判断材料に恵まれた土器型式であると言っても過言ではない。

では、それにもかかわらず、いまだに型式の変遷が一貫せず「十分に研究されてきたとはいえない」現状にとどまっているのは一体なぜなのか。むしろ層位的成果重視・共伴事例重視（型式学的方法軽視）でやってきたからこそ、いつまでも型式観が一致しないのではないかと考えざるを得ないのである。

改めて「客観的である」とはどういうことであるか、から問い直したい。それは発掘に携わっていない第三者でも真偽を判定・評価できる内容のことに他ならないであろう。すなわち論拠の整合性と、論拠とするもののデータ化・数値化の度合いこそが、客観の深度を示すものである。

したがって、もし報告書における掲載土器の表の項目が、型式を確証させるには不十分である場合が多い（土器が持つ豊富な判断材料が数値化されなさ過ぎである）、という意味においての発言であれば、「型式学的方法は論者の主観に基づいて構成されるがために、異論が生じやすく見解の相違を来すことが多い」という鈴木克彦の指摘は、確かに間違っていないであろう。

だが、たとえ型式学的なデータや数値が乏しく主観の域を出ないものであるにせよ、そのことによって、相対的に層位的発掘・共伴出土事例に対する認定の客観性が高まるというものではない。むしろ冷静に考えれば、そんな保証などどこにもないということが問題なのである。

引用した鈴木克彦の指摘は、型式学的方法が主観に基づいていると指摘することによって、層位的調査（共伴事例）こそが客観であり信頼できる、と暗に読み取れるような、いささか誘導的なくだりになっているが、もし一緒に出土したもの（共伴資料）が本当に同じ型式の土器かどうかについて型式学的な検証をすることなく、発掘調査者がプロ意識・経験値・キャリアその他によって、即座に、直覚的に、現場で認定・結論しているようなことがあると仮定するならば、それもまた主観に基づいた所見に他ならないのではなかろうか^{註4}、と思う。

発掘した人間が「共伴した」「層位的に前後関係が確認された」と記載した言葉のみを信じる以外にないような調査報告も、おおよそ主観の域を出るものではなく、それを客観的であるなどと疑いなくその無謬性を信じ込むルーチン化した姿勢、それ自体もすでに主観（思い込み）そのものなのではないかと、内省的に自問せざるを得ない。

「文献史学は記録を残した人間が嘘をついている可能性があるが、発掘調査による遺構の検出状況、出土遺物の産状は決して嘘をつかない」というまことしやかな言葉が、昔からこの世界の人口に膾炙^{じんこう かいしや}しているが、そうしたことが「あえて言われることの本当の理由」を改めて虚心に考えてみるならば、それは考古学で生きる人間が抱えている文献史学への認め難いコンプレックスの表れではないかと思わざるを得ない。だからこそ、とりわけ発掘調査に従事する人は、フィールド・ワーカー^{フィールド}として発掘調査の真実性・無謬性を過信するバイアスにとらわれがちになっているのではないかと思う。挙句、発掘調査が無条件に客観であるなどと錯覚めいた心地よい思い込み（独善）に心ならずも飲み込まれてしまうのではないかと危ぶまれもする^{註5}。

調査者が調査成果というフィールド・ワーカーの客観的な無謬性を当然のこととして主観的に信じ込んでいる限り、遺構・遺物が真実を語ることはない、ということについて自覚的であることが非常に重要であると、あえて研究史の末尾に自戒を込めて吐露する所以である。

復元・接合・破片						同一個体未接合破片				復元個体(cm)			分類	砂・石礫	繊維	文様	内面条痕の有無
図版番号	掲載番号	調査区	層位	遺物番号	接合点数	調査区	層位	遺物番号	点数	口径	底径	器高					
Ⅳ-1	1	U49	V上	2	1	U49	V上	2	2	21.2	10.2	21.1	Ⅱ群b-1類	極小〜中◎	○	複節斜行縄文	◎
		U49	V上	7	1	U49	V上	4	3								
		U49	V下	23	1	U49	V下	12	1								
		U49	V下	25	14	U49	V下	25	3								
		U49	V下	28	1	U49	V下	28	2								
						U48	V上	20	1								

鹿児島県霧島市 上野原遺跡

番号	出土位置	色調	胎土	焼成
29	n-7	茶褐色	小石、砂粒多く含む	〃
30	H-6	褐色	砂粒含む	〃
31	k-6	茶褐色	砂粒、雲母含む	〃

挿図番号	出土位置	出土層位	備考
第172図	88 C 2-21	Ⅲ	
	89 C 4-6	Ⅲ	
	90 B 4-15	Ⅲ	
	91 E~G 2~6	表土	
92	D 5-18	Ⅲ	

山梨県笛吹市 釈迦堂遺跡

神奈川県伊勢原市 下北原遺跡Ⅲ

掲載番号・出土位置（グリッド）・出土層位・出土標高・色調・胎土…。これらもちろん大切な情報であろうが、研究者の立場になってみれば、もっと表記してほしい内容が他にもあるのではないかと思う。型式を説明づける情報が少ない印象は否めない。

図版番号	遺物番号	時期	器種	口径・底径・器高(cm) ○:復元値	色調	胎土	部位・形態	整形・施文技法	残存率(%)	注記	備考
66	1	曽利Ⅰ式	深鉢	- - 4.3	褐色	白・黒・赤色粒子	胴部	棒状工具による沈線	破片	2334	1号竪穴住居跡
66	2	曽利Ⅰ式	深鉢	- - 4.5	にぶい褐色	白・赤・黒色粒子	胴部	棒状工具による沈線	破片	2577	1号竪穴住居跡
66	3	曽利Ⅰ式	深鉢	- - 4.2	褐色	白・黒・赤色粒子、雲母	胴部	棒状工具による沈線	破片	2319	1号竪穴住居跡
66	4	曽利Ⅰ式	浅鉢 (24.0) (8.0)	11.6	明黄褐色	雲母、白色粒子	口縁部~底部	無文	破片	2337・2340	1号竪穴住居跡
66	5	曽利Ⅱ式	深鉢	- - 4.2	明褐色	白・黒・赤色粒子、雲母	口縁部	無文	破片	2351	1号竪穴住居跡

山梨県山梨市 上コブケ遺跡

図番号	整理番号	出土地点	層位	外面文様					内面調整	底部	分類	備考
				口縁部	区画	胴部上半	胴部下半	胴部下半				
23	5	7510	VS98	Ⅲb	結束13段		RLR斜回	RL斜回	RLR斜回	ミガキ	Ⅱ-4	縄持含
	6	3815	VP95	Ⅲb	結束1(LR・RL)		結束1(LR・RL)		結束1(LR・RL)	ミガキ	Ⅱ-4	縄持含
	1	4024	VR96	Ⅲb	自巻押、結束1(LR・RL)		RL斜回				Ⅱ-4	縄持含
	2	1433	VR96	Ⅲb	R押、結束1(LR・RL)		結束1(LR・RL)		RLR斜回		Ⅱ-4	縄持含
	3	4019	VQ97	Ⅲb	結束1?、LR押		LR単絡1			ミガキ	Ⅱ-4	縄持含

青森県青森市 三内丸山遺跡 41

図番号	接合	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	同一個体未接合	分類	図版番号	備考
図Ⅴ-10-1	H-27-a-3Ⅲ3×2、H-27-a-4Ⅲ4×3 H-27-d-2Ⅲ2×2、H-27-d-3Ⅲ2×11 H-27-d-5Ⅲ3×8、H-27-d-7Ⅲ3×18 H-27-d-10Ⅲ4×10、H-27-d-14Ⅲ3×4 H-27-d-15Ⅲ3×8、I-28-b-1Ⅲ1×1 H-27-a-5Ⅲ4×3、H-27-a-7Ⅲ5×1 H-27-d-18Ⅲ4×1、H-27-d-22Ⅴ1×3 H-27-d-25Ⅴ2×1 計76	21.8	9.5	28.3	H-27-a-4Ⅲ4×2、H-27-a-5Ⅲ4×1 H-27-d-2Ⅲ2×1、H-27-d-3Ⅲ2×25 H-27-d-5Ⅲ3×2、H-27-d-7Ⅲ3×7 H-27-d-10Ⅲ4×1、H-27-d-14Ⅲ3×3 H-27-d-15Ⅲ3×5、H-27-d-18Ⅲ4×1 H-27-d-19Ⅲ4×1、I-27-a-2Ⅲ複底×1 H-27-c-1Ⅲ3×1、H-27-c-5Ⅲ風割×1 H-27-d-9Ⅲ3×2、H-27-d-12Ⅲ4×1 未注記×1、不明×1 計57	Ⅲa-3	図版22	土器集中1 (図Ⅴ-2)

八雲町 落部1遺跡

どこで出土した土器何点が接合したかをこと細かに記載している。もちろんその表記も大切であろうが、はたして実際問題として、土器の研究者がこの接合状況の表記を元に「何か」を論じる可能性がどの程度あるかどうか。こうした表記が無意味であるなどとは言わないが、土器型式そのものに関係しそうな項目が口径・底径・器高、そして分類だけでは、はなはだ物足りない印象はぬぐえない。

復元・接合・破片						同一個体未接合破片				復元個体(cm)			分類	砂・石礫	繊維	文様	内面条痕の有無
図版番号	掲載番号	調査区	層位	遺物番号	接合点数	調査区	層位	遺物番号	点数	口径	底径	器高					
Ⅳ-1	1	U49	V上	2	1	U49	V上	2	2	21.2	10.2	21.1	Ⅱ群b-1類	極小〜中◎	○	複節斜行縄文	◎
		U49	V上	7	1	U49	V上	4	3								
		U49	V下	23	1	U49	V下	12	1								
		U49	V下	25	14	U49	V下	25	3								
		U49	V下	28	1	U49	V下	28	2								
						U48	V上	20	1								

森町 森川3遺跡

分類はⅡ群b-1類と記載されているが、それがなぜⅡ群b-1類なのか第三者にも理解できるデータは乏しい。地文と内面条痕の有無だけ。実測図と写真を見ればわかることは記載しない（する必要がない）ということかも知れないが、それでは研究者は使いづらいであろう。研究に利用される具体的な視点が決定的に欠落していると言わざるを得ない。報告書の掲載土器一覧表はやはり利用が想定される人の視点・立場に立って、徹底的に「知りたい情報」が引き出せる内容にこだわらねばならないのではないだろうか。

表VI-5 遺構出土掲載拓本土器一覽

図番号	番号	図原番号	遺構番号調査区	出土層位	点数	合計	分類	備考
Ⅲ-3	1	55	H-1	床面	6	2	9	Ⅲ-3-5①同一個体
				床下	1	2		
			H-11	床面	1	1		
	2	55	H-1	床面	1	1	6	Ⅲ-3-3①同一個体
				床下	1	1		
				2層	3	3		
				1層	1	1		
3	55	H-1		床面	1	1	1	Ⅲ-3-2①同一個体
4	55	H-1		1層	1	2	1	Ⅲ-K-10①同一個体あり
				2層	1	1		

八雲町 山越2遺跡

表V-3 遺構出土の掲載復元土器一覧(1)

年周 番号	掲載 図番	図名 番号	出土地 名	層位	接点 番号	計量値 (cm)	群属	部位	器形特徴	色調 外装	胎土 その他	文様 特徴	文様	内面	分類	型式名	備考	
						口径 高さ 底径				口径 高さ 底径								
V-8	1	48	H-1	覆土	1	(4.7)	Ⅶ-6	底部	平底	灰白色 土 5785/4	灰白色 土	なし 希少多量			ナデ	Ⅱb	Ⅰ	表面磨損 内面着色化
V-8	5	48	H-3	覆土	28	(21.6) 19.2	Ⅶ-6	口縁部	3底状? 肥厚部	灰白色 土 5785/4	中 灰土 希少多量	3.5	肥厚部 口唇部: 1.5 施周溝 口縁部: 1.5 周溝文様・折縁 横装の羽文文様 口唇部: 横装文・文・条・1.5 多量給糸施周溝 口縁部: 1.5 施周溝文様・横装 横装の羽文文様			Ⅱb	Ⅱ下層 41	外面灰化 希少多量
V-8	8	48	H-6	覆土	67	(19.7) 17.2	Ⅶ-6	口縁部 へ傾部	平縁	灰白色 土 10355/2	中 灰土 希少多量	2.5	口縁部: 1.5 施周溝文様・横装 横装の羽文文様 口唇部: 横装 横装の羽文文様		ナデ	Ⅱb	Ⅱ下層 41	口唇部: 灰土 希少多量
V-8	9	48	H-6	覆土	70	20.4 15.8 6.5	Ⅶ-6	口縁部 へ傾部	平縁 外反 折縁部 外反折	灰白色 土 10355/2	中 灰土 希少多量	2.5	口唇部: 1.5 施周溝文様・横装 横装の羽文文様 口唇部: 横装 横装の羽文文様		ナデ 口唇	Ⅱb	Ⅱ下層 42	内面灰化 希少多量
V-9	17	49	H-7 MC17	覆土 成土	12 15	19.7 13.6 6.6	Ⅶ-6	口縁部 へ傾部	平縁 平縁	明茶色 土 5785/6	中 灰土 希少多量	1.5	口唇部: 1.5 施周溝文様・横装 横装の羽文文様 口唇部: 横装 横装の羽文文様		ナデ 口唇	Ⅱb	Ⅱ下層 41	口唇部: 灰土 希少多量 外面灰化 希少多量

木古内町 幸連遺跡

たとえ表中に文様がこまかく記載されていても、出土した同一型式の個体全体の中、それぞれの文様、属性が何個体（何％）であったかについて具体的に示されなければ、研究する人間には非常に扱いにくいのではないか。報告書の表記に際しては、土器に限らず、利用（研究）する側の目線に立って見た場合において、データをどのように提示すればもっとも使いやすいか、基礎的データとしての有意性が最大限反映されるにはどのようにすれば良いか等々ととことん配慮することが大切に思える。

図番号	掲載番号	図版番号	座・破	遺文・破片No.	分類	型式名	図様土器番号	遺構名	調査区	層位	土層・区分・盛込	標高	創立・正立	点数	合計	残片	文様帯幅上位	陪付要素	陪付要素	文様・地文等	間の面らみ	底部形態(内・外)	内面装飾	内面化粧土	粘土泥和材	海陸骨針	近似属性的陪例等	備考
V-9	1	232	Ⅲ	342	B	下層c	白175	T1H=54	J02	フタ中 フタ下	A-B	—	—	57 24	166	有	15.4	—	—	—	弱	平+平	—	○	砂礫多し・縦溝有。	—	—	—
									J03	フタ中 フタ上	A-B	—	—	17 4														
									K03	フタ上	A-B	—	—	1														
V-2	2	232	Ⅳ	878	D	下層c	608	T1H=54	J02	フタ下 蓋土平置	A-B	23.93	—	75 1	76	有	15.1	—	—	—	中	微凹凸・縦溝凸	—	—	微礫・凝灰砂質有。	—	—	—
							—			フタ中	A-B	—	—	1														
V-2	3	232	Ⅴ	708	D	下層c	白355	—	D02	m2下	A-B	—	—	122 1	123	有	14.9	—	—	—	平+微凹	—	—	—	微礫多量含・凝灰砂質・縦溝多い。	—	—	—

館崎遺跡掲載土器一覧表 (1 ページ目)

大きさ	推定 透率 (%)	口径 (cm) [A]	原厚 部径 (cm) [B]	筒厚 部径 (cm) [B]	径 差	底面 部径 (cm)	筒部 厚 (cm)	筒高 (cm)	体積 高 (cm)	底径 (cm)	底面 部径 (cm)	底厚 (cm)	重量 (kg)	推定 容量 (L) 100 %	推定 容量 (L) 75%	胴上半内面 の層厚 (内底面から の高さ・cm)	内面炭化 物の付着 (内底面から の高さ・cm)	赤変範囲 (外底面から の高さ・cm)	表面の 炭化物 付着	色調	底底	別 れ 方	突き 損
甲	90%	24.4	24.3	0.93	内縁・小	12.1 (31.0%)	1.0	31.0	38.3	17.0	—	9.8	3.779	12.8	9.7	—	18下、ラッテに薄ずみ。	—	中程度。	—	顯著。	—	ほぼ 無損
中	85～70%	17.3	19.0	0.90	内縁・小	9.8 (32.3%)	0.8	29.8	29.5	9.4	—	0.6～0.9	—	—	—	—	料面とない。	18下、やや。	中程度。 腐食律の甚が付着。	—	顯著。	細かく破砕。	—
申	90～95%	28.0	24.8	1.12	小	4.4 (10.9%)	0.9	40.2	39.0	13.8	—	1.0	3.530	11.9	8.9	—	部分的にのみ 付着とない。	12～15下、顯著。	中程度。	—	顯著。	細かく破砕。	○

館崎遺跡掲載土器一覧表 (2 ページ目)

館崎遺跡では A4 見開き 2 ページ（実質 A3 横位置サイズ）を使って基本データ 53 項目について記載したが、後述しているように突起や文様等の諸属性については、さらに別途表（本テキスト後掲）を設け、徹底的な数値化に努めた。

館崎遺跡の調査から—盛土遺構における層位性と共伴事例の認定、その本質的問題点—

館崎遺跡の調査に際しては、山内清男や長谷部言人の円筒土器に関する最初期の論文、それから『サイベ沢遺跡』や『中の平遺跡』、『三内丸山遺跡』等、円筒土器の層位的成果として知られる報告書として代表的なもの、つまり前項で示したような学史について事前に目を通した。町教委による過去の館崎遺跡の報告書から、館崎が上述の遺跡と同様に盛土遺構を擁し、正立状態や倒立状態の土器が多数出土する遺跡であることも想定されていた。

学史や過去の調査事例を踏まえたことにより、「盛土遺構の遺跡においては、正立ないし倒立状態の土器をすみやかに盛土するために共伴遺物の同時性が保たれる。だからこそ、型式ごとの文化層が形成され、各文化層の上下に型式の前後関係も現れるのだろう」と期待されもした。自分が担当として携わる館崎遺跡の調査においても、当然そのような層位的成果が得られると想定していたのである。

調査を始めてほどなく予想どおりに正立や倒立状態を含む個体形状を保った円筒土器が陸続と検出されたため、これらの出土地点の記録に努めた。しかし、盛土遺構の下部が円筒土器下層式でまとまり、上部が円筒土器上層式でまとまるという層位性の反映は認められなかった。齊一的に下から均一に積み上げて土手状の盛土を形成したものではなく、小規模な盛土を無数に不規則に積み上げていった結果、最終的に土手状を呈する巨大な盛土（物塚・もの塚 福井 2013・2020）に至った^{註 6} から、個体土器の出土位置の上下が必ずしも土器型式の新旧を反映していないのであった。

さらに館崎遺跡ではそうした土器を無数に包含している盛土を掘削して、竪穴住居や土坑をいくつも構築しており、それらの構築によって生じた掘り上げ土が不規則かつ無数に盛土中に嵌^{かんにゅう}入していたことも、層位的序列を妨げる要因になっていると考えられた。

現場での実際的な土器の出土状況や盛土の堆積状況を受け、円筒土器にまつわる層位的成果として学史的に知られる遺跡の多くは、記述や土層図を見る限り、ほとんどが今日の観点でいえば、館崎のような盛土遺構、あるいは貝塚と考えられる遺跡であり、自然堆積層（地山）ではないと確信された。そして、同時に一つの疑念も浮上してきた。もし、円筒土器の複数型式の新旧（序列）が層位的に確認されたというのであれば、数百年という長期にわたってその周辺で盛んな人間活動があったことになる。そうすると、各層ごとにほぼ一型式がまとまって出土する状況が本当にあったのかどうか、数百年に及ぶ人間活動を成因とする土壌の擾乱や遺物の混在が盛土堆積物に反映されないほうがむしろ不自然ではないか、ということが推考されたのである。

このことは層位的成果として知られる過去の調査報告において、層ごとに同一型式でまとまっていたと記載されているものはあるものの、具体的にどの程度の割合で同一型式の土器が占めていたか、あるいはどの程度の割合で他型式の混在があったか、というもっとも重要な点について、具体的に記載されている例が希薄であったことから考えられていた疑問であった。学史上の研究者たちがライバル同士で競うようにしのぎを削り、層位的な調査に基づいた型式設定という華々しい成果に「はやる」余り、混在等の不都合については具体的に触れなかったという心理的バイアスがいささかなりともそこに作用していなかったか、という不遜極まりない疑念さえ胸中に渦巻いていた。

別の言い方に置き換えると、「偉大な諸先学の業績」という名の学史を後生大事に尊重することによって、後続の研究者たちは「同一型式でまとまっていた」「層位的に前後関係が確認された」とある事実記載を、無批判に尊重し、信じ込む以外になくなり、礼儀知らずとのそしりを受

けたくない一心で過度にわきまえ、神聖不可侵な領域には踏み込めない―踏み込もうと思えば踏み込めるのに、あえて保留然として踏み込まないでいること―が、学問の進展、真理の解明を妨げているのではあるまいか、という疑念と懸念でもあった。

どれも各研究者が自分でたずさわった発掘調査の成果であり、それぞれ層位的調査であるとか共伴事例であったとかを元にして、円筒土器をそれぞれに細分定義していること。その結果、同じ土器に対して、研究者・調査報告者の解釈の違いによって細分されたりされなかったり、円筒土器に含めたり含めなかったりしていること。さらには、それら先学によるたくさんの異なる成果を受ける後続の立場としては、調査に携わった人間がそれぞれ「層位的に確認された」「共伴した」と断定するものに対して、批判的に評価し難いこと。ましてや学史上のレジェンド、錚々たる研究者による分類案、定義となれば、なおのことであるだろうと痛感された次第である。

調査の最終年、2011 年度の調査では、調査区の西側を流れている小沢に面した斜面部が調査範囲であった。そこには、広く廃棄層が形成されていて、おびただしい数の土器が累々と積み重なって出土した。この時、円筒土器下層 d1 式から上層 a2 式までが同一面で重なり合うようにして共伴するという出土状況が確認された。いったいなぜこのような出土状況になったのか。

正立土器や倒立土器をはじめ個体形状を保った無数の円筒土器が埋められている盛土を掘り返して新たに堅穴住居や土坑を掘れば、当然、過去の埋設土器が掘り出されるであろう。それを沢に面した斜面の捨て場に投棄した際、自分たちが使って破損した土器と一緒に投棄していたと仮定すれば、廃棄の同時性という新旧土器の共伴は成立する。

すなわち型式が異なるこれらの土器の「使用の同時性」を表す共伴事例ではなく、人間関与を成因とする「廃棄の同時性」を表す共伴事例であると考えられた。

復元後に、廃棄場から出土したこれらの土器を改めて確認したところ、予想したとおり掘り棒で突いたとみられる不規則な無数の傷跡も多くの土器の器面で確認された。

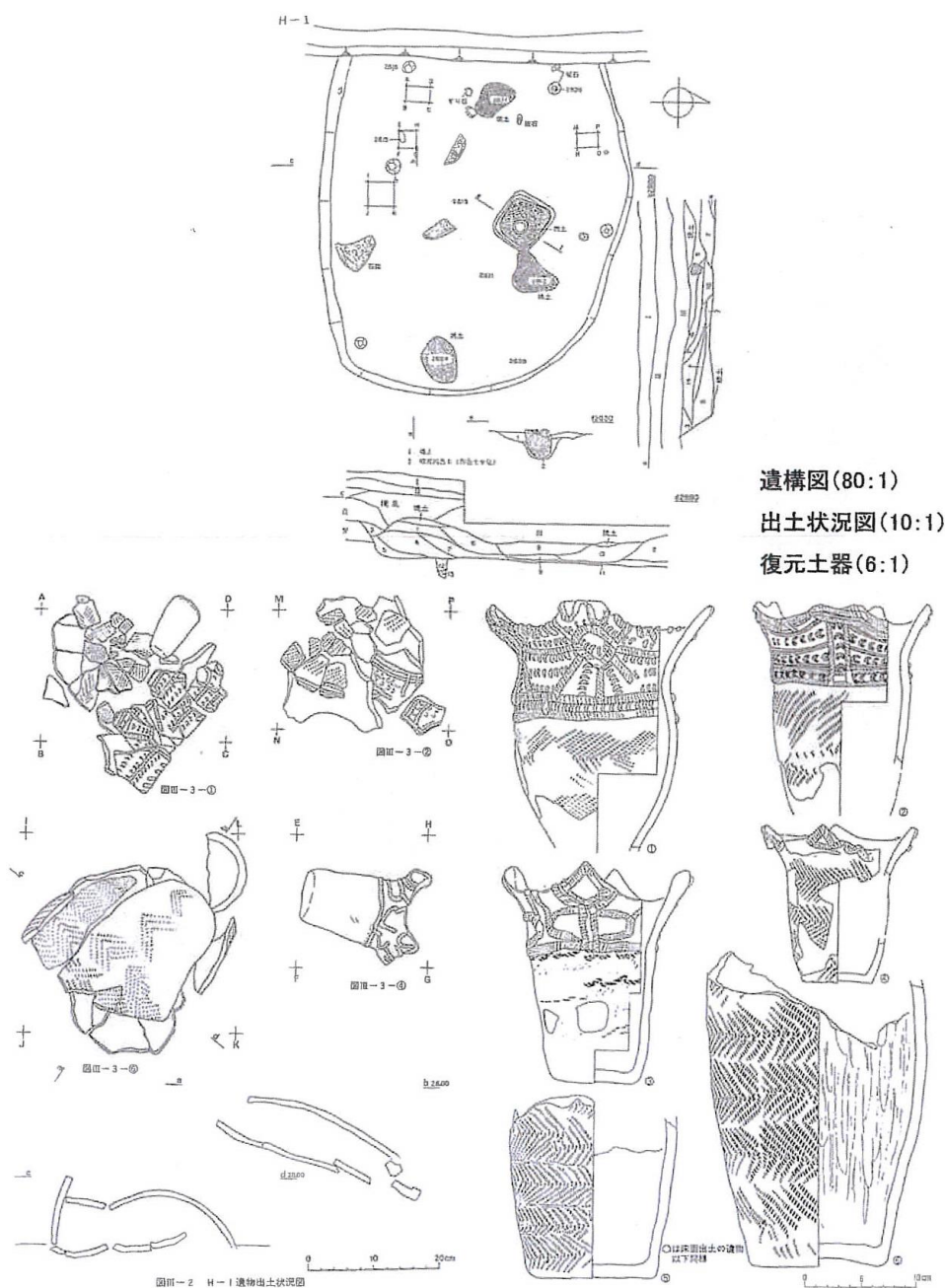
円筒土器の共伴事例ということについて言えば、昨今では、円筒上層式の複数型式が道内遺跡において共伴した事例が相次いで注目されており、「北海道の調査事例では、6 (編年 筆者註) で述べた編年案とは異なる出土状況を示す場合がある。たとえば、尻岸内町(現函館市 筆者註) 中浜E 遺跡や木古内町蛇内遺跡では、円筒上層 b 式から d 式が住居跡床面で共伴する例がある (北海道埋セ 1985、木古内町教委 2004)」 「一つの可能性として、三内丸山遺跡などの土器の出土と、それに合わない北海道の事例の存在は、土器の変化のスピードとして考えられるのではないか。つまり、青森では土器の変化に敏感で、北海道は新旧の要素が入り混じるような状況があったのではないかと思われるのである。これは、土器変化の情報の伝達スピードの違いを示しているものと考えたい」 (小笠原 2008) などと大胆に解釈したものさえある。



西斜面 (廃棄場) における土器出土状況

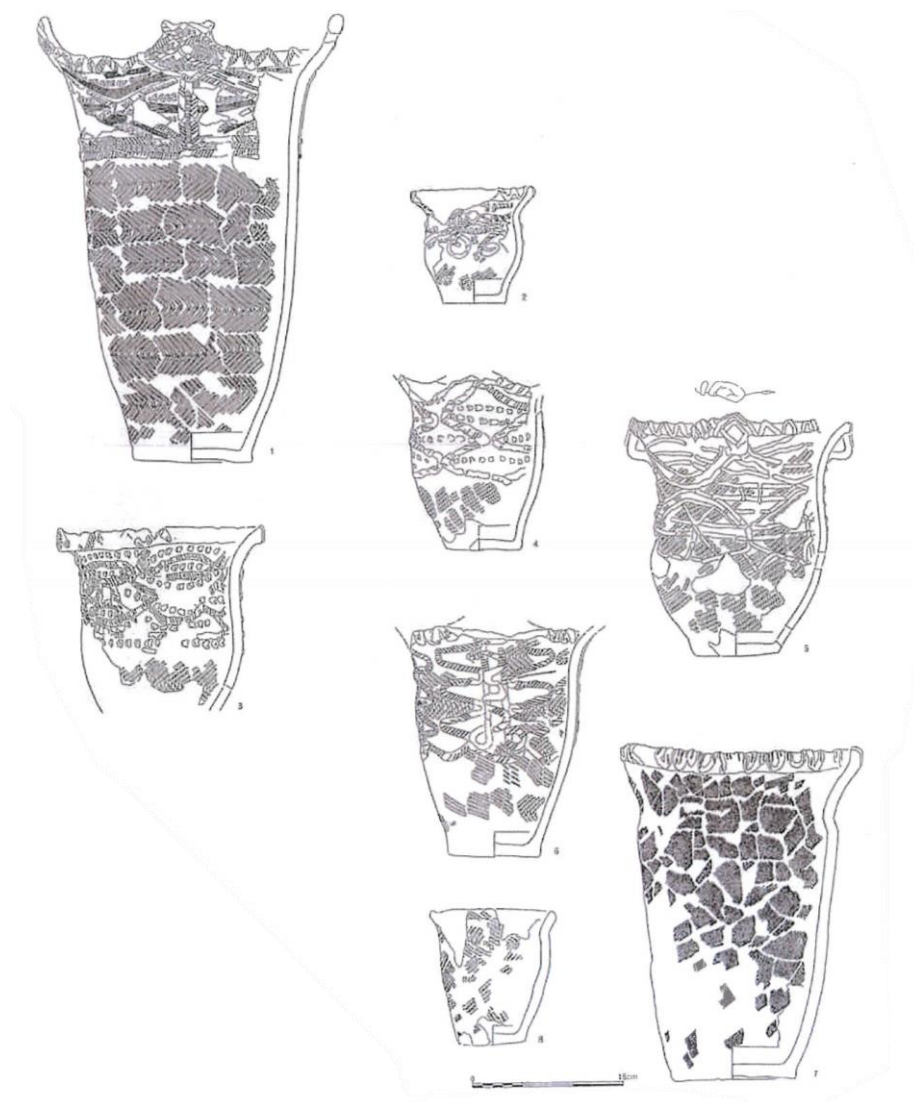


掘り棒によるとみられる突き傷



尻岸内町（現函館市）中浜E遺跡 H-1

※ 小笠原氏がいう（小笠原 2008）中浜E遺跡での共伴事例は、H-1住居床面出土土器のことである。復元土器6個体が掲載されている（うち2個体は下半部のみの復元）。馬蹄形圧痕が施された②が円筒土器上層b式に近いもの。①③④は円筒土器上層c式に相当するもの。と施文具の違いで二型式に分けられている。口縁部の開き具合、径が不均一で歪んだ貼付、胴の膨らみ、底部にくびれがなく底面が浮き上がっている点、器壁のゆがみ加減等、掲載図を見る限り、相互に共通する要素を多く持っているように看取される。筆者にはこれらがすべて同時期のもの、上層b式の終末段階のまとまりであるようにも映る。



木古内町蛇内遺跡 7 号住居址出土土器

※ 報告書遺構調査の項では「床面近くの覆土」、出土遺物の項では「床面直上」と記載されており、微妙に出土位置の表現が異なる。床面そのものではなく、やや埋没しかけた状態での廃棄層かと思える。これらの土器はⅢ群 2、3 類であると記載されている。Ⅲ群 2 類はサイベ沢Ⅴ式、Ⅵ式相当、すなわち円筒土器上層 b 式・c 式相当。Ⅲ群 3 類はサイベ沢Ⅶ式、見晴町式に相当するとあるので、円筒土器上層 d 式、e 式相当となり、小笠原氏が言う 3 型式共存はおそらくここから引かれたものであろう。まず、生活面としての床面ではなく、廃絶後の廃棄層であれば、館崎遺跡の廃棄エリア同様に新旧の土器と一緒に廃棄された可能性はあり得ると考えられる。掲載図でみていくと、馬蹄形圧痕が施された 1 と刺突が充填された 2～4 がⅢ群 2 類、5～8 がⅢ群 3 類かと考えられる。だが、これらについてもほぼ同型式である可能性があるように映る。口縁部をみると蛇行の貼付の横環が 1～7 でみられるが、これは上層 b 式の後半期からみられる特徴である。蛇行の間隔が不均一であることから、上層 b 式末～サイベ沢Ⅶ式(古)相当と思われる。2～6 は貼付による文様帯が胴中位の膨らんだところまで及んでいる点が共通している。1 は羽状縄文が地文であるので、一応この中では一段階古い資料、円筒土器上層 b 式に相当する可能性がある。しかし、他については同一型式(サイベ沢Ⅶ式古段階)の可能性が窺われる内容で、これによって新旧の土器型式が入り混じっているとは言い難いのではないかと。

同様の問題意識は、「長万部町オバルベツ 2 遺跡 H-19 の出土状態は報告者も「円筒上層 b～d 式が（中略）が一括して出土した」と記載されており、鳴川右岸遺跡において出土した複数の土器型式の混交状況について、明言しなかったが同時期の一括資料を提示したことがある」（立田 2006）等、道内研究者からもいくつかの具体的な事例に即した形で指摘されている。

型式の異なる土器が複数共伴したことから、（まずは）「同時期の一括資料」という評価になるのであろうが、これが円筒土器下層式と上層式の共伴出土であった場合もはたして同様の見解に落ち着くものであるかどうか。学史の末尾において取り上げた鈴木克彦の提言同様、層位的な前後関係や共伴事例が、型式的同一性と合致しない場合において、型式的な違和感よりも共伴出土という「動かし難い事例そのもの」の方を優先視するという目に見えない大原則は、ここにおいても貫かれているが、仮に、上述のような上層式の複数型式共伴であれば「同時期並存の一括資料」の可能性が考えられ、下層式と上層式の共伴であれば「混在」といささかの迷いもなく判定されるのであれば、それもやはりフィールド・ワーカーである調査者の「主観に基づいた」共伴認定ではないか、と言わざるを得ない。

なぜ、層位的調査、共伴事例が考古学においてことさらに重視されるかといえば、地質学、化石等の調査から援用された地層累重の法則と、地層同定の法則が、考古学的調査の基本的手法とされてきたからであろう。発掘調査の理念として浸透しているわけだが、この不可侵の原理原則についても今は再考のメスを入れることが迫られているように思われる。

第一に地層同定の法則などと一口に言っても、地質年代におけるある種の化石、アンモナイト等の数万年、数十万年という単位の存続年代と一土器型式の存続年代はまったく時間的なスケールの異なるものであり、一つの層にまとまる同定度合いを化石と土器とで同じに評価することなどはできないということ。第二には、化石年代においては地層や化石の産状に対して人間活動が影響し得る可能性は無いに等しいが、考古学が対象とする過去の人間活動の痕跡（遺跡）においては、いくらでも遺物の出土状況や地山の形成および堆積に対して人間活動が影響した可能性は想定される、ということである。

原理原則として、これらの法則を援用すること自体を否定するものではないのだが、そもそもそうした根本的な条件の違いについて個々の調査者が自覚的かつよほど意識的でなければ、出土状況のみを手掛かりに真の共伴か否かを正しく判断することなど不可能ではないだろうか。層位的な前後関係や共伴事例を踏まえつつも、そのみをして即時盲信するのではなく、やはり出土物の型式学的な検証という裏付け、そのための型式属性の数値化・記録化（客観化）が不可欠ではないかと痛感される。

誤解のないように申し添えるが、このことは層位的調査や共伴事例等、出土状況の観察と記録を軽視している話ではない。層位的発掘や共伴事例は客観的だから主で、型式学的な共通性は主観に左右されるから従だと決めこんでかかる姿勢を改め、両者を対等に重視し、真に相補的・双方向的に検証・評価することの必要性を提起するものである。

実のところ、こうした共伴出土した遺物が、必ずしも使用の同時性を保証するものではないという問題については、すでに 50 年以上も前、私の生年である 1969（昭和 44）年に鈴木公雄が「土器型式における時間の問題」（鈴木 1969）と題して警鐘を鳴らしている。館崎遺跡における新旧土器（下層式と上層式）の共伴は、まさにこの論文が注意喚起している（しかし、あるいは多くの研究者には見過ごされてしまったのかもしれない）卓見と同じ状況であった。非常に重要な指摘であるので、以下にその核心部を引用しておきたい。

「(前略) 編年体系の一単位としての土器型式は、他の土器型式との間に型式総体としての時間差を有するものとして規定されており、その根本は、製作の同時性というべきものによっているのだが、土器型式の時間的な理解については、いま一つ別の観点が存在している。つまり土器の製作から使用を経てそれが廃棄ないし埋設の状態で化石化した場合の問題である。換言すれば一つの層位的一括出土遺物、一括埋設物などといわれるものがそれにあたる訳だが、このような出土状態の中では、先の製作の同時性ということは必ずしも完徹されてはいない。ある単一の層から出土する土器が、全て同一の型式のものであるという例はむしろ稀であり、発掘方法のミスなどを考慮した上でも、その点は明らかである。また故意に埋設されたような一括出土資料の中には、明らかに別型式に属するものが存在することもある。このような場合遺物相互間をむすびつけるものは、製作の同時性ではなく、むしろ、そこに廃棄された、或は埋設された時間が同時であったことを示しているにすぎない。

ところが、我々がある一群の考古学的資料に対して、一定の時間的秩序を与えようとする場合、基本的なものとしてまずとりあげるものは、この層位的一括出土遺物であることも明らかである。従って編年的な目的をもって型式設定を行おうとすることは、このような「廃棄の同時性」によって律せられている一群の資料の中から、ある「製作の同時性」をもった一群を規定し、それらと異なった発生的時間を有する資料を取り除く作業であるといえる。このことからまた、われわれが一般的に用いる所の「層位的検証」ということは、「廃棄の同時性」の中から抽出された「製作の同時性」を持った型式を、再び他の「廃棄の同時性」によって律せられた資料の中で検討する、という作業であるといえ、このような検証をくり返すことによって、ある土器型式の内容がタイムユニットとして固定していくことになる訳である。それ故、この場合には、数多くの事例によって検証がなされるという、蓋然性の積み重ねがその検証の正当性を高めていくことに他ならない。

(中略) このように土器型式を設定する作業の中には、「製作の同時性」と「廃棄の同時性」という二つの異なった時間認識が存在している訳であり、「製作の同時性」はある程度によるタイムユニットの作成という目的によって想定された概念であるといえ、その限りで型式とは一つの抽象化がなされたものである。これに対して「廃棄の同時性」は、ある一括の遺物が、作為的にせよ無作為的にせよ、一つの社会的機能を停止した状態で化石化したとみられるものであり、それは、それらの遺物がある社会の中で生産され使用される過程を経てきた状態を何らかの形で反映するものであるといえる。われわれの日常生活用具を例にとっても、それが全て生産の同時性によって律せられている訳でないことは、われわれ自身経験していることであって、それを生活の実際的な姿としてむしろ矛盾なく受け入れているといえる。むしろ、異なった「製作の同時性」をもった種々の資料が、ある層位の中で「廃棄の同時性」に律せられて化石化するまでの経過が、それらの資料を作り、使用してきたその社会の実態を理解する手がかりになるものといえるだろう。従って、「廃棄の同時性」というものは「製作の同時性」があるタイムユニットの作成という目的の中で生まれてきたのに対して、かなり異なった側面を持っていることが知られる。もちろん、「製作の同時性」と「廃棄の同時性」が一致しているような事例が全くない訳ではないが、むしろそれは特異なケースというべきであろう。

このような土器型式の中にある二つの異なった時間認識が、実は土器の型式的理解を混乱させる要因になっているのではないかと思われるふしがある。よく「層位は型式に優先する」ということがいわれるが、これなどはそのよい例である。この場合問題となるのは、いかなるケース



において、或^{あるい}はどのような目的にてらして、層位は型式に優先するの点にあるのであって、一般論として常にこのことばが通用することではないだろう。今ここでとりあげている土器型式をタイムユニットとしてとらえる考え方からみれば層位は必ずしも型式に優先するとはいえず、むしろ、その逆である場合がつよい。何故ならば層位的一括出土遺物が、全て製作時の同時性を保証しているものではないからであり、ある層位的一括出土遺物としてまとめたものでさえ、その時代性を云々する場合には、そこにつらぬかれている「廃棄の同時性」をくずして処理しなくてはならないといえる。またこれと反対に、明らかに製作年代を異にするものどうしが、ある一括出土の状態で「廃棄の同時性」につらぬかれている場合には、そのようなことが何故に生じてしまったのかを改めて問題とする立場がある。そのような場合には、まさにそのような形で遺物が存在すること自体の中に、その遺物を製作し、あるいは使用した社会の状況が反映されていると考えられるからであり、それを通して、その社会の様相を復元することが可能となるのである。従って、前者のような場合には、層位は型式に優先するとはいえず、又後者のようなケースでは、層位的一括というものを型式によってくずすことはできなくなる。これは二律背反でも何でもなく、そこでそれらの資料をいかにあつかおうとするかという、問題関心のおき所が異なっているからにすぎない。それ故、土器型式の編年学的研究ということを中心にして土器を扱おうとする立場からすれば、その中における時間の概念は、あくまで「製作の同時性」でありその限りにおいて層位は型式に優先するとは一概にいけない。このように土器型式をあつかう中で考えられる「時間」には、二つの異なったものがあり、それぞれは、研究の目的とするところによって実は使いわけられねばならず両者の無意識的な混同をさけるように注意しなければならない」

(鈴木 1969)

土器の共伴事例の認識については、さらにもう一つ注意しておかなくてはならない重要な観点がある。それは古い型式の製品が新しい型式の製品へと移り変わる時に、具体的にどのような経過が考えられるかという問題である。その一つは少しずつ形状や諸特徴が移り変わって、やがて全く新しい型式に移行しているという「漸変」。もう一つは、古い型式が主体のうちに、新型が登場し、徐々にその数を増やしていき、その一方で古い型式は数を減らしていくという「入れ替わり」である。

たとえば携帯電話。ほとんどの人がフィーチャーホン（いわゆるガラケー）を使用していた2008年、流通したてのスマートフォンの日本国内での保有率はほんの4%程度であった。それが早くも5年後の2013年には逆転し、現在はスマートフォンの方が90%を超える保有率である。こうした新旧製品の入れ替わりをみると、土器型式の移行期にも同様な新旧共存状況がなかったとは断言し得ないであろう。しかし、仮に2008年の廃棄層を発掘して100個近くのガラケーと3、4個のスマホが出土したとしても、ガラケーのほうが圧倒的に多く出土したからといって、一緒に出土した3、4個のスマホもみんなガラケーである、ということには絶対にならないであろう。型式学的にスマホとガラケーは明らかに別物であり、型式学的認定は「共伴の多数決」により確定されるものではないからである。たとえ同時期に併行して使用されたもの同士の間で共伴であったとしても、両者が備え持つ型式学的属性が多く異なるのであれば、同一型式（名）には絶対にならない。未来永劫^{えいごう}、ガラケーはガラケー、スマホはスマホである。

つまり、道南地方で下層 d2 式が主体的に使われていた時期に新しい上層 a1 式が渡道してきて一部の集落では使用されていたかもしれないし、上層 a1 式が多く使われるようになっても下層 d2 式的属性の土器を引き続き使っている人がいたかもしれない、という状況が普通に考えられるであろうということ。さらにもう一つ言えば、レトロブームというように、数十年のブランクをおいて昔の流行（デザイン）が再び繰り返されるということも、人間活動の普遍的な現実として視界の端に意識しておく必要があるだろう。

そうした新旧の共伴状況が古今東西の人間活動にいくらでも認められる以上、たとえ同一の場に新旧の土器が共伴とみなされる状況で出土したからといって、多数決的な観点ですべてを同一型式の共伴事例にしてしまうような野蛮な判断があってはならない（いやしくも型式学であるのなら諸属性の違いに即して正しく弁別することを試みるのが道理である）。

こうした共伴事例に起こりがちな誤認を回避するためにも、土器型式を、真の意味での時間尺（数値化・客観化）とする必要性が痛感されている。そこを考えれば、全国の報告書に掲載されている復元土器に関する型式学的属性を数値化した表項目は、ほとんどの場合において、やはり貧弱すぎるのではないかと指摘せざるを得ない。型式を型式として帰属させている諸属性について、可能な限り抽出して数値化することこそは、もっとも有効かつ必要不可欠な基礎的作業であるとあえて提起をする所以である。

館崎遺跡出土土器—分類整理の実際

上述のように円筒土器に関する学史や調査事例を調べていった結果、大まかな型式観や変遷こそはイメージできたものの、型式を型式としている諸属性（諸特徴）の細部や、型式と型式を分かつ線引きをどこに持って来るかは必ずしも一致するには至っていないとの所感を持った。学史を尊重し、情報が蓄積されればされるほど、混乱の度は深まる一方であり、数ある型式観（案）のどれが正解であるかを見出すことは、どれほど論考や報告書を読み込んでも不可能なことに思われた。さらには自分が現実に掘って、眼前にしている館崎遺跡の出土状況（主に共伴）からも正解を見出すのははなはだ困難なことに映った。しかし、数百個体の個体資料が出土している中で、既存の通説のどれかにすり合わせて当たり障りなく報告するようなことだけは絶対に避けねばならない。共伴らしい出土状況と、混在らしい出土状況があり、さらには混在の共伴であろうと推測される出土状況もある中、それらが真の共伴か、混在か、それとも廃棄行為による混在の共伴であるかを、誰が検証してもそうであると認められるような客観的な根拠に基づいた分類、蓋然性のある分類と報告にするにはどうすれば良いかということが、土器の整理担当になって以来、ずっと考えさせられ続けた自分の中の命題であった。

そこで、数百個体に及ぶ復元土器を中心に、とにかく徹底的に観察し、見出された諸属性の数値化（セリエーション）を行なうことを考えた。土器型式というものが、諸属性の共通によって確立されているのに、その定義や線引きが一致していない状況の本質的な理由を突き詰めて考えた結果、型式を型式として説明づける諸属性がほとんどの調査報告において積極的に数値化（客観化）されておらず、概念的な印象の説明（主観の領域）に終始しているからではないか、と考えられたためである。型式学的手法そのものが主観なのではなく、個々の土器が持っている諸属性を必要十分に数値化していないから、データ不在のままだから、いつまでたっても客観にならないのであって、属性の数値化を徹底し、型式観を漠然としたものではなく具体的なものにすれば、逆にその出土状況が共伴か混在か、あるいは混在の共伴であるか、ということも主観で

はなく客観的に説明できると考えられた^{註7}。

方法はシンプルである。土器を復元するたびに1個体ごと復元番号付きで写真を撮り、A4用紙に1枚1個体でプリントアウト、数百個体＝数百枚を用意した。写真を見比べ、視覚的にそっくりなもの同士をまとめていき、実物も同時に見比べて、数十単位のグループに分けた。どれにも帰属しないものや、折衷的なものなどグレーゾーンの個体は無理にグループに含めず、保留としてひとまず横に置いた。次にグループごとに共通している諸属性を抽出した。実物観察により器形、突起形状、施文パターン、貼付、地文、底部形状等、とにかくそれらが視覚的に同一グループとして視認し得る要素を徹底的に洗い出し、それぞれがグループの中で何個体何%を占めているか等の数値化に努めた。それら属性の多寡の推移・変動によって共通する諸属性を持つグループの中でも、さらに古い属性を多く持つものから新しい属性を持つものへの序列化を行った。

館崎遺跡の復元土器に関して数値化・表化した諸属性は合計131項目に及ぶ。その詳細は以下のとおりである。

基本データ（12項目 報告書第2分冊表V-4 第4分冊表18～23）

推定遺存率（復元土器を見て目分量での推定。5分の1程度欠失していると見たら80%という具合。しかし、3Dソフト等を用いれば正確に求められるようになっていくであろう）。

器高（突起も含んだ高さ）。

体積高（突起部を除いた容器高）。

文様帯幅（器高に対する文様帯幅の割合を%表記・型式ごとに平均%を算出）。

口径。

頸屈曲部径（もっともくびれている位置の径）。

頸屈曲指数（口径を径屈曲部径で割ったもの＝口縁が頸部の何倍であるかを表すもの）。

径較差（頸屈曲指数1.00超過1.15以下を小、1.15超過1.30以下を中、1.30超過を大。屈曲指数が1.00未満である場合を内傾として分けたもの）。

屈曲範囲幅（口縁部屈曲範囲の幅。突起、高台部を含む器高から、頸部＝頸屈曲部径を計測した位置以下の高さを引いたもの）。

底径。

重さ（補填材込みの計量となったが、これは復元前の破片段階で計量すべきものであった）。

推定容量（実測図の正面を元に、内底面から口唇のもっとも低いラインまでを対象とし、器壁の屈曲点など傾斜角が変化するところ毎に分断、ソフトを用いた円錐台の容積の総和によって算出したが、プラスチック・ビーズ等を復元土器に実際に充填して計量カップで量る方式が、簡便で正確である。デジタル弱者なので最新技術で何ができるかがよくわかっていないが、おそらく3D計測等を行えばより正確に算出できるのであろう。いずれにせよ土器がウツワである以上、復元土器の容量は掲載必須項目であろう）。

これら基本的なデータのうち体積高（第4分冊以下同じ・表X-18）、推定容量（表X-19）、推定平均重量（表X-20）、口径比（表X-21）、径較差（表X-22）、文様帯幅（表X-23）についてはサイズごとに個体数を出して、その型式ごとの推移と傾向も表にした。

手作りで部位ごとに不均一である土器を計測してもあまり意味がないとする見方もあるかもしれないが、そうした土器の性質を加味した上で、極力平均的な部位で計測するよう心掛け、数百、数千単位で計測データが蓄積されていけば、型式ごとの平均値として傾向が具体化・有意化

し、最終的には型式内の新旧段階ごとの変化さえも数値として顕在化することが予想される。

口縁形状・突起等の属性

26 項目（報告書第 4 分冊・図 X-35）に分けて数値化、型式ごと段階ごとの多寡や消長を表（報告書第 4 分冊・表 X-7・8）にした。

貼付の属性

18 項目（報告書第 4 分冊・図 X-36 上段）に分けて数値化、型式ごと段階ごとの多寡や消長を表（報告書第 4 分冊・表 X-8）にした。

文様帯の基調文様

22 項目に分けて数値化、型式ごと段階ごとの多寡や消長を表（報告書第 4 分冊・表 X-9）にした。

文様帯の基調構成

7 項目に分けて数値化、型式ごと段階ごとの多寡や消長を表（報告書第 4 分冊・表 X-9）にした。

突起下の区画

15 項目（報告書第 4 分冊・図 X-36 下段）に分けて数値化、型式ごと段階ごとの多寡や消長を表（報告書第 4 分冊・表 X-10）にした。

口唇上に付した縄や縄線、刺突

27 項目に分けて数値化、型式ごと段階ごとの多寡や消長を表（報告書第 4 分冊・表 X-16）にした。

基調地文等

大きく 4 項目に分けて数値化、型式ごと段階ごとの多寡や消長を表（報告書第 4 分冊・表 X-17）にした。併せて縦方向の綾繰文や、複節縄文の使用など特徴的なものについても補足的に数値化している。

グループごとの共通属性について数値化したところで、各グループを、既存の円筒土器の各型式に振り分けた。明らかに下層 d1 式に収まるグループ、明らかに下層 d2 式に収まるグループ、明らかに上層 a1 式のグループという具合である。そして各型式の中に入れた複数のグループを対象に、グループが共通項として持っている諸属性の新旧から型式内での新旧を序列化した。この時も過渡的なものや、型式の帰属先に迷いが生じるものは保留として横に置いた。

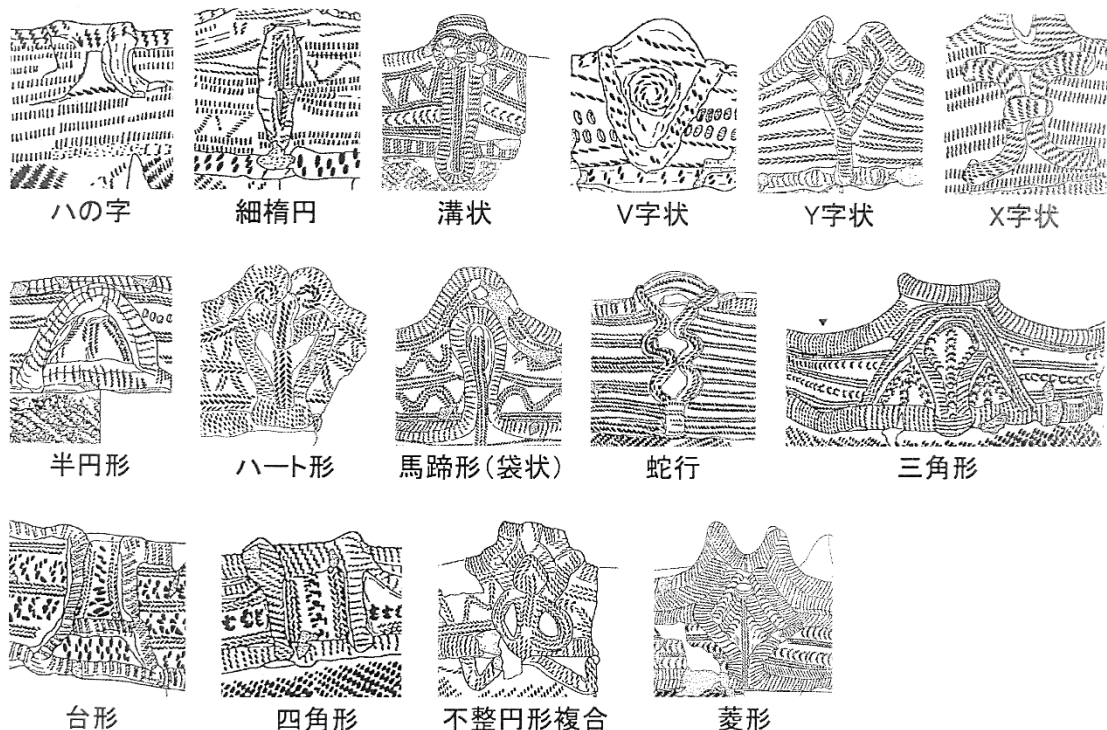
次いで、どれにも帰属しないものや、折衷的なものなど保留状態にしたグレーゾーンの個体についても属性の数値化を進め、その土器が持つ属性内容から、どの型式と型式の間、どのグループとグループの間、すなわちどの段階に配置するのが適切であるか一つ一つ検討していった。

グループの属性によって新旧を序列させる検証作業では、器形や突起形状、文様帯の構成等、

型式的な本質性が高いとみなしうる要素を上位属性として優先させ、個々の施文内容や施文具の違い等は下位属性とすることを意識した。つまり、型式判定のメルクマールとして注目されてきた、馬蹄形の縄圧痕か半截竹管状工具による刺突かの違いであるとか、文様帯の構成（デザイン）がほぼ同じである場合での貼付文か沈線文かの別は、施文具等を代用し得る可能性が高いと判断されたため、下位属性の扱いとした次第である。無文地に貼付で文様帯を区画したか、地文として縄文を全面に施文後に貼付で文様帯を区画したかという、サイベ沢Ⅶ式かそれ以前かを分ける指標についても、無文地に文様帯を構成するものが古く、縄文を施文後に貼付で文様帯を構成するものが後出であることは確かにそうであるとしても、後述するようにほぼ同一の文様帯構成が両者でみられる（818 と 819、882 と 883 等）ことから、ほぼ同時期に作られていた可能性もあるとみて、ことさらその要素のみで新旧を分かťことはあえてしなかった。

そしてほぼそこまで作業が進んだ段階で、改めてそれぞれの型式（グループ）に属する個々の土器の出土遺構や盛土について、位置や層位、共伴状況の確認を行った。これは出土土器が同一型式同一段階による共伴であるか、時間的共時性が認められない混在であるか、あるいは廃棄行為の同時性を意味する共伴であるか、共伴事例を最優先させて、そこから型式を確定させる方法とは逆に、型式としての諸属性から認められる個々の土器の共通性と出土状況が矛盾しないかどうかを確かめ、そこから出土状況の成因を一つ一つ検証するという方法である。

突起下の区画



言葉だけではイメージするものが千差万別になるため、模式的に図を示してみた。報告書の事実記載が読んだ人によって異なるものにならないよう、「共通認識」になるための工夫は必要不可欠であるだろう。

大属性		小属性	Ⅱ b			Ⅲ a							
			下c	下d1	下d2	上a1	上a2	上b	上b末～ サイベⅦ (古)	サイベⅦ (古)	サイベⅦ (新)	見晴町	
突起 形状等	微弱波状	通常		2	28	6							1
		二股			4								
	波状	通常			4	20	4	13		1	10	1	10
		二股			4	15	1	3					
	片流れ				1	7	10	8	?			2	
	貼付隆起	通常				3	13						
		二股					8	1					
	小隆起	通常			?	15	13	5	2	2	2	6	
		二股				1	11	1				2	
	三角形(鈍)	通常			1	4	1	11	?			1	
		二股					2	6					
	山形	通常				2	10	9					
		二股				?	16	23					
	弧状(アーチ状)							?	9	4	1		1
	冠状(巻きつけ棒状等)							?	10	2			
	台形	二股						?	8	15			
		弱凹						?	7	25		1	
		平						?	6	17	6	14	8
棒状ほか					?	7	22	4	2		11	1	
突起頂部が皿状に凹む(冠状突起に多い)						3	28	4		1	1		
突起頂部に刺突等が加えられる											9	2	
2種2対の突起・貼付等				1	4	7	17	1			6	1	

円筒土器属性一覧 (1) 報告書第4分冊 総括篇 表X-7

大属性	小属性	Ⅱb			Ⅲa						
		下c	下d1	下d2	上a1	上a2	上b	上b末～ サイベⅦ (古)	サイベⅦ (古)	サイベⅦ (新)	見晴町
文様帯 (形状等)	口縁部帯状肥厚		？ 16	27	14	2					
	二段口縁(断面クランク状)		1	20	3	1					
	口唇部の肥厚が顕著				8	88	10 ？				
	突起裏 耳状凹			1 ？	13	37	8	1		3	1
文様帯 (穿孔)	透かし孔・横に細長い紡錘形の孔		6	7							
	突起部穿孔			1	？	8	11	2	3	3	1
文様帯 (貼付等)	逆T字状			3	11	1					
	6字・9字状			2	6	？ 1	1				
	J字状あるいは斜位の弧線			1	10	9					
	C字状				5	2					
	短貼付			3	3	5					
	独結状				2	4					
	逆滴状				1	7	1				
	橋状		6	11	18	8	5	1	2		
	環状貼付(渦状貼付)		1	14	28	7	5	10	6		
	瘤状あるいはボタン状の貼付		5	15	33	2	1	2	2	6	
	口唇フック状				23	32	17				
	貼付上の瘤状隆起				？ 8	51	3				
	口縁を蛇行しない貼付が縁どる					11	16				
	縦位蛇行					？ 16					
	太蛇行貼付横環					？ 15	2				
	細蛇行貼付の横環						33	20	13	13	
		結束貼付				2	20	1			
		連結貼付					？ 6	18	5	2	

円筒土器属性一覧 (2) 報告書第4分冊 総括篇 表X-8

大属性	中属性	小属性	Ⅱb			Ⅲa						
			下c	下d1	下d2	上a1	上a2	上b	上b末～ サイベⅦ (古)	サイベⅦ (古)	サイベⅦ (新)	見晴町
文様帯 (基調文様)	口頭部に羽状縄文や綾線が1～3段横環		5	27	9							
	絡条体 圧痕	幾何的モチーフ基調	1	8	15		1					
		平行多段基調		22	18	25	11					
	刺突等	平行多段基調		4	10	11	2					
	撚糸圧痕 (単)	幾何的モチーフ基調	3	44	22	1	1					
		平行多段基調	15	63	29	27	17					
	縄線	幾何的モチーフ基調		？ 2	1							
		平行多段基調		？	2	1	5					
	撚糸圧痕 (複数)	幾何的モチーフ			6							
		鋸歯状		3	1	2	25	？				
		蛇行状					27	？				
		縦位・斜位					？	10				
		平行多段		9	20	42	163	82	1			
		貼付縁取り			1	4	34	42				
		環状・渦状圧痕			2	11	60	7				
	縦位・斜位の 短撚糸圧痕 (絡条体)	サンドイッチ状の構成		17	19	21	19	4				
		非サンドイッチ状		21	12	8	15	7				
	地虫状縄圧痕 (馬蹄形圧痕)	区画帯内			2	16	40	42				
		連続直線的				1	21	72				
		区画充填的					1	22				
		刺突	半截中空工具 刺突					？	16	5	1	1
	棒・ヘラ 刺突					1	5	31	17	12	3	1
文様帯 (構成)	サンドイッチ状の構成			27	34	31	94	90				
	口縁部と胴部の境を貼付横環で画する				3	35	198	124	20	25	1	
	網状貼付(レンズ状対称)							3	6	10		
	網状貼付(菱形連続)							1	3	1	1	
	網状貼付(不規則非対称)							22	11	14	2	
	ソーマン文								5	10	8	2
	沈線文										5	1
地文を施文後に、貼付文を付す								1	1	15	10	

円筒土器属性一覧 (3) 報告書第4分冊 総括篇 表X-9

大属性	小属性	Ⅱb			Ⅲa						
		下c	下d1	下d2	上a1	上a2	上b	上b末～ サイベⅦ (古)	サイベⅦ (古)	サイベⅦ (新)	見晴町
区画 (刺突等)	列点文		20	28	13	1					
	半截中空工具等の刺突・押し引き		20	32	1						
突起下の 区画 (貼付) ※主に 突起下	ハの字			1	2						
	細楕円形				3	10	?				
	溝状			1	?	25	5				
	V字状				1	21	11				
	Y字状				1	10	9				
	くびれ・X字状					14	?	1	?		
	半円形					4					
	ハート形					1					
	馬蹄形(袋状)					6					
	蛇行					9	3				
	三角形					11	4				
	台形					3	2				
	四角形					2	17				
	不整形複合					9	6				
	菱形						8				
区画、貼付、捻糸圧痕等が胴部に及ぶ					3	23	4	1	1		

円筒土器属性一覧 (4) 報告書第4分冊 総括篇 表X-10

表X-13 円筒土器属性掲載土器対応表（文様帯貼付等）（1）

属性	分類	型式名	掲載番号	小計	合計
逆T字貼付	Ⅱb	下層d2	255?-268-295?	3	15
	Ⅲa	上層a1	221-344?-346-(349?)-363-(388?)-389-402-(403?)-421-422	11	
		上層a2	518?	1	
6字・9字状貼付	Ⅱb	下層d2	276-296	2	10
	Ⅲa	上層a1	361-362-(370?)-373-393-(419?)	6	
		上層a2	(505?? 参考)・(560? 参考)・(566?? 参考)・567-→(569?? 参考)	1	
		上層b	(650?? 参考)・(688??)・(693?? 参考)	1	
		サイベ沢Ⅶ(古)	(813?-839?? 参考)	参考	
		下層d2	(223?)	1	
J字状あるいは斜位の弧線状貼付	Ⅲa	上層a1	364 ~ 368-370-(374)・(375?)・(394?)・399	10	20
	Ⅲa	上層a2	470-474-476-478 ~ 480-505?-506-522	9	
		上層a1	471 ~ 473-475-477	5	
C字状貼付	Ⅲa	上層a2	532-584	2	7
		下層d2	223-240-(242?)	3	
短貼付	Ⅲa	上層a1	(349?)-362-→407	3	11
	Ⅲa	上層a2	576-(577-579-580)・581(竪位)	5	
		上層a1	(388-389 前身?)	2	
独鈷状貼付	Ⅲa	上層a2	484-485-507-519	4	6
		上層a1	379	1	
逆掌状貼付	Ⅲa	上層a2	(436-438-439??)・509-(514?)・585-591(人面)	7	9
		上層b	658	1	
橋状貼付	Ⅱb	下層d1	(179?)・(180-181??) …すべて浅鉢。下層d2式の誤認かもしれない。	参考	51
		下層d2	241-252-254-305(小型鉢)・308(浅鉢)・310(小型鉢)	6	
		上層a1	345-347-351-353-(354??)・388-392-394-396-412(浅鉢)・413(浅鉢)	11	
		上層a2	483(剥離)・486-515(剥離)・523-(525-526)・(540)・572-581-585-592-600・(603)・607-624 ~ 627(浅鉢)	18	
	Ⅲa	上層b	652-655-658(Y字)・(683?? 参考)・705-760 ~ 762	8	
		上層b ~ サイベⅦ(古)	789-795(浅鉢)・796(小型鉢)・797-805	5	
		サイベ沢Ⅶ(古)	812	1	
		サイベ沢Ⅶ(新)	858-860	2	
環状貼付(渦状)	Ⅱb	下層d2	277	1	71
		上層a1	360-364-379・(391)・(393 ~ 395)・(397 ~ 401)・(404-405??)	14	
		上層a2	(480)・(508??)・(509)・512・(513)・(517)・(521 ~ 524?)・525・(527 ~ 529?)・533・(559?)・562-566-567-569(人面)・571?(人面文?)・589-590-591(人面)・593(人面)・596-597・(604)	28	
		上層b	(688)・(693 人面)・742 ~ 744・(747)・749	7	
	Ⅲa	上層b ~ サイベⅦ(古)	781-788?-789-796?-797?	5	
		サイベ沢Ⅶ(古)	812-813?-814-822-834-836-837-838-842-843	10	
		サイベ沢Ⅶ(新)	857-860-861-870-886-887	6	
		下層d2	275-278-296-297-310	5	
瘤状あるいはボタン状貼付	Ⅱb	上層a1	339-360-(379?)・(391)・(393 ~ 395)・(397 ~ 401)・(404-405??)・408	15	66
		上層a2	438-440-(480)・(508?)・(509)・(513)・518-520-(521 ~ 525?)・526・(527 ~ 529?)・530-534-542-560(人面?)・561-565-(567)・(571 人体?)・572-575-597-598(人面?)・599-600-(627 人面?)・636	33	
		上層b	(650)・(651??)	2	
		上層b ~ サイベⅦ(古)	782	1	
	Ⅲa	サイベ沢Ⅶ(古)	835-(841 中央が凹むボタン状)	2	
		サイベ沢Ⅶ(新)	981-983	2	
		見晴町	907-908-909-911 ~ 913	6	
		上層a1	331-358-359?-362?-363?・(366?-367?)・(370?)・373-374-(376?)・379-382 ~ 384-388 ~ 390-393-399-402-406-408	23	
口唇フック	Ⅲa	上層a2	(441?)・444-445-470-473-475-477-479-499-503-505 ~ 509-511-546?・(547-548??)・(568?)・(570-571)・581-585-588-597-599-609-610・(617)・625-637	32	72
		上層b	643 ~ 645-649-652-653-656-660-663・(675-676-678??)・685・(688?)・(715?)・(716?)・720?	17	
		上層a1	378?-380?-381?-383・(386?)・391-392-396	8	
貼付上の瘤状隆起	Ⅲa	上層a2	437-438-440 ~ 442-468-469-470・(472)・478 ~ 480-483-499-(503?)・504 ~ 507-509-510-513 ~ 519-521-(527?)・(529?)・532-537-560(人面?)・561-563・(566?)・567-568-572-(581?)・582 ~ 584-594(文倉)・595-596-620-622-635?(人体)・636	51	62
		上層b	669-689-708	3	
		上層a2	544?-545 ~ 548-558 ~ 560 590-592-593	11	
口唇を蛇行しない貼付が縁どる	Ⅲa	上層b	645-648-670-671?-676-677-689?-690(複数段)・708-710-712-714-720?-725-727-729	16	27
		上層a2	477-505-516-(529?)・566-582-585-586-592-597-→(613 ~ 617?)・628	16	

表X-13 円筒土器属性掲載土器対応表（文様帯貼付等）（2）

属性	分類	型式名	掲載番号	小計	合計
太蛇行貼付横環	Ⅲa	上層a2	522-555 ~ 566-592-628 (後半期に集中)	15	17
		上層b	(750?参考)・753・(757-758? 参考)→766	2	
細蛇行貼付横環	Ⅲa	上層b	(658?)・(679部分)・721-722-724-728-730-732 ~ 750-753-(757?)・760-761-763-770-771(後半期に集中)	33	79
		上層b ~ サイベⅦ(古)	781 ~ 785-789-790(ソーマン)・791 ~ 795-799 ~ 806	20	
		サイベ沢Ⅶ(古)	812 ~ 816・(817?)・818-823(ソーマン)・834-836-837-849-850(ソーマン)	13	
		サイベ沢Ⅶ(新)	857-858(ソーマン)・859(ソーマン)・860-861-863 ~ 865-866 ~ 869(ソーマン)・885	13	
結束貼付	Ⅲa	上層a1	391-392	2	23
		上層a2	(441??)・469-513-516-520-522-532-537・(546?)・547-548-567-569(人面)・(587??)・590-595-597・(627? 人面)・639-653	20	
		上層b	653	1	
連結貼付	Ⅲa	上層a2	544-546-(547?)・572-(585??)・(634? 人面)	6	31
		上層b	(645?)・708-709-711-712-714-720-724-732-733?-734?-735-737-739-741?-743-746-771	18	
		上層b ~ サイベⅦ(古)	784-789-793-794-798	5	
		サイベ沢Ⅶ(古)	824-828	2	

数値化したすべての属性について、該当する掲載土器を検索するための表も別途作成した。

番号はすべて掲載土器番号。報告書の利用者目線に立った時に、その属性項目を持つ土器がどれであるか、すぐに検索できる表は必須であると考えたものである。ページ数を取るのもので、ここでは一部の掲載にとどめる。

	下層c	下層d1	下層d2	上層a1	上層a2	上層b	上層b～ サイベ沢 Ⅶ(古)	サイベ沢 Ⅶ(古)	サイベ沢 Ⅶ(新)	見晴町
掘糸文主体 (含自縄自巻・麻状掘糸文)	19 内6個体蓋状 (76.0%)	66 内32個体蓋状 内4個体木目状 (42.0%)	27 内2個体蓋状 内8個体木目状 (21.3%)	—	1 (0.5%)	—	—	—	—	—
多軸格条体主体	4 (16.0%)	82 (52.2%)	95 (74.8%)	2 (2.0%)	2 (1.0%)	—	—	—	—	—
斜行縄文主体 (含結束斜行・結束斜行)	2 (8.0%)	8 (5.1%)	5 (3.9%)	91 (92.9%)	116 (58.3%)	42 (31.8%)	16 (42.1%)	21 (51.2%)	19 (48.7%)	12 (80.0%)
羽状縄文主体	—	1 (0.6%)	—	5 (5.1%)	80 (40.2%)	90 (68.2%)	22 (57.9%)	20 (48.8%)	20 (51.3%)	3 (20.0%)
※縦位の綾線・結束羽状 (主に突起下)	—	1	4	8	7	1	—	—	—	—
※複節縄文	—	1 (0.6%)	—	7 (7.1%)	9 (4.5%)	1 (0.8%)	—	3 (7.3%)	1 (2.6%)	—
観察対象個体数	25 [*]	157	127	98	199	132	38	41	39	15

※ 数は該当する復元個体数。()内%は型式内<縦>の割合を示す。条痕主体等少数のものは入れていない。

基調地文の割合 報告書第4分冊 総括篇 表X-17

	下層c	下層d1	下層d2	上層a1	上層a2	上層b
20.0cm超過～25.0cm以下	2 (13.3%)	9 (12.6%)	6 (7.1%)	2 (4.3%)	9 (10.3%)	12 (24.0%)
25.0cm超過～30.0cm以下	4 (26.6%)	14 (19.7%)	14 (16.7%)	5 (10.9%)	13 (14.9%)	10 (20.0%)
30.0cm超過～35.0cm以下	3 (20.0%)	5 (7.0%)	5 (6.0%)	10 (21.7%)	15 (17.2%)	13 (26.0%)
35.0cm超過～40.0cm以下	3 (20.0%)	23 (32.4%)	16 (19.0%)	9 (19.6%)	22 (25.3%)	5(10.0%)
40.0cm超過～45.0cm以下	3 (20.0%)	17 (23.9%)	30 (35.7%)	7 (15.2%)	11 (12.6%)	7 (14.0%)
45.0cm超過～50.0cm以下	—	3 (4.2%)	11 (13.1%)	10 (21.7%)	11 (12.6%)	1 (2.0%)
50.0cm超過	—	—	2 (2.3%)	3 (6.5%)	6 (6.9%)	2 (4.0%)
対象個体数	15	71	84	46	87	50
対象個体体積高計(cm)	490.0	2471.4	3199.4	1766.1	3180.4	1599.3
平均(cm)	32.666	34.808	38.088	38.393	36.556	31.986
前型式比	—	106.60%	109.40%	100.80%	95.20%	87.50%

※ 体積高は突起部、高台等を除いた高さ。口縁から底部までつながっているもので推定復元率80%以上、20.0cm超過土器を対象とした。

※ 数は該当する復元個体数。()内%は型式内<縦>の割合を示す。

※ サイベ沢Ⅶ式は器形が様々で傾向が表われないので対象外。見晴町式は個体数が少ないため対象外とした。

体積高の割合 報告書第4分冊 総括篇 表X-18

	下層c	下層d1	下層d2	上層a1	上層a2	上層b
5.0L超過～10.0L以下	5 (71.4%)	23 (45.1%)	8 (16.6%)	13 (42.4%)	25 (34.2%)	14 (56.0%)
10.0L超過～15.0L以下	2 (28.6%)	20 (39.2%)	24 (50.0%)	8 (24.2%)	19 (26.0%)	8 (32.0%)
15.0L超過～20.0L以下	—	6 (11.8%)	9 (18.8%)	7 (24.2%)	16 (21.9%)	—
20.0L超過～25.0L以下	—	1 (2.0%)	5 (10.4%)	4 (9.1%)	3 (4.1%)	3 (12.0%)
25.0L超過～30.0L以下	—	1 (2.0%)	1 (2.1%)	1 (2.1%)	5 (6.9%)	—
30.0L超過	—	—	1 (2.1%)	—	5 (6.9%)	—
対象個体数	7	51	48	33	73	25
5.0L超過の平均容量	9.06L	11.04L	14.51L	13.39L	14.56L	10.79L
直前型式に対する 5.0L超過の 平均容量比(%)	—	121.8%	130.0%	92.3%	108.7%	74.1%
下層c式に対する 5.0L超過の 平均容量比	1.000	1.218	1.602	1.478	1.607	1.191

※ 復元率80%以上、容量高20.0cm、容量5.0L超過土器を対象とした。容量は国際基準に従って大文字L(リットル)で表記。

※ 数は該当する復元個体数。()内%は型式内<縦>の割合を示す。

※ サイベ沢Ⅶ式は器形が様々で傾向が表われないので対象外とした。見晴町式は個体数が少ないため対象外とした。

推定容量比 報告書第4分冊 総括篇 表X-19

	下層c	下層d1	下層d2	上層a1	上層a2	上層b	上層b兼～ サイベⅦ(古)
1.0kg超過土器 の平均重量(kg)	2.13	3.00	3.75	3.70	4.06	2.90	2.35
直前型式に対する 1.0kg超過土器の 平均重量比(%)	—	140.8%	125.0%	98.7%	109.8%	71.4%	81.0%
下層c式(1)に対する 1.0kg超過土器の 平均重量比	1.000	1.408	1.761	1.736	1.906	1.361	1.103
対象個体数総重量(kg)	27.675	213.235	229.03	166.425	385.820	153.625	32.840
対象個体数	13	71	61	45	95	53	14

※ 口縁から底部までつながっているもので推定復元率80%以上、器高20.0cm超過、補填剤込みの計量で1.0kg超過を対象とした。
※ サイベⅦ式以降は検討対象外とした。

推定平均重量比 報告書第4分冊 総括篇 表X-20

	下層c	下層d1	下層d2	上層a1	上層a2	上層b
20.0cm超過～25.0cm以下	7 (77.8%)	39 (46.4%)	15 (17.2%)	12 (20.3%)	37 (26.8%)	36 (41.9%)
25.0cm超過～30.0cm以下	2 (22.2%)	34 (40.5%)	43 (49.4%)	24 (40.7%)	35 (25.4%)	32 (37.2%)
30.0cm超過～35.0cm以下	—	10 (11.9%)	19 (21.8%)	14 (23.7%)	37 (26.8%)	13 (15.1%)
35.0cm超過～40.0cm以下	—	1 (1.2%)	9 (10.3%)	8 (13.6%)	23 (16.7%)	5 (5.8%)
40.0cm超過	—	—	1 (1.1%)	1 (1.7%)	6 (4.3%)	—
対象個体数	9	84	87	59	138	86

※ 対象は口径20.0cmを超過する口縁部全周復元土器。
※ 数は該当する復元個体数。()内の%は型式内<縦>の割合を示す。
※ サイベⅦ式は器形が様々で傾向が表われにくいので対象外とした。
※ 見晴町式は個体数が少ないため対象外とした。

口径比 報告書第4分冊 総括篇 表X-21

	下層c	下層d1	下層d2	上層a1	上層a2	上層b	上層b～ サイベⅦ (古)	サイベⅦ (古)	サイベⅦ (新)	見晴町
小(1.00超過1.15以下)	5 (100%)	37 (86.0%)	42 (48.3%)	3 (6.0%)	18 (14.2%)	18 (18.2%)	1 (4.2%)	3 (12.0%)	2 (8.7%)	—
中(1.15超過1.30以下)	—	6 (14.0%)	42 (48.3%)	30 (60.0%)	58 (45.7%)	34 (34.3%)	10 (41.7%)	6 (24.0%)	6 (26.1%)	5 (62.5%)
大(1.30超過)	—	—	3 (3.4%)	17 (34.0%)	51 (40.2%)	47 (47.5%)	13 (54.2%)	16 (64.0%)	15 (65.2%)	3 (37.5%)
対象個体数	5	43	87	50	127	99	24	25	23	8

※ 口縁部全周復元土器を対象とした。
※ 数は該当する復元個体数。()内の%は型式内<縦>の割合を示す。

径較差 報告書第4分冊 総括篇 表X-22

※もっともせばまった頸部径を口径で割った数値。

	下層c	下層d1	下層d2	上層a1	上層a2	上層b	上層b～ サイベⅦ (古)	サイベⅦ (古)
5%以下	9 (56.3%)	3 (2.4%)	—	—	—	—	—	—
5%超過～10%以下	1 (6.3%)	35 (27.8%)	5 (5.2%)	—	—	2 (2.5%)	—	—
10%超過～15%以下	3 (18.8%)	64 (50.8%)	29 (30.2%)	14 (20.6%)	8 (5.7%)	4 (4.9%)	—	1 (4.3%)
15%超過～20%以下	3 (18.8%)	20 (15.9%)	40 (41.6%)	18 (26.5%)	17 (12.1%)	11 (13.6%)	3 (25.0%)	—
20%超過～25%以下	—	2 (1.6%)	16 (16.7%)	16 (23.5%)	35 (24.8%)	15 (18.5%)	1 (8.3%)	1 (4.3%)
25%超過～30%以下	—	1 (0.8%)	4 (4.2%)	11 (16.2%)	25 (17.7%)	15 (18.5%)	1 (8.3%)	1 (4.3%)
30%超過～35%以下	—	—	1 (1.0%)	4 (5.9%)	31 (22.0%)	13 (16.0%)	1 (8.3%)	—
35%超過～40%以下	—	1 (0.8%)	—	3 (4.4%)	10 (7.1%)	10 (12.3%)	—	—
40%超過～45%以下	—	—	—	1 (1.5%)	7 (5.0%)	4 (4.9%)	3 (25.0%)	3 (13.0%)
45%超過～50%以下	—	—	1 (1.0%)	1 (1.5%)	3 (2.1%)	4 (4.9%)	2 (16.7%)	3 (13.0%)
50%超過～55%以下	—	—	—	—	2 (1.4%)	—	1 (8.3%)	5 (21.7%)
55%超過～60%以下	—	—	—	—	3 (2.1%)	3 (3.7%)	—	6 (26.1%)
60%超過	—	—	—	—	—	—	—	3 (13.0%)
対象個体数	16	126	96	68	141	81	12	23

※ 80%以上の復元率で、文様帯を有し、口縁から底部までつながっている土器を対象とした。
※ 容量高比ではなく突起を含む器高比で算出。サイベⅦ式(新)・見晴町式は対象外とした。
※ 器高比上位%。数は該当する復元個体数。()内の%は型式内<縦>の割合を示す。

文様帯範囲幅(器高比) 報告書第4分冊 総括篇 表X-23

次に上述の整理方法によって明らかになった成果、館崎遺跡出土の円筒土器の序列一型式学的な変遷過程の具体について記す。

館崎遺跡から出土した円筒土器の型式学的変遷過程

各型式の指標属性 円筒土器下層 c 式～円筒土器上層式末まで

以下、土器を示す番号はすべて『福島町 館崎遺跡』北埋調報 333・第二分冊中の掲載土器番号である。膨大な数に及ぶため、本テキストでは一部の図示にとどめる。なお、ここに掲載する実測図は、型式学的属性を確認することに主眼を置いているため、スケールは統一していない。また、口縁部文様帯だけの掲載にしたものや、文中に記載した番号で一部掲載していないものもある。その旨、悪しからずご了承願いたい。

円筒土器下層 c 式（報告書内掲載番号 1～26）の判断属性

主に住居跡 TH-11 覆土における土器集中層の一括資料の一部を下層 c 式のまとまりとし、18 個体を復元、掲載した。館崎遺跡出土の円筒土器の中では最古段階であるが、復元個体数は下層 d1 式以降の土器に比べると少ない。ただし、下層 d1 式と比較しても相当薄手で脆弱な胎土のため粉々に破碎したものが多くと考えられ、この復元個体の数は実数をあまり反映していないのかもしれない。

器形その他で下層 d1 式と共通する点が多いが、胎土中に含入する繊維の多さから、下層 d1 式とした土器とは胎土の質感・重量感が異なる。

器壁は薄く厚さが不均一なもの（3・4・6・8～11 等）が目につくが、一方で一定程度の厚みがあり、厚さが均一なもの（1・2・5・12 等）もみられた。前者は脆弱である。

平口縁が多いが、わずかに波状口縁もあり、その場合は波状の高まりが四つのものが多い。これは下層 d 式、円筒土器上層式へと発展的に受け継がれていく。

口縁部文様帯は狭いもの（8～18 等）が多いが、広いもの（1～4 等）もある（『青森県史 別編三内丸山遺跡』（青森県 2002）によると口縁部の文様帯幅の広いものは日本海側では出土例が少ないという）。口縁部文様帯は縄文原体を 1～4 条程度、横位に巡らせる間隔の密な平行縄線、あるいは結束第一種の羽状縄文を 1、2 条巡らせるものなど。文様帯幅が広いものでは縄線を斜位に押捺して菱形や鋸歯状文を呈するものがある。

口縁部文様帯と胴部を分けるしきりとしての隆帯のないものが多い^{註8}。

胴部地文は、単軸絡条体 1 類による縦位撚糸文や縦走縄文が多い。結束羽状縄文との組み合わせでスダレ状を呈するものも多い。

館崎遺跡出土の復元土器を見る限り、底部はわずかに上げ底気味を呈する。

円筒土器下層 d1 式（報告書内掲載番号 27～192）の判断属性

堅穴住居跡や土坑内の廃棄層中から出土したものが 3 分の 1 を占めており、これらの一括出土物の復元個体を中心に諸属性を検証した。下層 d2 式以降の土器では堅穴住居跡等の覆土中に数十個単位で集中廃棄する例があまりみられないので、この廃棄パターンはあるいは下層 d1 式期の特徴であるのかもしれない（上層 a 式段階では主に沢に面した盛土の西斜面に集中投棄しているようである。また、数個体単位・複数型式混在での堅穴住居跡や土坑への散発的投棄は円筒土器上層式の末期まで続いていると考えられる）。

メルクマールとして、つとに指摘されているように文様帯幅の狭いものが多い。「文様帯幅は 3 cm 以内である」「2 cm 以下がほとんど」等、具体的かつ断定的に記載されているものもあるが、5 cm 近くに及ぶものがある^{註9}。

文様帯幅については、土器の大小によっても変わるため、一律に幅何cm以下とするより器高比何%以内という見方の方がより実態を反映するであろう。

文様帯は、古手のものでは前段の下層 c 式を引き継いで細い原体による縄線文 (27～29 等)、あるいは絡条体圧痕文を平行多段横環させたもの (40・41 等)、縄線を斜位に押捺して菱形を構成するもの (45～49 等) がある。ごく初期には入れ子状にした菱形の連続 (47～49・54 等) であるようだが、ほどなく間隔をあけて横環する (多くは 2 本組) 3 段の平行縄線と菱形文の両者が組み合わさり (50・53・55・56)、菱形が上下に分断されて、横環する縄線間を 2 段の三角文が巡るようなもの (58 等) が登場する。

話は少し逸れるが、この横環する三角文の連続が、あるいは斜位の短縄線による鋸歯状文になり、上層 a2 式で盛行する蛇行縄線になっていくのではないかとも思われる。上下に横環する縄線間に縦位の短縄線を充填的に付したもの (342・343・366・379～381・393～396 等) が上層 a1 式、斜位の短縄線を付して鋸歯状文や蛇行縄線を巡らせたものを上層 a2 式の指標属性とする定義が有力視されており、傾向としては確かにそうであるが、上層 a1 式においても鋸歯状ないし蛇行縄線を施したものが多くはないものの存在していた (375・390・392) と想定した所以である。ただ、上層 a1 式において横走する縄線間に縦位の短縄線が充填的に付されたものは一定数があり、それを上層 a1 式の指標属性の一つとみなすこと自体は間違っていない。

ほか、これに連動するかのように同じく間隔をあけて横環する (多くは 2 本組) 3 段の平行縄線間を斜位・縦位の連続縄線、あるいは刺突が巡るものも、登場する。このようないわばサンドウィッチ状の多層的構成はバリエーションを拡げながら最終的には上層 b 式ないし c 式まで続いていくとみられる (上層 b 式では三本組の平行縄線間を馬蹄形圧痕 (地虫状の縄圧痕) が連続的に付される)。

また、間隔をおいて短縄線を縦位に施し、横走する平行縄線を描くもの (69～73 等) がみられるようになる。細い縄線によるものがあることから、下層 d1 式になってごく初期のうちに現われる属性と考えられる。これは縦位の隆帯やその隆帯上に縦に付される縄線へと強調化され、突起の発達と連動する形で下層 d2 式、上層式へと発展的に引き継がれていくと考えられる。

口唇上、あるいは口縁部文様帯と胴部を描く微隆線上に斜位に縄や絡条体圧痕を連続押捺するものが徐々に多くなっていく (c 式にも少数が散見される)。初期のもの (118・119・129・171・172 等) では原体を押捺する間隔はまばらでやや間が開くが、やがてその間隔が密になっていく傾向 (133・134・137→150・162・166・167) が窺われる。この施文間隔の粗密は文様帯の中の平行縄線間を埋める斜位・縦位の短縄線の粗密と連動しているもの (49・61～63 等) も散見され、関連性が窺われる。ただし、施文間隔がまばらなものも一定数が残る。

文様帯と胴部との境に微隆線が本格的に巡るようになり、微隆線の上に刺突列を加えたもの (36) もみられる。文様帯との境に微隆線のしきりを設けないもの (27・28・42～46 等) もいくつかあるが、下層 c 式に近い d1 式初頭の資料であろう。文様帯と胴部との境に短い原体による羽状縄文を 1 条ないし 2 条巡らせているもの (45・46・53 等) もある。

胴部地文は絡条体を縦位に回転施文させた撚糸文が主流で、短い原体による羽状縄文の横環との組み合わせでスダレ状を呈するものや、木目状撚糸文、多軸絡条体の縦位回転施文などがみ

られる。とりわけ多軸絡条体が一定数の割合で施文されるのは下層 d1 式～d2 式に限定できる特徴と言えよう（例外的には上層 a2 式に類例があり、下層 c 式にもある）。

器形は胴部がやや膨らんだ器形とまっすぐ立ち上がるものがある。「しきり」としての微隆線の有無に関わらず初期のものでは胴上部から口縁にかけて直線的であるが、やがて幅狭い口縁部文様帯が屈曲する、あるいはバンド状に隆起した低凸帯（153・167～170）等、文様以外でも口縁部を際立たせようとする意識性が様々に顕在化する。そうして口縁部の屈曲の度が強まり、下層 d2 式、上層 a 式へと口縁部が大きく開く器形へと変化していく。

底面は上げ底気味のものと、ほとんど平らのものがある。またごくまれに高台をもったものも存在する。

土器内面は非常によく研磨され、鈍い光沢を呈するものが多い。

円筒土器下層 d2 式（報告書内掲載番号 193～220・222～323・325・326）の判断属性

口縁部が明瞭に屈曲して外反、大きく開き始める段階である。一方で文様帯が带状に隆起した低凸帯も d1 式に引き続いて少数が認められる。また、口縁部文様帯に段状のくびれが巡る特徴的なもの（233～237・239・240・309 等）もみられる。

文様帯幅については下層 d1 式から上層式にかけて口縁部の外反と連動してひろがっていくと説明されるものが多いが、館崎遺跡の復元土器を観察した限りでは下層 d2 式後半期から上層 a1 式前半期にかけてはむしろ狭いものが優勢である。上層 a1 式の項で後述する。

器形的には全体に径が拡がり、徐々に寸胴化・大型化する傾向が窺われる。また、比較的小さい底部から口縁に向けて直線的に開く器形のものもある。胎土中の繊維が減ってきて、ほとんど含まないものも存在する。

文様帯の基本的な施文モチーフは d1 式段階から大きく変わらないが、原体は総じて太くなる。粘土紐を縦位、斜位に区画的に貼りつけるものや、平行縄線間や隆帯上に刺突するなど新たな要素が加わり、装飾的要素は d1 式より高まっている。貼付に関しては区画的なものの他、主に山形突起下に 6 字・9 字、瘤状・ボタン状、鼓状などアクセント的に配したものもみられる。

文様帯の装飾性が増してゆくに伴って波状口縁、山形突起についても徐々に大きくなる傾向が窺われる。山形突起には左右非対称の、傾斜が片流れになった特徴的なもの（239・254・274・288・289 等）が一定数現われるようになる（上層 a 式で盛行する）。山形の小突起が二股に割れたり、肥厚したりするものもある。肥厚した山形小突起の側面が浅くくぼむものも少数ながら確認されている。この浅いくぼみは、突起上に一方向へ押し引いたような浅いくぼみのヴァリエーションであり、円筒土器 d 式期、サイベ沢Ⅶ式期まで属性として存続している。

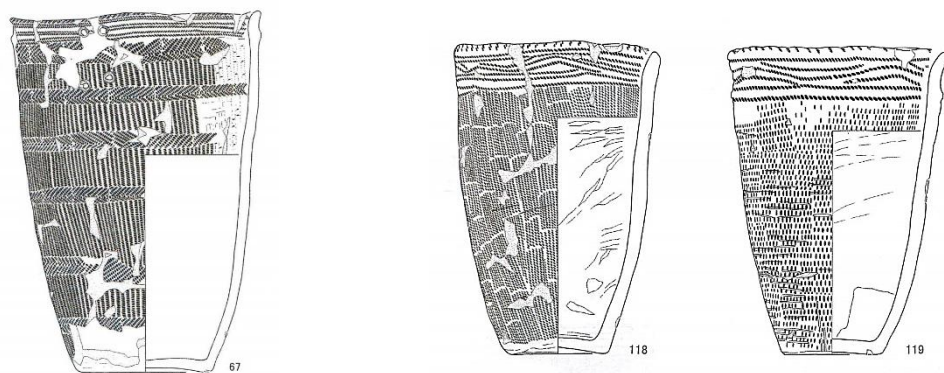
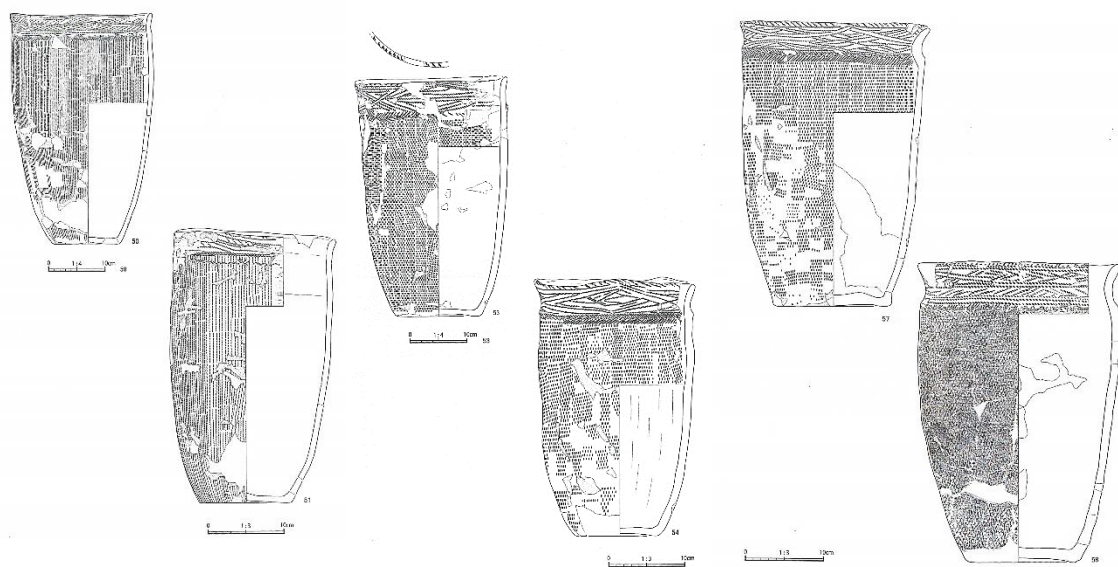
また、胴部に縦位の綾繰文を施すものが出現する。口縁部に山形突起を持つものではその波頂部の直下に縦位の綾繰文が垂下する（254・255・288・308 等）。これは上層 a 式に引き継がれ、特に上層 a1 式で盛行する。

胴部地文は多軸絡条体が全体の 4 分の 3 を占めた。これは地域性もあるのかもわからないが、過去に津軽半島の下層 d2 式について三宅徹也氏が調べており、館崎同様の傾向を指摘している（三宅 1981）。

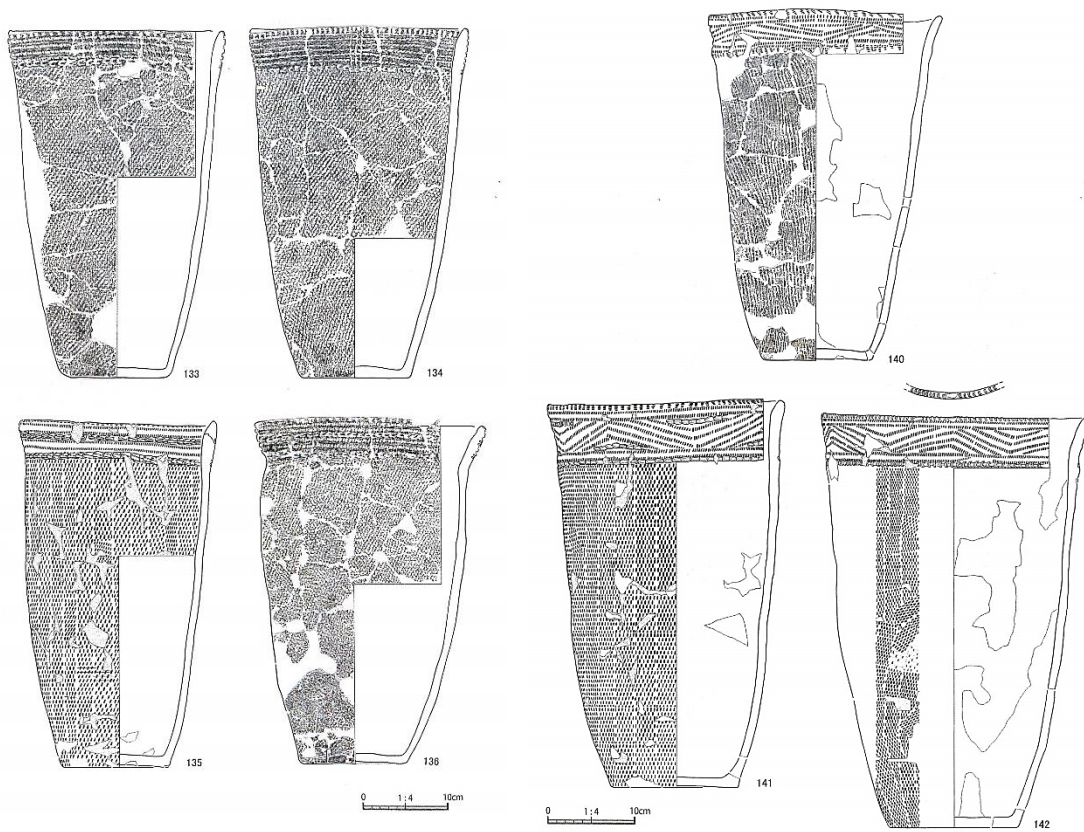
底部下端に 1～2 cm ほどの無文帯のあるものが下層 d2 式の特徴とされる（茅野 2008）が、館崎遺跡の土器では特徴と言えるほど顕著には認められなかった。



円筒土器下層 c 式 (1~4・9・10)



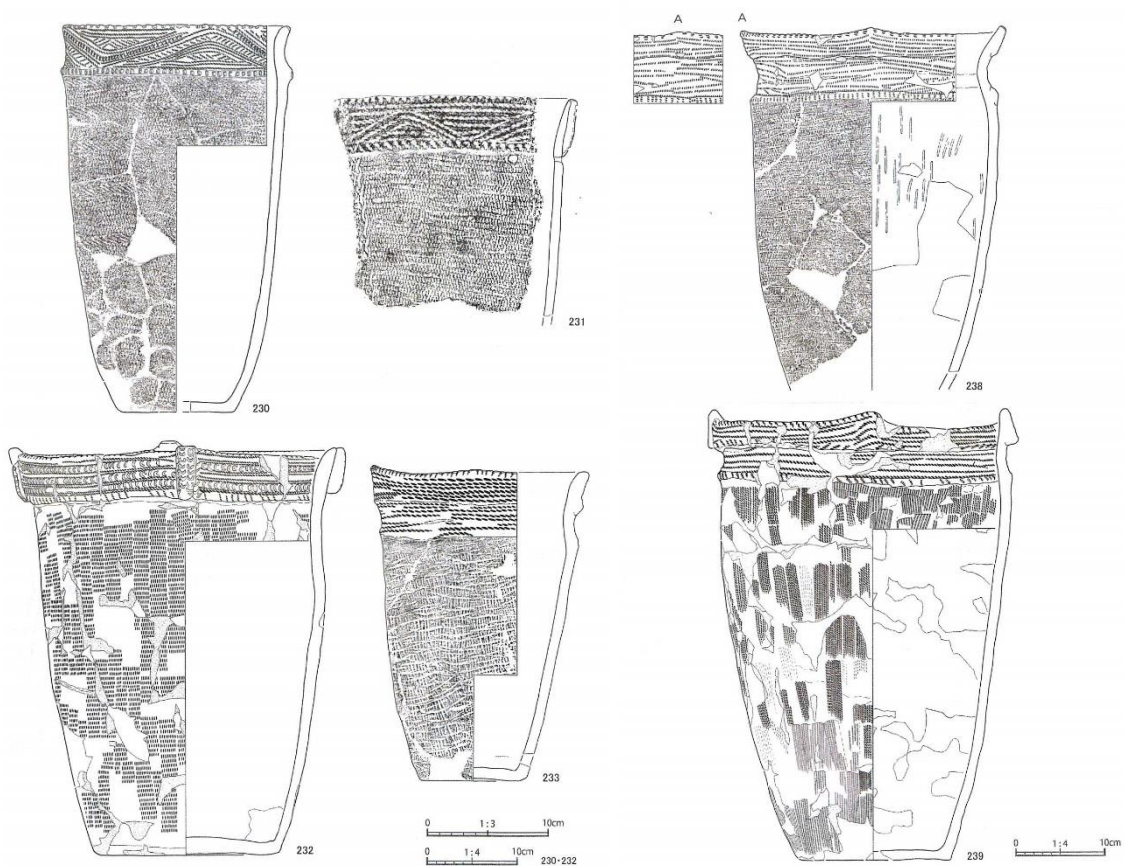
円筒土器下層 d 1 式前半 (50・51・53・54・57・58・67・118・119)



下d1 後半 (133~136・140~142)



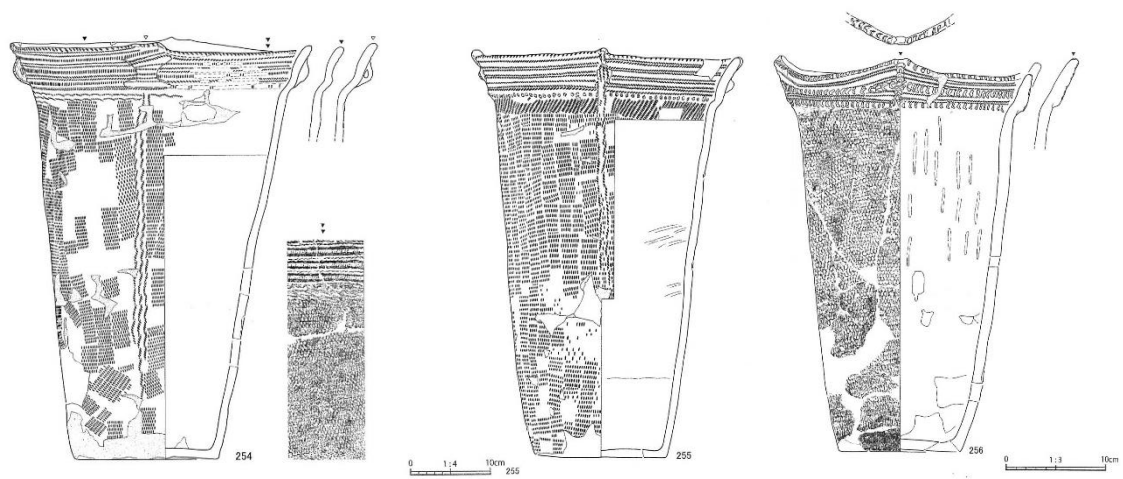
下d1 後半 (165~167・224~227)



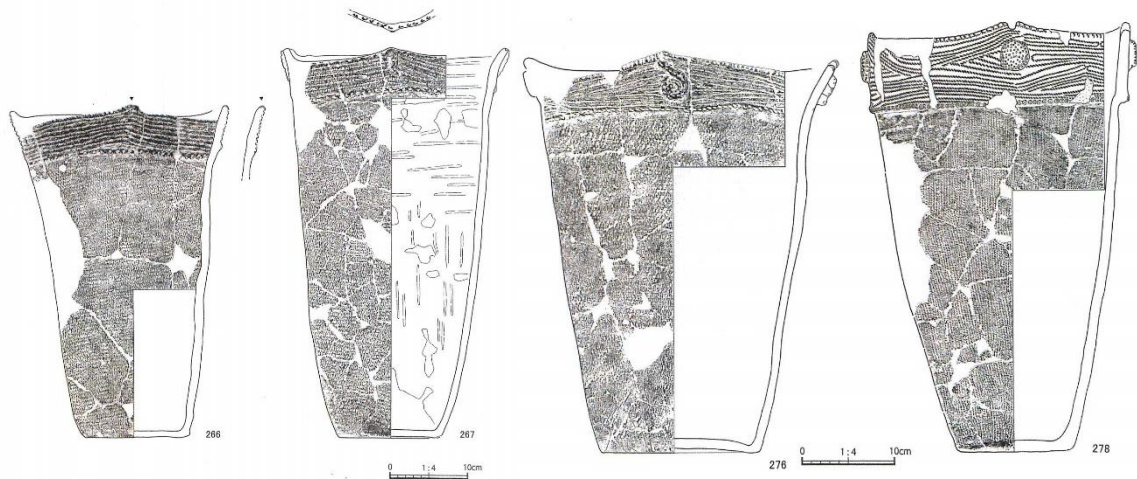
下 d 2 前半 (230~233・238・239)



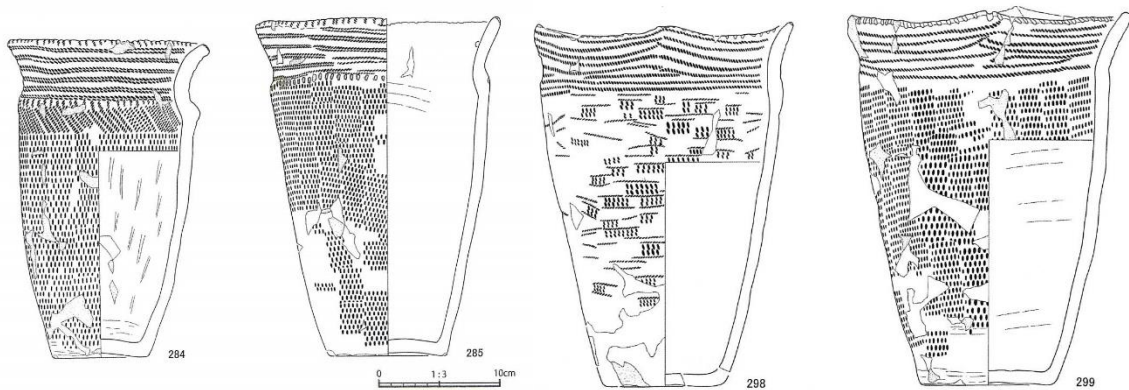
下 d 2 前半 (243~251)



下d2 後半・末? (254~256)



下d2 後半・末? (266・267・276・278)



下d2 後半・末? (284・285)

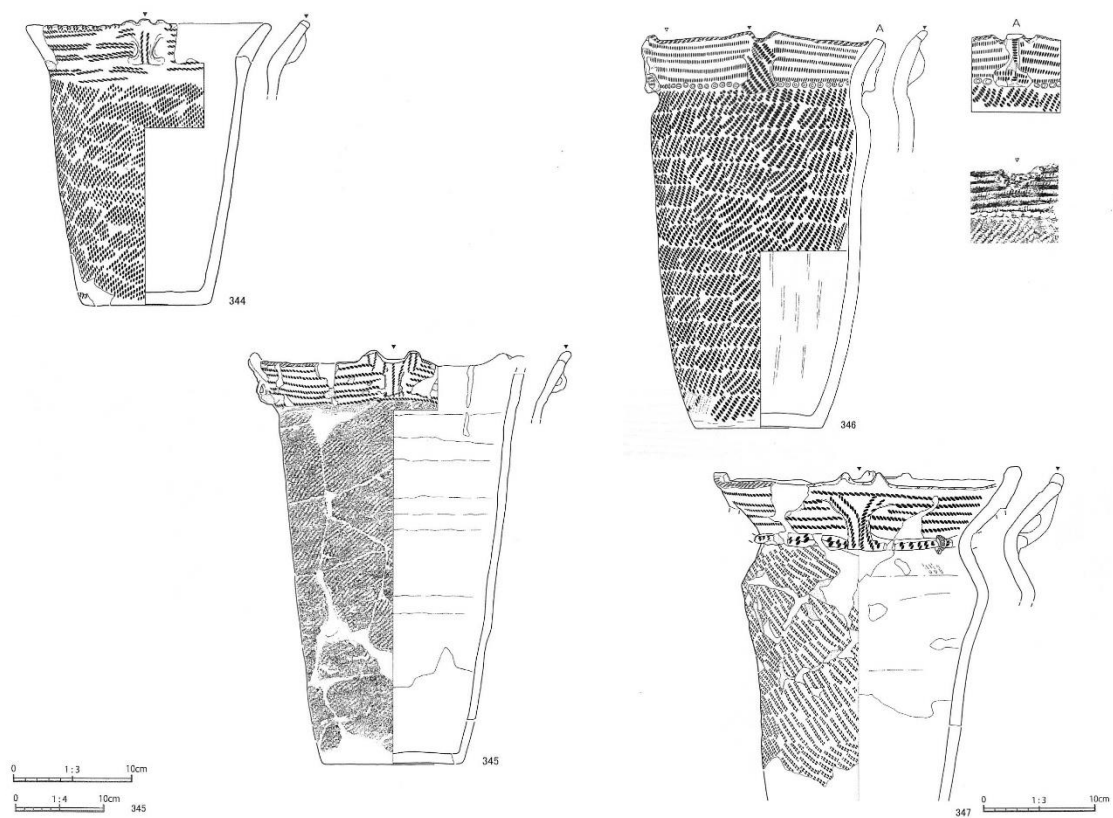
下d2 後半・末? (298・299)



円筒土器上層 a1 式初頭 (327~333) 文様帯幅が狭い 文様帯と胴部の境に横環貼付がない。



上 a1 前半 (334~337・340~343) 文様帯と胴部の境に横環貼付がない



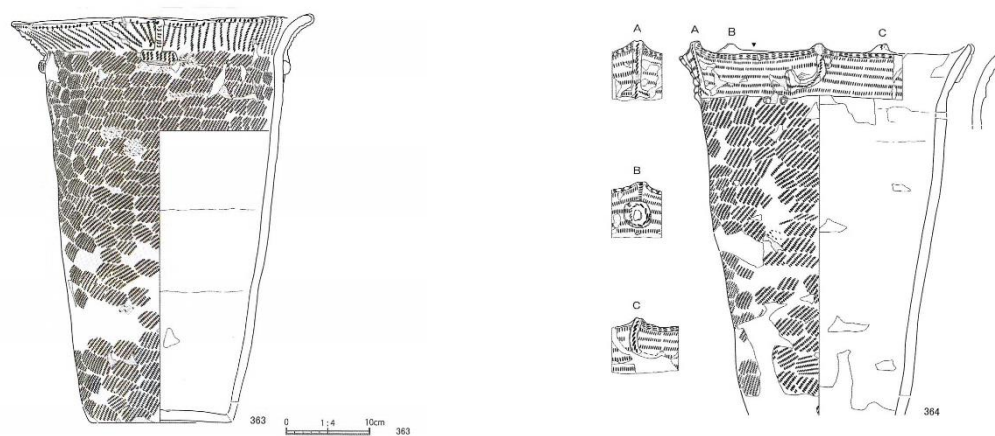
上 a1 前半 (344~347) 文様帯と胴部の境に横環貼付がほとんどない。(347はある)



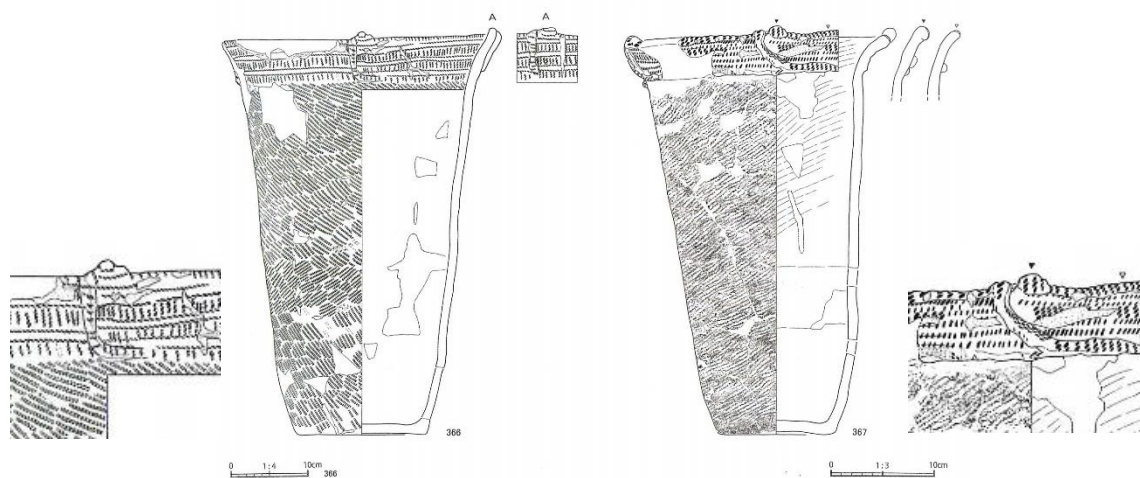
上 a1 前半 (348~353) 文様帯と胴部の境に横環貼付がほとんどない。



上 a1 中頃 (356・357・360~362)



上 a1 中頃 (363・364)



上 a1 後半 (366・367)

円筒土器下層 d2 式と上層 a1 式の境界 下層式と上層式を分かつ判断属性

下層式と上層式の違いとしては、胎土中の植物繊維の有無、口縁部文様帯の開き、突起の大型化、貼付による文様帯の盛行等が挙げられるが、これらはいずれも下層式の終末段階から上層式の初頭にかけて徐々に変化・発達していくものであり、それぞれ下層式・上層式の違いを表す象徴的な指標属性でありながら、線引きの基準としては扱い難い側面があったように思う。

こうしたことを念頭に置きながら館崎遺跡出土の土器を観察した結果、上層 a1 式の初頭期、下層 d2 式にみられた三角形ないし鋸歯状のモチーフ（224～227・230・231・236）が一時的に用いられなかったとみられる点が、指標属性として着目された。三角形のモチーフが漸減していく過程は下層 d2 式の後半～末期とみられる土器においても窺われている（243～251）。

上層 a1 式最初頭とみられる段階において平行縄線（絡条体圧痕）の横環するもの（327・329～336・344～361）が多いが、バリエーションとして平行縄線の縦と横が組み合わさり格子状になったもの（341）や縦位の縄線が口縁に連続的に施されたもの（363）もみられる。そしておそらくは、こうしたモチーフが上層 a1 式のメルクマールとしてよく言われる、横走する縄線間に縦位の短縄線を密に施文した多層的（サンドウィッチ状）な構成（342・343、366・379～381・386・387・393・394～396）へ発展していくものと推考される。なお、上層 a1 式においては横走する縄線間に刺突列を巡らせたもの（339・340・362・368・369・371・372・373）も一定数がある。

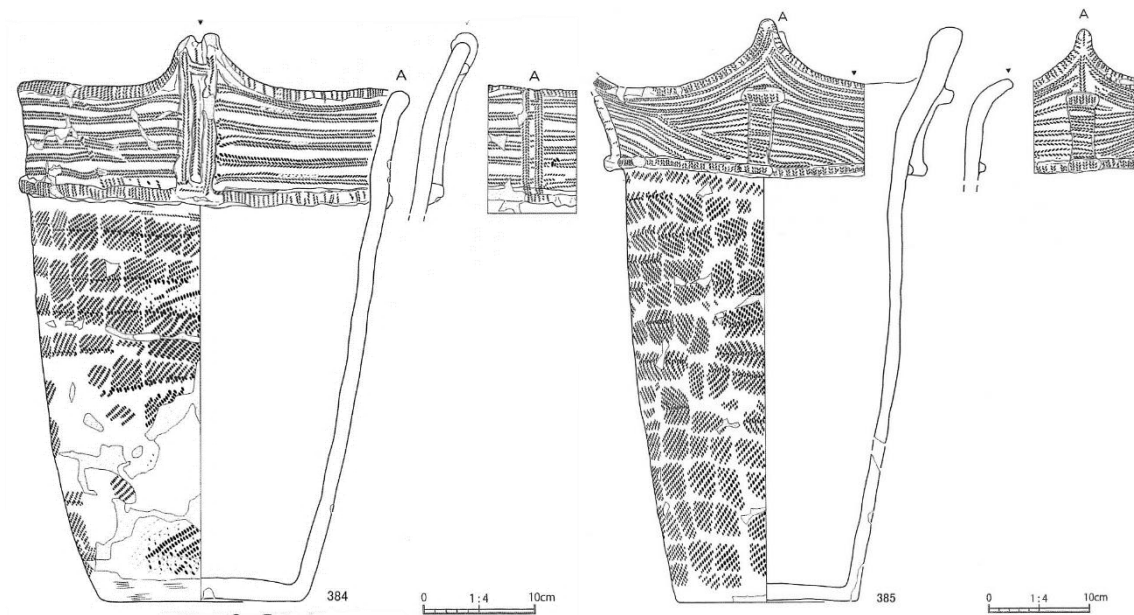
また、古くから下層式と上層式の違いとして指摘されてきた属性であるが、胴部地文が絡条体による縦位回転施文（撚糸文系）主体から縄原体による横位回転施文（縄文系）主体への変換（三宅 1978）について、その原則的な妥当性が再確認された。上層 a1 式の 9 割以上が斜行縄文を地文としている。下層 d2 式でも斜行縄文を地文とするもの、上層 a 式でも撚糸文系が用いられるものがまったくないわけではないが、自分の感触としては、かなり少ない、例外的なものである。上層 a2 式にも撚糸文（510・588）や多軸絡条体（481）など縦位回転施文によるものが少数あるが、これはまた別の成因によると考えられる（拙稿 2020）。胴部地文については、比較的短期間での変換と看取され、下層式と上層式を分かつ指標として有力であるよう考えられる。

胴部地文は 8 割強が LR の単節斜行縄文であった。複節の斜行縄文は 5 個体が確認され、うち 4 個体が RLR、右撚り系であった。単節と複節で原体の撚りを使い分けしている可能性が窺われる。また下層 d2 式に引き続き、縦位の綾繰文を施したものがある（221・329・357・362・400 等）。縦位の綾繰文は突起の直下に垂下するため、突起と連動した施文属性と言えるであろう。

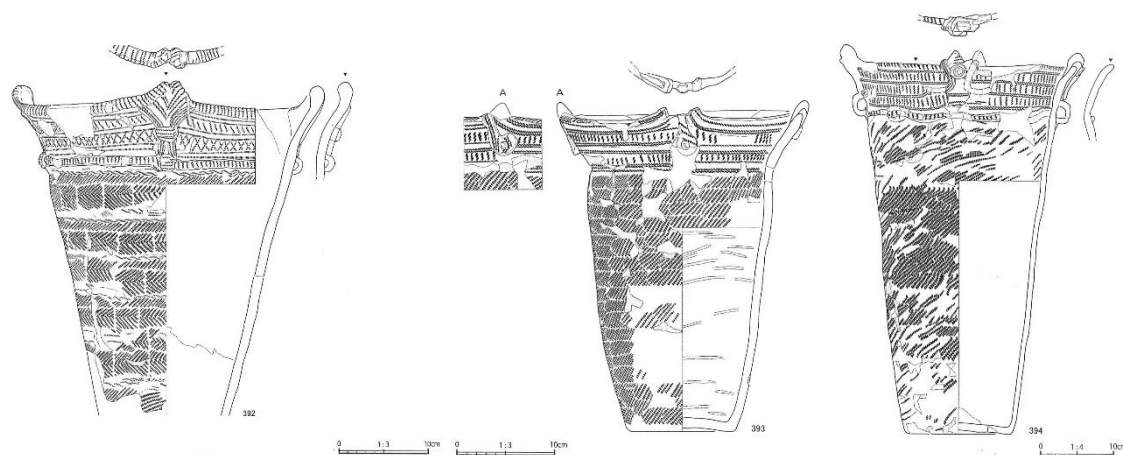
また、下層 d1 式から下層 d2 式そして上層 a 式へと「文様帯幅が広がる過程」という文脈に沿って説明されるものが大半であるが、館崎遺跡で出土した資料を観察した限りでは、下層 d2 式の後半段階から上層 a1 式の前半段階において文様帯幅の狭いもの（下層 d2 式後半 229～232・243～276・290・295～299）（上層 a1 式前半 327・329～333・338・339・341・344～357・360～374・400・402・408・409）が優勢である。下層 d1 式のような極端に文様帯幅の狭いものではないが、下層 d1 式から上層式に向けての「文様帯幅の広がり」が多く研究者に繰り返し指摘されているような直線的なものでないことは明らかである。大まかには、下層 d1 式（狭い）< d2 式前半（広い）> d2 式後半（狭い）・a1 式前半（狭い）< a1 式後半（広い）という変遷であろう（さらにいえば上層 a2 式後半段階から b 式にかけては文様帯幅が狭まり^{註10}、上層 b 式後半からは再び広がり出す。文様帯幅は円筒土器を通じて交互に広がり狭まりをゆるやかに繰り返しているのである）。

下層 d2 式末～上層 a1 式前半の範囲と類推する一つの判断指標（属性）として、この「文様帯幅の狭まり」は有効である。ただし、下層 d2 式後半には文様帯幅の広いものも狭いものと共通する施文モチーフで確認されており（233～240・277～280・283～285・301・302・304）、上層 a1 式前半段階でも同様に文様帯幅のあるもの（334・335・340・342・343・358・359・398・401）が一定数共存しているため、これだけで判断することは危険である。

なお、太い貼付の横環によって口縁部文様帯と胴部の境を明瞭に画する土器については、上層 a1 式の後半段階から徐々に普遍化する。逆を言えば、口縁部と胴部の境を画する横環貼付がほとんどみられない点が、上層 a1 式の前半段階を示す判断属性の一つとして挙げられるであろう。



上 a1 末・あるいは上 a2 式前半？（384・385）突起が急角度に突き出る。口唇と隆帯の肥厚。



上 a1 末・あるいは上 a2 式前半？（392～394）

上層 a1 式（掲載番号 327～433・221・324・904）から上層 a2 式（掲載番号 434～639・810・811）にかけて—指標属性の漸変過程と脈絡—

下層 d2 式段階では口径と底径差が少ない「筒に近い寸胴器形」が多いが、上層 a1 式では底径が小さくなり、底部から頸部・口縁部にむけて開く器形が多くなる。前半段階の傾向として、文様帯幅が狭いものは頸部で大きく屈曲して口縁部（文様帯範囲）がさらに開くものが多く、文様帯幅が広いものでは底部から口縁部まで直線的に開く。これは、文様帯幅が短いものしか開いた口縁を支えられる技術的耐性が備わっていなかったからと考えられる。逆に言うと、下層 d2 式の末から上層 a1 式の前半期において、文様帯幅の狭い土器が盛行したのは、口縁部（文様帯）を大きく開かせたいという志向があったために、狭くせざるを得なかったのかもしれない。上層 a1 式においては開いた口縁部の文様帯幅が広がっていく過程で、屈曲した頸部の直下が横に大きく膨らんだもの（346・347・361・362・390・395・433）が一定数みられるが、これも大きく開く口縁部を支えるためにそう作らざるを得なかったからであろう。

口縁部は波状・山形小突起を持つものと平縁のものがあるが、波頂部を持つものはもちろん平縁でも縦に付した縄線（340・343 等）や隆帯（338 等）によって 4 単位を意識しているものが見につく。

波頂部を持つものでは先端が小さく割れたもの（330～332・345～347 等）も一定数ある。先端が割れた谷部の下に小ぶりの把手状突起・橋状把手（344～347・351・354）、隆帯・貼付（352・353）、縄線（345）を縦位に付すものが多く目につく。さらにその小突起直下の胴部地文には、前述のとおり、縦の綾線文を施すもの（221・329・357・362・400 等）がある。

把手状突起・橋状把手など幅があるものでは、その上に縦位の縄線を付したもの（344・347・350～353）もある（上層 a2 式では横位に付される）。次いで先端が小さく割れた山形突起の左右波頂部から縦位の隆帯（貼付）が垂下するもの（357）や、山形突起の波頂部を挟み左右それぞれに縦位の隆帯（貼付）を付すもの（356）も登場してくる。また、上面観が四角形の土器で、それぞれの角部に太い隆帯を垂下させたもの（221）もみられた。

こうして当該期、特に上層 a1 式前半の諸属性を俯瞰すると、縦位（上下を貫く意識性）の施文が非常に顕著であったことが理解される。

上層 a1 式後半段階になると徐々に山形突起が大型化し、それに連動するかのようには口唇の肥厚化、口縁部文様帯と胴部とを分かつ横環隆帯が太く厚く、視覚的に立体感が増すようになる（382・384～388）。

そして大型化した山形突起によって文様体内を複数段横走する平行縄線にも変化が生じる。急角度に突き出した突起の頂部に向けて斜位に付しているため、平行施文が随所で崩れ、縄線と縄線が重なり合ったもの、空いてしまったスペースを埋めるための施文等、雑然としたもの（387～389）が現れるのである。そして、この傾向は上層 a2 式になると指標属性としてもよいくらいに増える（436・438・439・465・466・478・479・505・506・511・512・514・548 等）。これは前述した波頂部（割れたものでは谷部）から弧線状の貼付を斜位に付すものと同一文脈のモチーフとして理解される。すなわち鋭角に突き出た突起を起点（依代）とし、蛇体状の観念が螺旋状に巻きついていく「蜷局（トグロ）」のモチーフの表徴・発現である。さらに踏み込んでいえば、土器が輪積みによる製作物であることとも『類感呪術』の同一線上において結びついていた可能性が窺われる。

いずれにせよ、下層 d 式では波状・山形小突起を持つものでも三角形のモチーフの組み合わせ

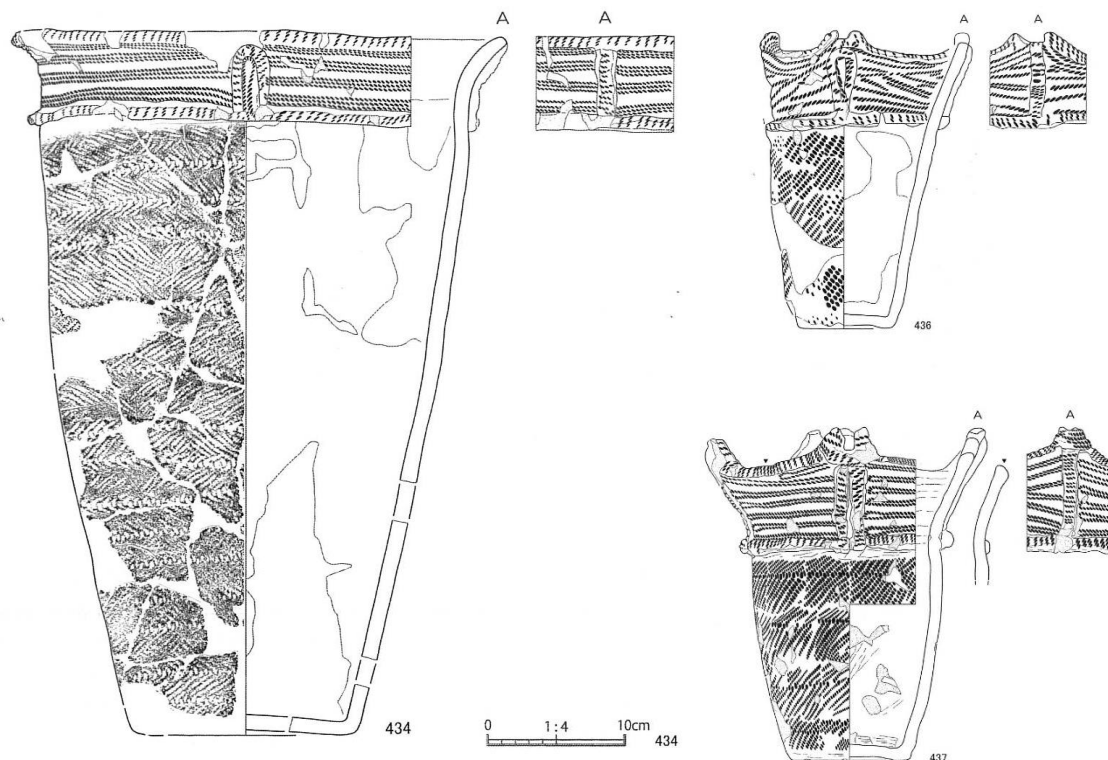
などで、文様が極力かぶらないように意識されていたもの（236・243・244・249・257・258等）が、上層 a2 式前半段階では対照的である。そして大きな山形突起をもたないものであっても、文様体内の文様が不規則・不均一なもの（518・526・528・549・581等）がみられるようになる。

上層 a2 式の属性（報告書内掲載番号 434～639・810・811）

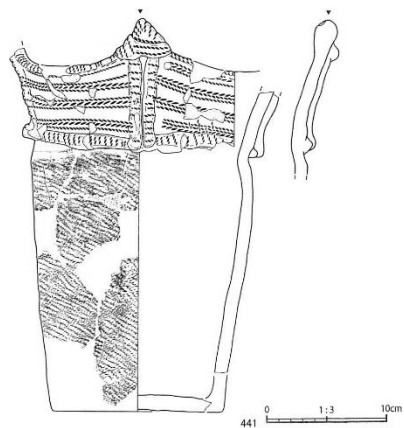
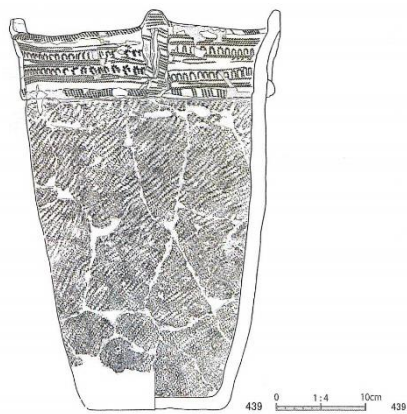
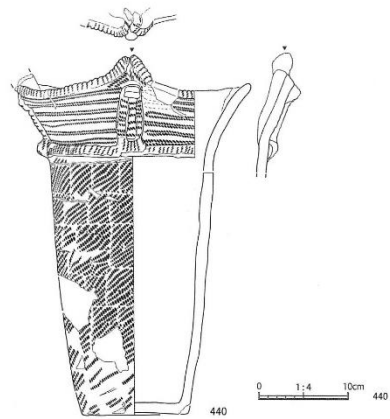
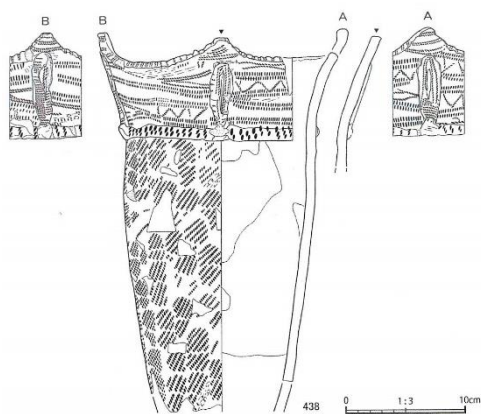
館崎遺跡の整理報告段階で上層 a2 式は、従来言われているとおり文様帯を鋸歯状ないし波状縄線が巡るものの他、突起の大型化、山形突起の下に隆帯により区画を形成するもの、貼付の肥厚化等を主な指標属性とした。観察結果から推考される諸属性の変遷過程を以下に紹介する。

口縁部文様帯が幅広になり、4 単位の突起を持つものと平縁のものがあるが突起を持つものではより大型化する。突起は初期のものでは山形（三角形気味）のものが多く、口縁部文様帯を強調的に縁取るかのように口唇及び口縁部と胴部を画する横環貼付の肥厚（肉厚）化が顕著になる。突起を持つものも持たない平縁のものも、いずれともこれらの肥厚化に連動して反り返りながら開く形状（434・446～452・454・456～459・462・464等）が目立つようになる。この基準で上層 a2 式の属性とみるならば、報告書内で上層 a1 式の末とした 357・382・384～388・392 あたりは上層 a2 式に組み込むべきであったかもしれない。同様に上層 b 式としたものについても、703・706・707 あたりは、この段階のものを誤認している可能性がある。

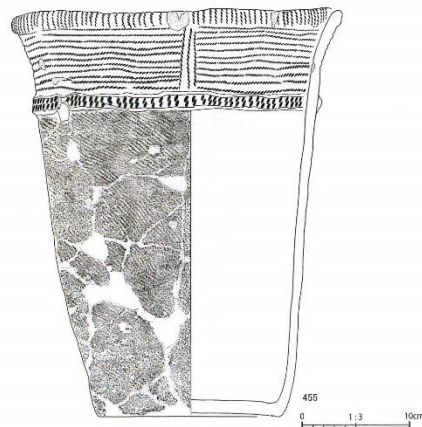
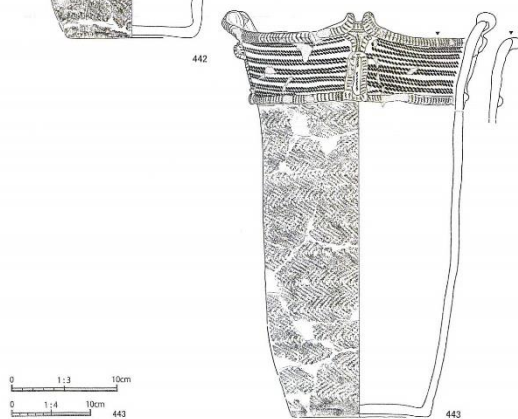
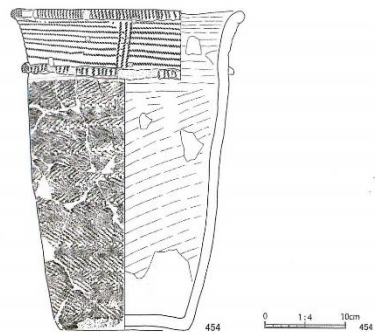
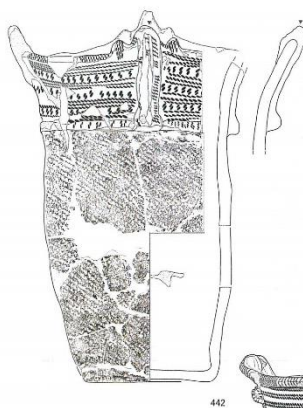
山形の突起を有するものでは、上層 a1 式の末期段階で先端が浅く割れ左右の波頂部から縦位隆帯が並列垂下するもの（382～385・388・391・392等）が現れている。突起直下に 2 本の隆帯が隙間なく並んでいるもので、隆帯で区画したスペースが発生していないこと、加えて縦位短縄線の充填施文があることなどから報文中では上層 a1 式としたが、これについても隆帯や口唇の肥厚に着目するなら、あるいは a2 式とすべきものかもしれない。



円筒土器上層 a2 式初頭？（434・436・437）



上 a2 初頭 (438~441)



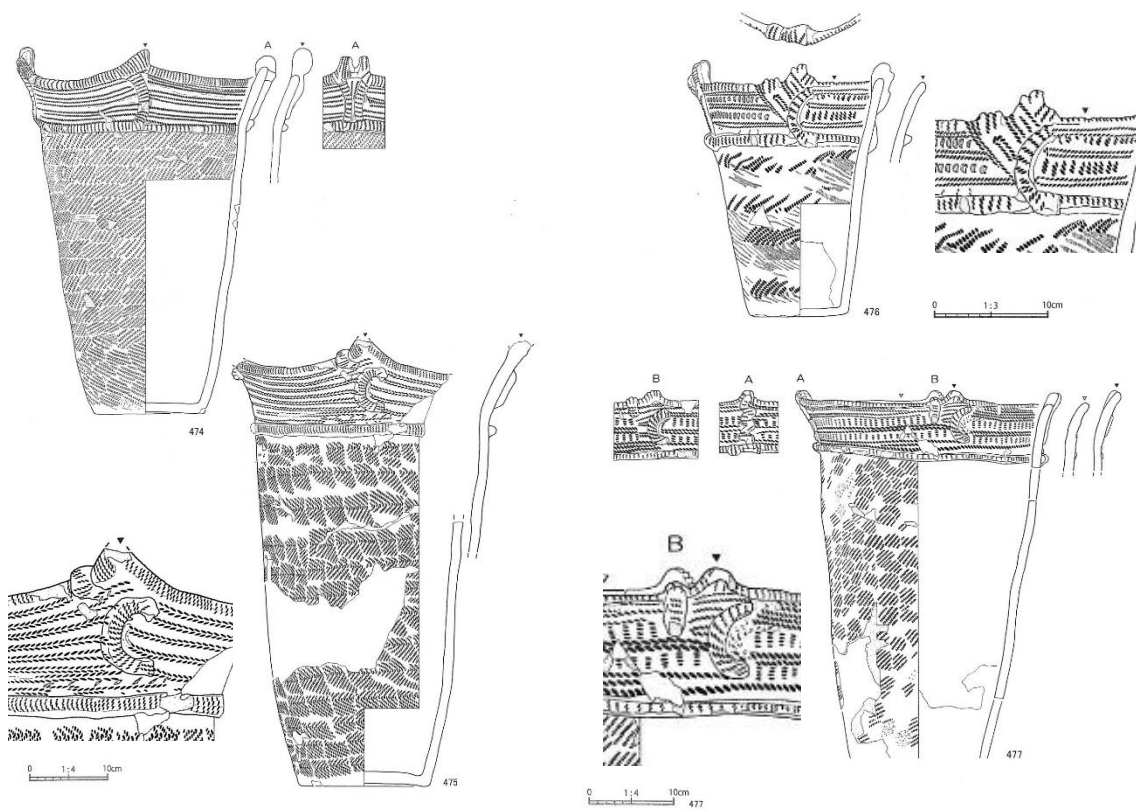
上 a2 初頭 (442・443・454・455)



上 a2 前半 (462~464・468・469)



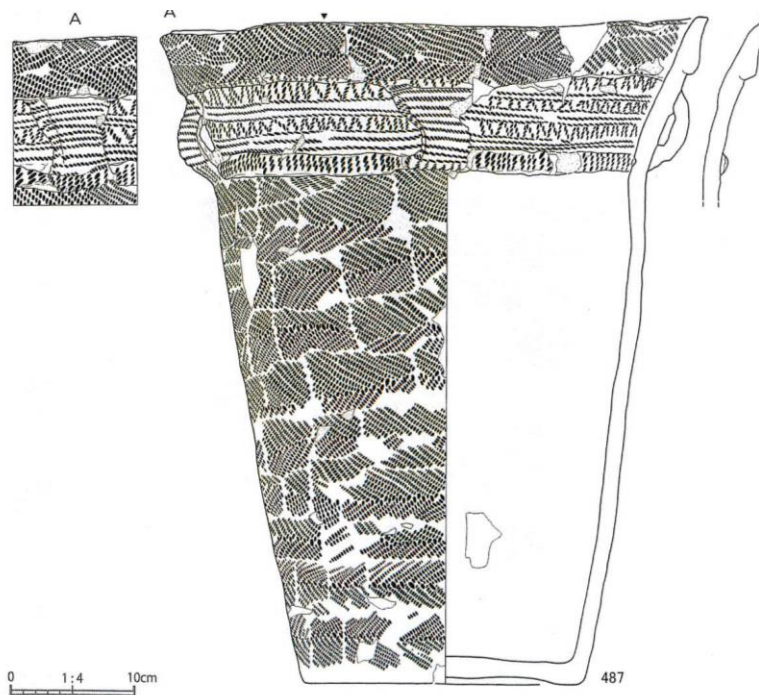
上 a2 前半 (470~473)



上 a2 前半 (474~477)



上 a2 前半 (479・480・486)



上 a2 前半 (487)

上層 a1 式は縦位縄線、上層 a2 式は鋸歯状あるいは波状（蛇行）縄線という属性は、視覚的にとてもわかりやすく、判断指標として大きくは間違っていないと思えるが、文様の要素より造形的要素の方が型式を判断する属性としては常に優先すべきであろう。馬蹄形の縄圧痕を半截竹管状工具による刺突で代用することや、貼付による胸骨文のモチーフを沈線で代用するようなことはあり得ることであり、そうした可能性がある要素を、型式差（時間差）を示す指標属性にすることは危ういと考えらる。

また、先端が左右に割れた山形突起の谷部下には上層 a1 式末期から a2 式初頭にかけて幅狭の楕円径・逆 U 字状の貼付が付せられたもの（395・434・435～440・442・443 等）も目につく。いずれとも上述したような平行垂下する縦位貼付から派生的に変化したものと考えられるが、a2 式前半段階では 2 本の縦位貼付も引き続き併存している（444・445・499・500 等）ようである。いずれにせよ『閉じ』た状態を示すもので、上層 a2 式後半段階で盛行する区画帯という『開き』には至っていない。

波状・山形小突起を持つものについては、上層 a1 式の後半段階で波頂部（割れたものでは谷部）から J 字（弧線状）の貼付を斜位に付すもの（364・368）と、波頂部ではなくその横を起点としたもの（366・367）が現れているわけだが、上層 a2 式で文様帯幅が拡がり突起が発達するに従い後者のほうが主流化していることが窺われる。

すなわち上層 a2 式段階になると、まず、口唇と頸部の横環貼付が弧線状の貼付で連結するもの（478～480）があり、連結だけでなく上端が口唇内側にかかるもの（503・505・506）がある。これに関して上端部が口唇にかからない C 字状の貼付（471～477）、下層 d2 式段階から上層 a1 式にかけて散見される 6 字状・9 字状貼付（276・296-下層 d2 式 361・362・373・393 等-上層 a1 式）についても、おそらくはすべて同じ文脈上の指標記号、すなわち一連の「蜷局（トグロ）」のモチーフの省略形と解される。

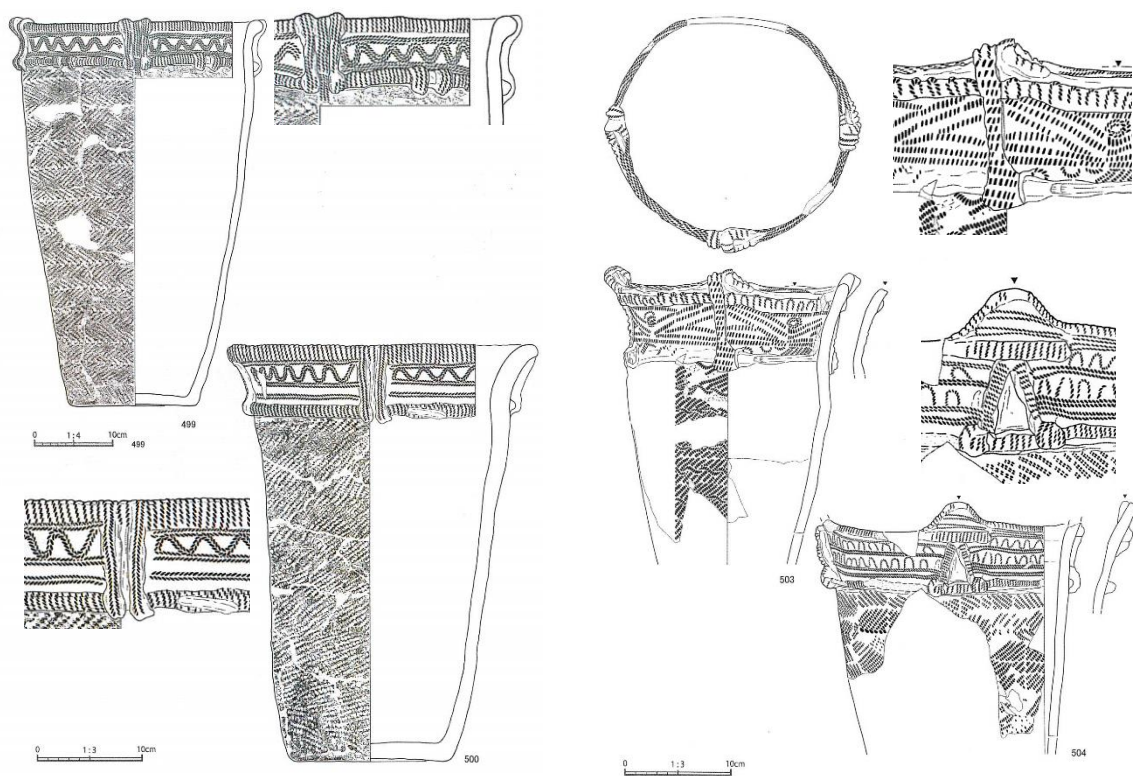
弧線状の貼付の上端が突起横に口唇内面に掛かるようフック状に施され、突起下を斜位に横切り、下端が口縁部文様帯と胴部を分かち横環貼付に結びつくものが顕在化しているわけだが、これが上述したような、巻きついていく「蜷局（トグロ）」のモチーフの延長線上の造形ではないかと推考されるときに、上層 a1 式の末期段階から上層 a2 式の前半段階（一部後半段階に及ぶ）にかけて貼付同士の交点が瘤状に肥厚する（383・391・392・396＝上層 a1、437・438・440～442・468～470・478～480・504～507・513～519 等＝上層 a2）ものが多くみられていることについて、改めて着目されてくる。

この貼付交点における瘤状貼付が指標記号として意味するもの。それは、蛇体状観念の交合と妊娠ではないかと個人的にはみている。突起から一本垂下する縦位の貼付文で横環貼付との交点だけでなく、瘤状隆起が連続（8 個？）するもの（469）、肥厚した口唇と頸部を横環する貼付が瘤状に連続隆起しているもの（552・553）もみられるが、多産を暗示する指標記号的な造形の可能性が想定される。他には横環貼付との交点だけでなく口唇との交点で肥厚するもの（517）もあるが、意味的には同様のものとして受け止められる。上層 a2 式の後半段階においては、突起が鏡餅状ないし冠状を呈するもの（512・541・576・592・593 等）が散見されるようになるが、これらも「蜷局（トグロ）」のモチーフの造形が省略記号的に造形されたものと考えられる。

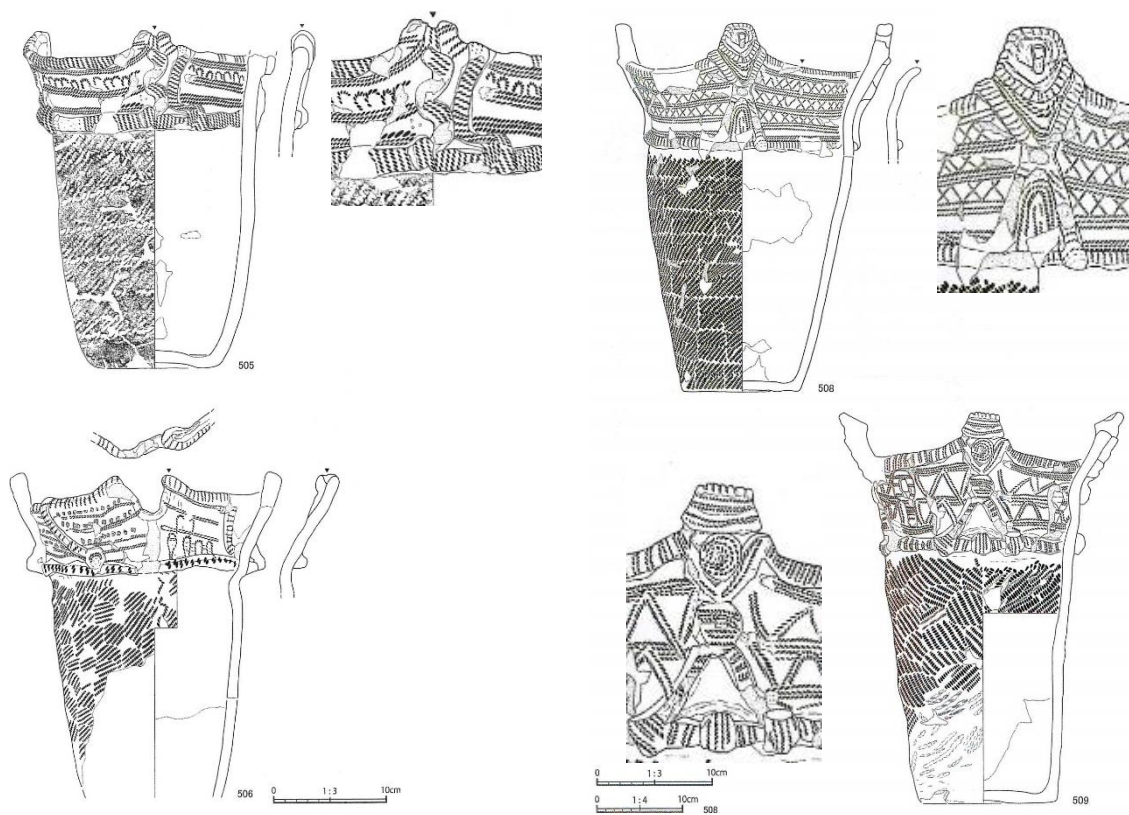
上層 a2 式後半段階においては、ほかに文様帯内を縁取り画する太い貼付が 2 本並列するもの（544・546～548・559・592）も散見されているが、同様に蛇体状観念の交合を抽象記号的に表現した可能性が考えられることを併せて付記したい。平縁の土器でも直線的に垂下する縦位貼付として同様のもの（499）がある。



上 a2 後半（489～494）



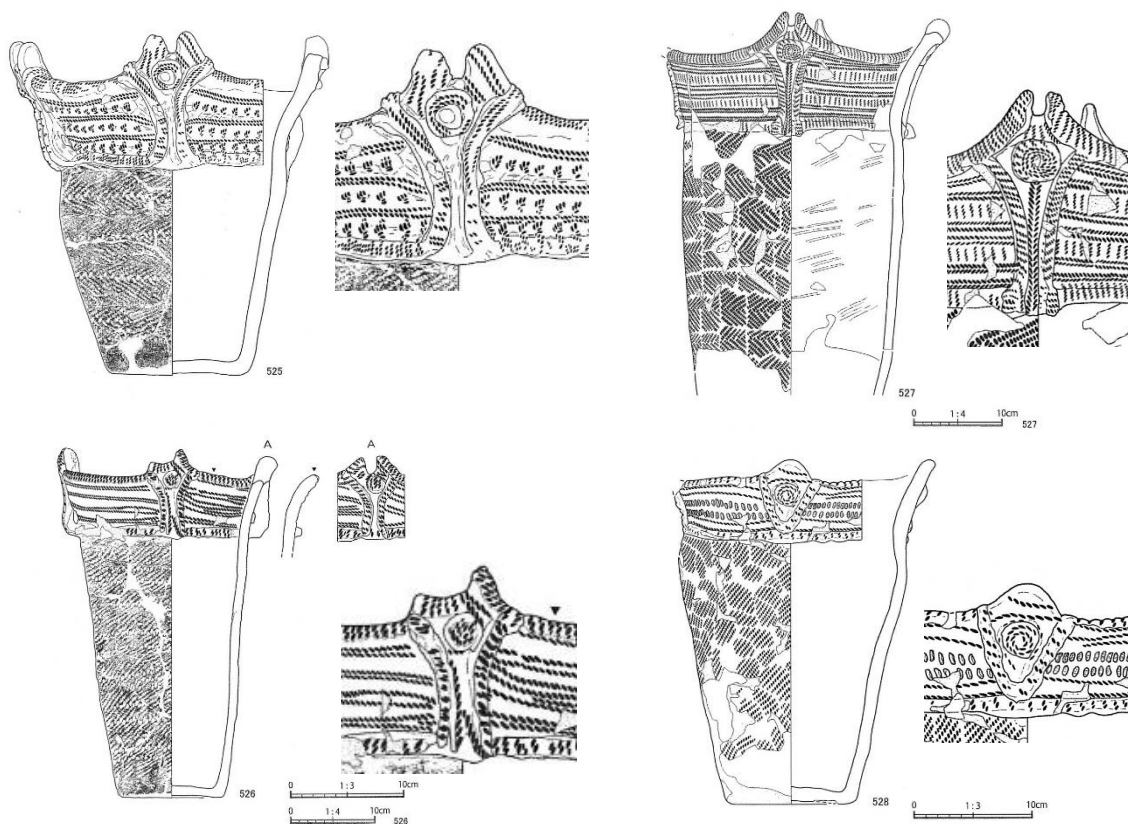
上 a2 後半 (499・500・503・504)



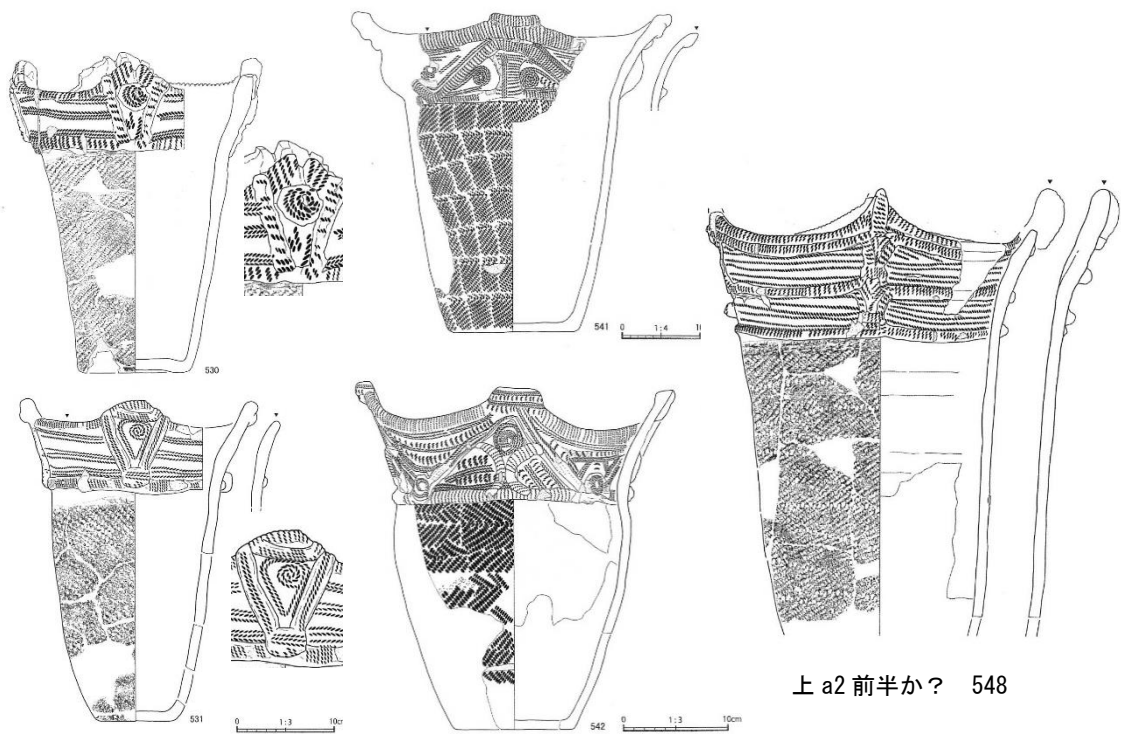
上 a2 後半 (505・506・508・509)



上 a2 後半 (514・515・520・521)

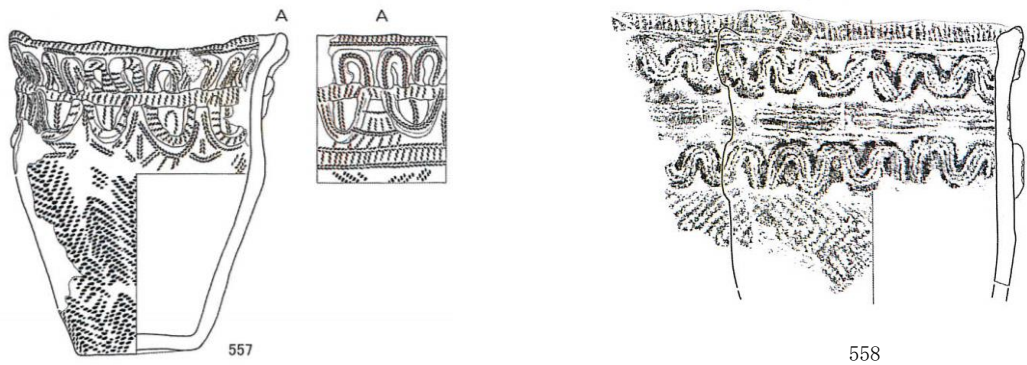


上 a2 後半 (525~528)

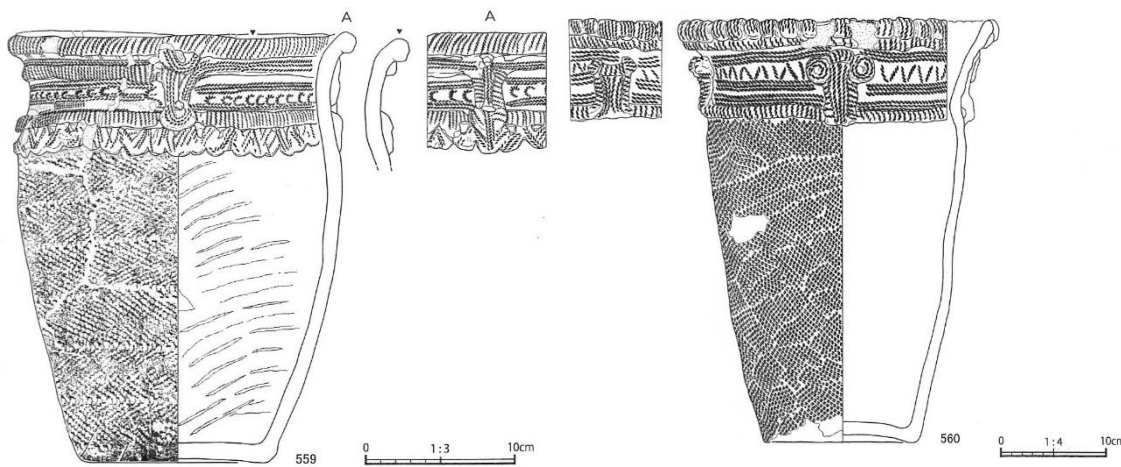


上 a2 前半か？ 548

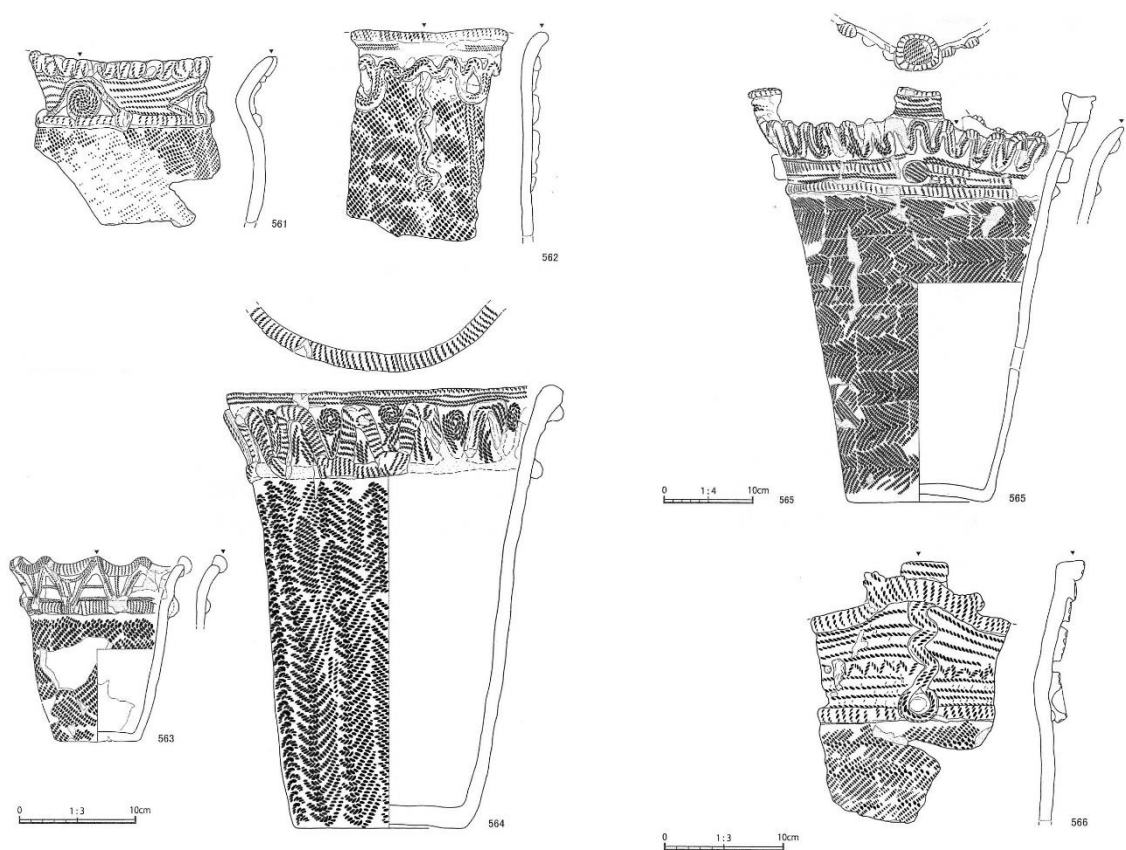
上 a2 後半 (530・531・541・542)



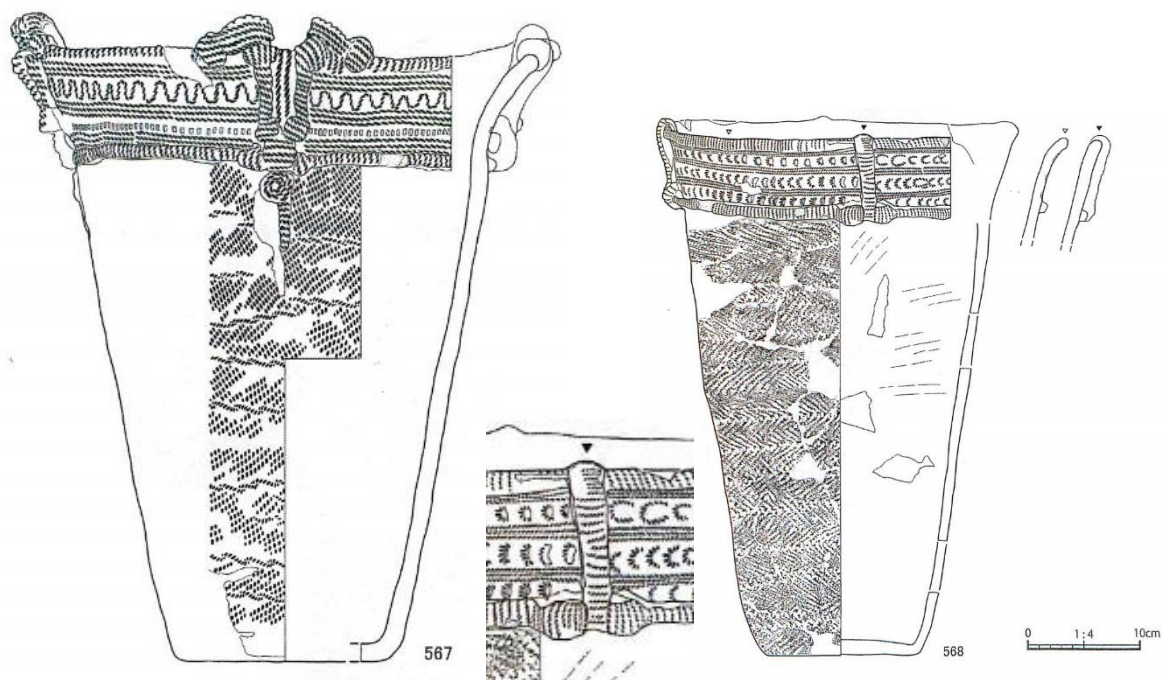
上 a2 後半・末期？ (557・558)



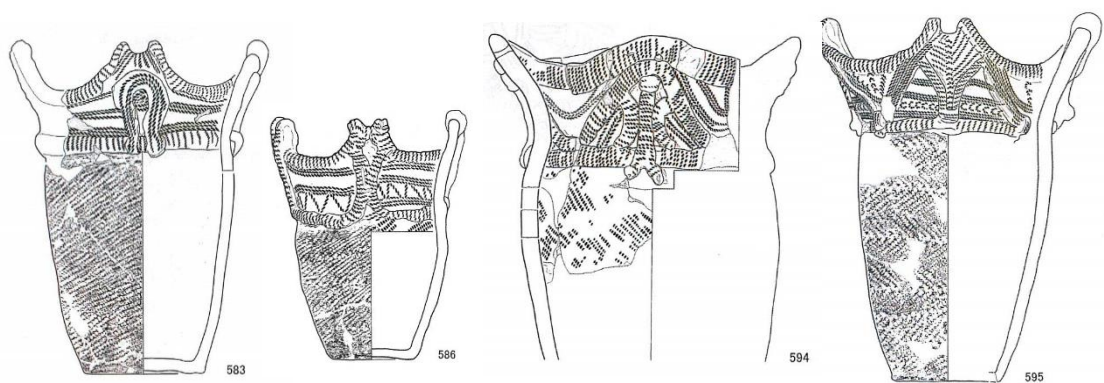
上 a2 後半・末期？ (559・560)



上 a2 後半・末期？ (561~565)



上 a2 後半・末期？ (567・568)

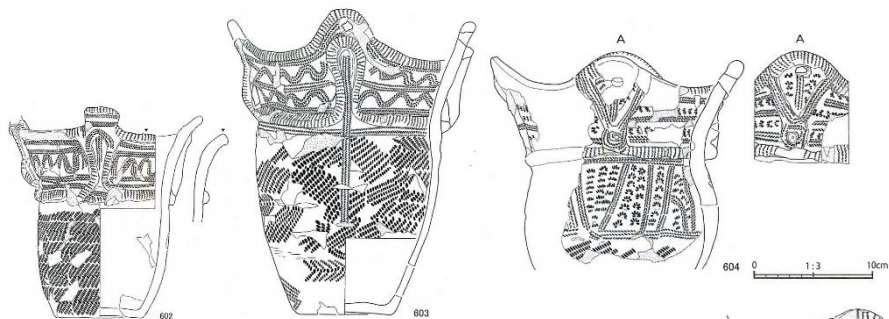


上 a2 後半・末期？（594 区画内の貼付が男根状）・末期（583・586・595）



上 a2 後半（592・平たい蛇行貼付）

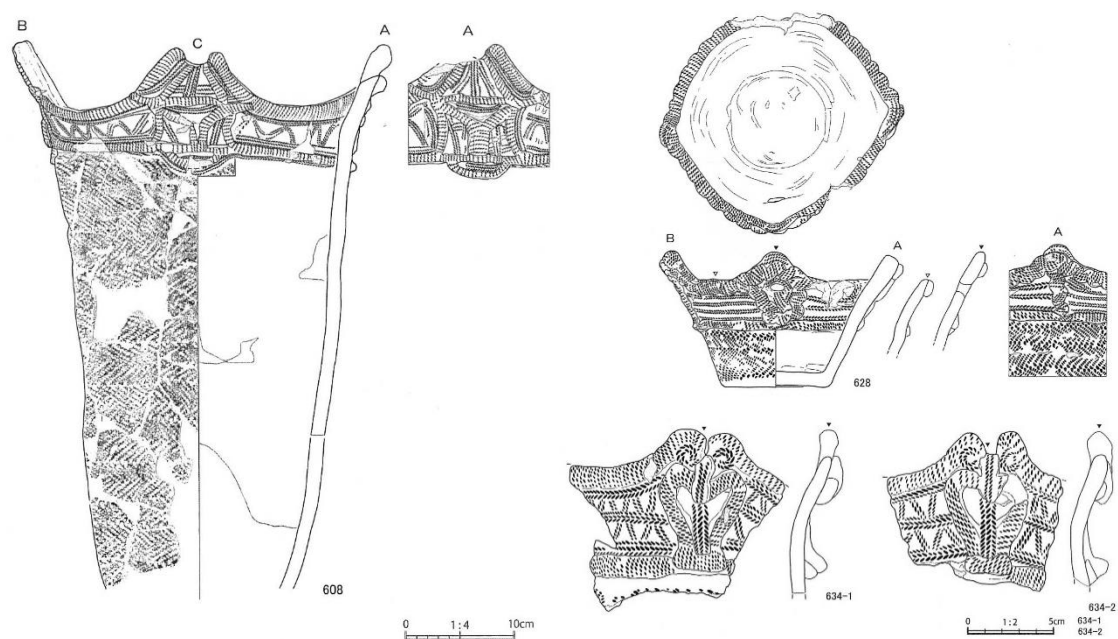
上 a2 末期（598～600）



上 a2 末期（602～604）



上 a2 末期（605～607）



上 a2 末期 (608・634) 上 a2 後半・末期? (628)

このような口唇部と頸部の横環貼付を結ぶ連結貼付については上層 a2 式後半段階で様々なバリエーションが派生し、突起下に貼付による区画を生み出していく。

突起を挟む形で交差する X 字の貼付 (508・509・517・524～526) や Y 字 (516・518～522)、V 字 (510・528～535 等) の貼付も発展的なバリエーションで、意味的には同様のものであると理解される。注目されるのは V 字、Y 字、X 字状に区画された中央に、円環状あるいはボタン状の貼付、縄を渦巻状 (ツムジ状) に付したものと等 (509・518・520～537・539・541・542・561・564・569・571・575・576・583・584・587～589・597・600・625) がセット的に組み込まれたものが顕著化している点である (上層 b 式前半期にも少数例みられる—653・656～658・669・693)。突起下に貼付で区画した中に男根状の貼付を付したもの (594) があることから類推すると、上層 a2 式の後半に盛行する突起下の区画が生殖観念の表徴空間として位置づけられていた可能性は高く、開いた円環や渦 (ツムジ) 状のモチーフは出産ないし誕生を抽象的に示唆する記号ではないかと考えられる。

いずれにせよ、上層 a2 式後半段階に突起の大型化が進むにつれて、山形突起が台形状 (弁状) に幅広化するのと連動し、平行垂下した 2 本の縦位貼付や幅狭の楕円径・逆 U 字状の貼付が徐々に横に開いていき、突起下に隆帯による様々な区画を形成するもの (510・514・516・520・521・525～542・569～595・597・601～604・608・610～623・628・634・637 等) が上層 a2 式～上層 b 式初頭の主流的な属性になっていく。

肥厚した口唇や太い横環貼付により区画された口縁部文様帯の内部施文は、1～3 本の縄線が複数段横環し、間を鋸歯状ないし蛇行縄線文が巡ったり、刺突が充填されるなど、多層構造を持つようになる。上層 a2 式の前半段階においては、横走縄線の本数が 1 本のもの (462・464)、2 本組 (457・473)、3 本組 (468)、4 本組 (480)、本数違いの混在 (479) と様々みられるが、後半段階に向けて徐々に 3 本組へと収束し (560、567・568、605～607、622、628 等)、次の上層 b 式ではほとんどの場合において 3 本組の縄線になる (例外も少数ある)。

口縁部文様帯に施される縄線に関してもう一つ言及すると、3 本組に収束する以前のものでは、

個々の縄線のところどころに歪み（459・525・526・528・543・550等）が認められるもの、縄線同士の継目が目立つもの（459・542・545等）、縄線間に若干の隙間があるもの（459・512・514・525・526等）が傾向として多く見受けられる。総じて施文が適当で雑なのである。それが、上層 a2 式の終盤段階で 3 本組縄線が主流化されるようになると、直線的に施文・縄線同士に若干の隙間があっても隙間の幅がほぼ一定（551～553・556・560・567・568等）になり、やがて隙間なく密に施文し、縄線同士の施文の継目も目立たないもの（556・575・590・591・602・614）が次の上層 b 式に向けて多くみられるようになっていく。より美しく丁寧に装飾しようという意識性は明らかであり、これもまた上層 a2 式の新旧を判断する上で有効な属性であろう。3 本組縄線については平行に複数段巡る縄線間に鋸歯状ないし蛇行の縄線を挟む多層的な構成（560・567・569～571・588・591・598・599・602・603・605～608）が多くなっていく。

ここまでを整理すると、上層 a2 式の後半から末期にかけての特徴としては、上層 b 式前半の特徴との兼ね合いから、大型土器の減少、文様帯幅が狭くなる傾向（489～502・543・567・568・596・605～623・634等）、急角度に突き出た突起（437～442・444・463～465・468・469・471・473・475・479・510・511）が徐々に幅を持つ台形状（466・467・480・504・514～516・528～531）へ漸変、次いで中央が割れて両角が丸みを帯びて突き出す上層 b 式に典型的な突起（520・521・525・527・574・580・582～584・595・600・605・608・614・615・618・619等）へと変化すること。突起上が肥厚し皿状にくぼませたもの（534・541・542・565・571・572・575・577・579・591～593・609・610・616等）や、一方向に押し引いた耳状の浅いくぼみ（435・443・469・470・474・476・478・503・505～507等々多数 報告書・表X-12）の盛行^{註11}。突起の幅広化に連動しての突起下における区画の形成（504・508～510・514・516～542・547・548・567・569～595・597・598・601～604・608～622・628・629・634・637）、等が挙げられよう。

さらに当該期の短期間を示す属性として蛇行貼付の横環（555～565・628）がある。蛇行貼付については上層 b 式の前半段階でまったくみられず、b 式後半から盛行する属性であるわけだが、他の諸属性から上層 a2 式の後半期にごく短期間を示すものである。肉厚で蛇行というより瘤と谷が連続するような貼付（560・561・628）と、扁平に押し潰れた比較的幅広の蛇行貼付（555～559・562～565・592）と 2 種があるが、このように特徴的な形状の蛇行貼付は上層 b 式後半以降に盛行する蛇行貼付にはみられないものであり、その点でも時期の違いを表していると言えそうである。いずれとも口唇部あるいは口縁部文様帯と胴部を分かち境界線を横環するように施文されている（この特徴と、区画帯の形状から改めて見直せば、上層 b 式として掲載した 750、さらには 753・754・766 についても上層 a2 式のこの段階の誤認であったと思う）。

なお、館崎遺跡出土の掲載土器で上層 a2 式の地文は約 6 割が斜行縄文、約 4 割が羽状縄文であったが、上層 b 式に近くなるほど、羽状縄文の傾向は強まっている。

上層 b 式の属性（報告書内掲載番号 642～775・777・778）

上層 a2 式における文様帯造形の多彩さと比較する限り、一転して定型化、簡素化した印象が強い段階である。弁状突起を持つものと平縁のものがある。ほとんどの場合、弁状突起は 4 つで、両角が丸みをもって突き出し、中央が軽く凹む傾向がある（すべてではない）。突起下は引き続き貼付による区画帯が形成されるが、上層 a2 式と比べると総じて簡素化している。

口縁部文様帯は、無文地に三本組の縄線を上下に横環させ、その間をいわゆる馬蹄形圧痕文（地虫状の縄圧痕）、ないしその代用としての半截竹管状工具による連続施文が巡るサンドイッ

チ状の構成を基調としている。一段巡るもの（644・645・647・649・661・662等）と二段巡るもの（642・643・646・648・651～659等）が大半であるが、長身の器形などでは3段以上、多段が横環するもの（650・688・690・708）もある。

口縁部文様帯と胴部地文の境は貼付の横環で仕切られる。胴部地文は結束羽状縄文の多段横環である場合が大半である。

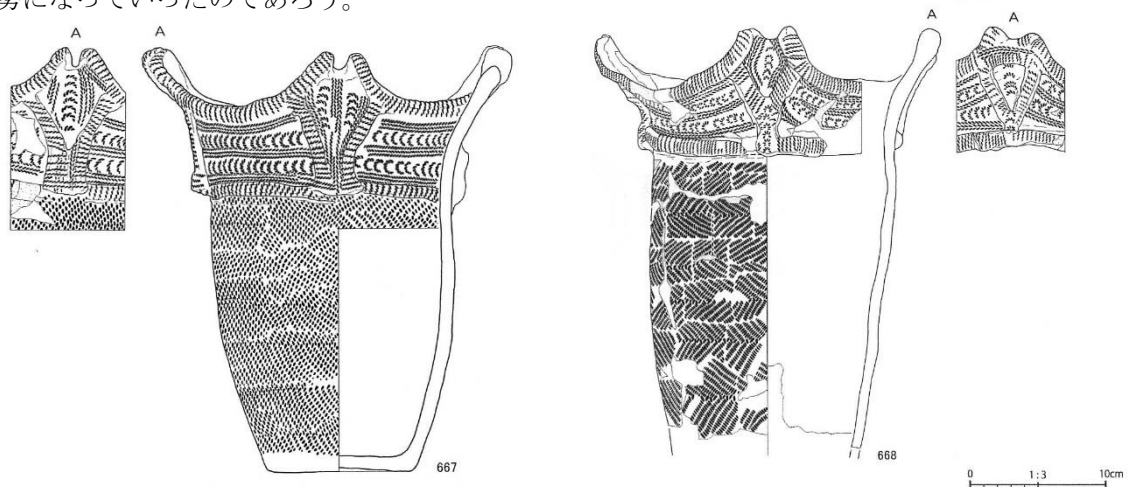
メルクマールとしていわゆる馬蹄形圧痕文（地虫状の縄圧痕）というわかりやすい属性を有することもさりながら、そもそも全体に諸特徴（属性）の定型的なものが多いことも型式誤認が比較的少ない理由かと考えられる。

上層b式について、さらに前半と後半とを見分ける指標属性を以下に記す。

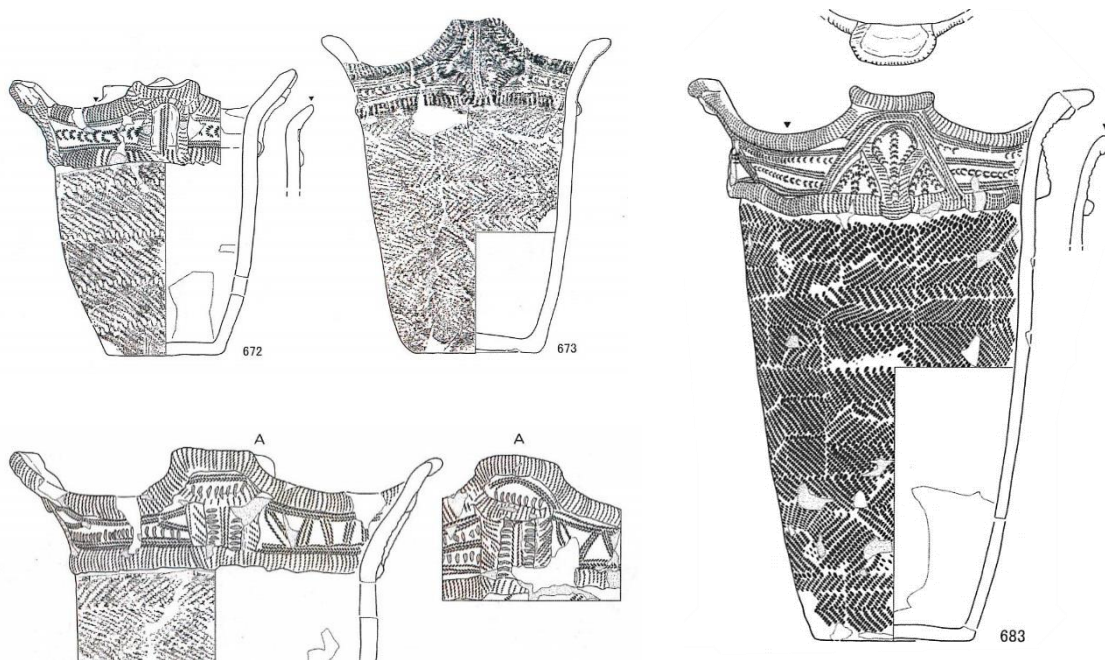
前半段階では口唇部ならびに口縁と胴部の境を横環する貼付上に撚糸を連続して密に施文するものが大半である。口縁と胴部を画する横環貼付は原則的に1条。文様帯内の貼付は突起下に限られる。

後半段階では、まず弁状突起の上辺にのみ蛇行貼付が施されるもの（708～714・720・723等）が現れ、やがて口唇を一周横環するもの（721・722・724・728～747等）へと変化する。口縁と胴部を画する横環貼付は2条のもの（708・709・711～714・716・718・720～724・726・727・729～733・735・737～739・742・743・746・747等）が主流化する。文様帯内の貼付は、突起下以外にも施文するようになり（709・710・717～719・726・727・729）、新しい段階になるにつれ、口縁部文様帯全体に及んで網状化する（712・721～724・730・731・733～746・748等）。貼付幅は一定程度の太さを有し、器壁に密着するものがほとんどだが、末期になるにつれ、細く、未着性の弱いものが増えてくるようである。貼付を網の目状に細かくするものが流行したため、必然的に一本一本の貼付の幅を細いものにせざるを得なくなり、個々の貼付の器面に対する密着性も弱くなったのではないかと推考される。

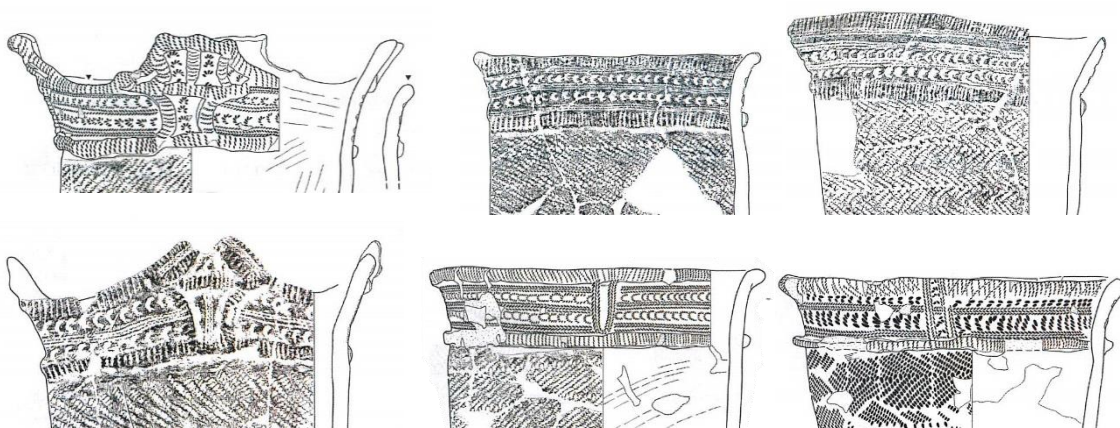
貼付で細かく区画された網の目の中にも引き続き馬蹄形の縄圧痕（まれに刺突文）は施されるが、横環するスペースが寸断されるのに伴うように3本組の縄線の方は施されなくなっていく（718・721～724・729～731・733～735等）。上層b式前半段階まで維持されていたサンドイッチ状の多層構成が後半段階で崩壊していくと言える。おそらく、網の目状の狭いスペースに施文するのがわずらわしくなったために、地文の縄文を全面に施文後に貼付を施すものが徐々に優勢になっていったのであろう。



円筒土器上層b式初頭（667・668）

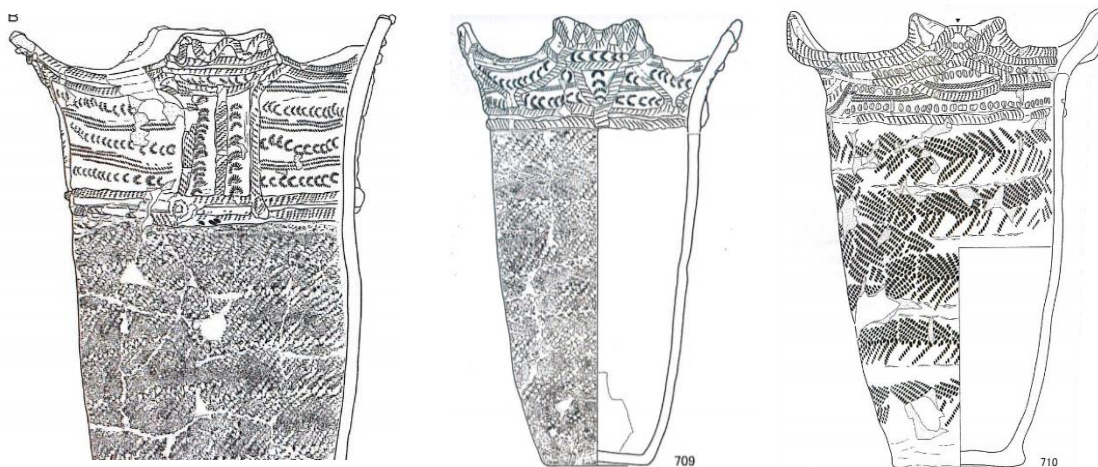


上b式初頭 (672~674・683)

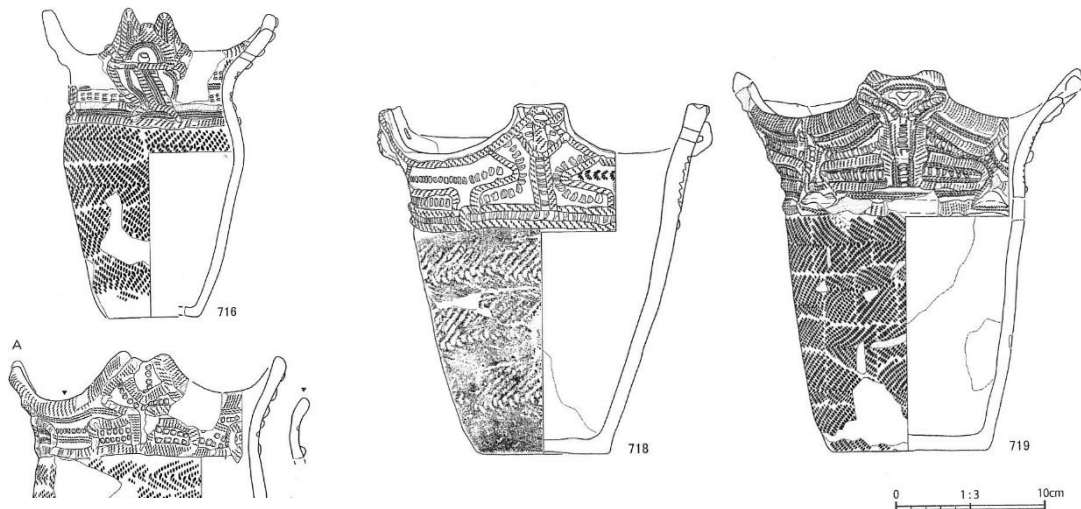


上b式初頭~前半 (684・685)

上b式前半 (697~700)

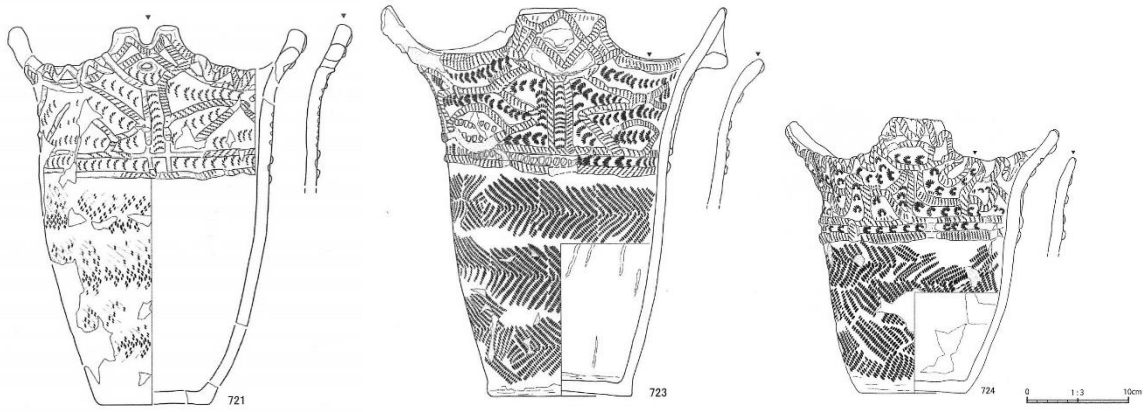


上b式後半 (708~ 710)



上b式後半 (716・717)

上b式後半 (718・719)



上b式後半 (721・723・724)



サイベ沢Ⅶ式古段階・上層c式 (782~785・789~791)

サイベ沢Ⅶ式（掲載番号 779～797・799～809・812～903）・見晴町式（906～920）の属性

冒頭で述べたとおり、館崎遺跡出土の円筒土器は、縄文時代前期後半の円筒土器下層 c 式～中期中葉のサイベ沢式・見晴町式までがあるが、出土数が多いのは下層 d1 式～上層 a2 式であり、上層 b 式段階には減少傾向が現れている。掲載した復元土器の数が示しているように、サイベ沢Ⅶ式・見晴町式は少ない。観察個体数が少ない中でも属性の数値化に基づいた時系列の復元を試みたが、正直なところ十分に検討し得ない中で時間切れとなり、消化不十分なままでの報告になってしまっている点は否めない。反省点を交えつつ問題点や今後の課題等を記すにとどめたい。

上層 b 式後半段階で文様体内の貼付が網状化して全体に及ぶようになることを述べたが、文様帯幅が胴中央部付近まで広がり、貼付の幅が細く密着性の弱いもの（あるいはソーメン文）が主流化した段階、さらにはいわゆる馬蹄形圧痕（縄圧痕）より刺突文が優勢になった段階として、上層 b 式末からサイベ沢Ⅶ式古段階として分けた（779～797・799～809）。刺突文が施されているものでは連続的で密なものが多い。上述の要素を総合し、上層 b 式の次の段階としたものであり、中には文様帯幅が広くないものもある（783～785）。底部付近がくびれるものがみられるようになっていく。

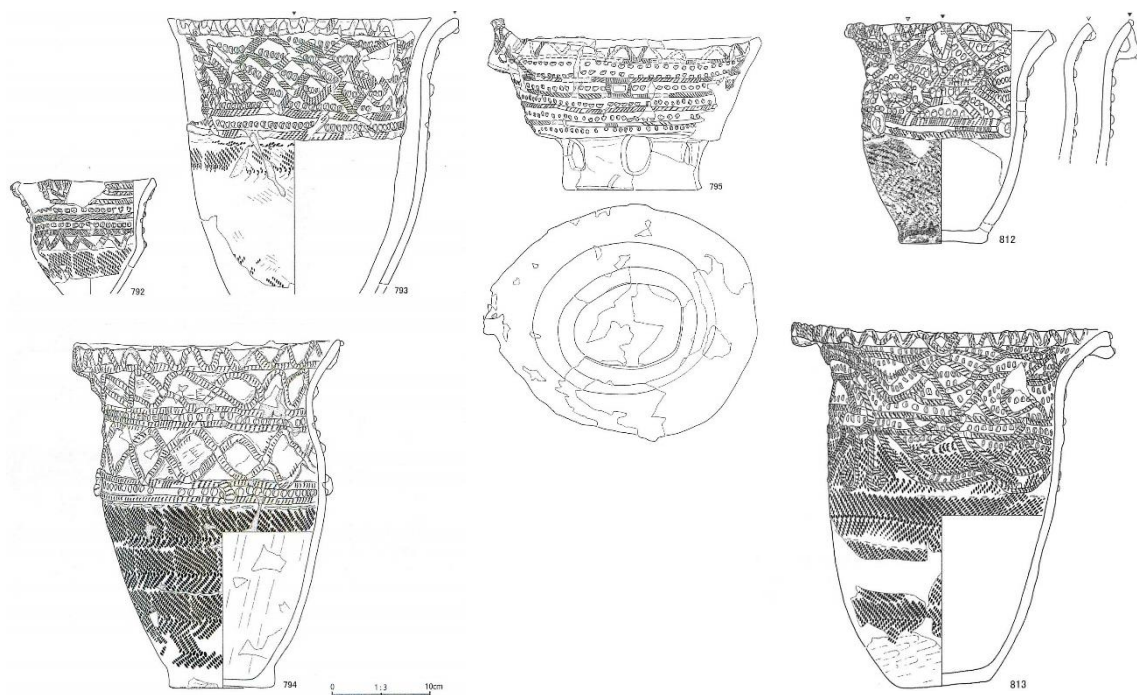
この中で口縁が横に特徴的に突き出しているもの（789～791・797・803）は後出の属性と考えられる。809 までとしたが、812・813 もこの段階に含めるべきであったろう（810・811 は上層 a2 式の誤認と報告書中に記載）。

なお、文様帯を持たない 807～809 については、突起形状が整っていること。さらに底部にくびれないことから、円筒上層 b 式前半段階相当に置くべきであったかと思う。また、823～826 は円筒上層 c 式相当で、やはり配置を間違えている。

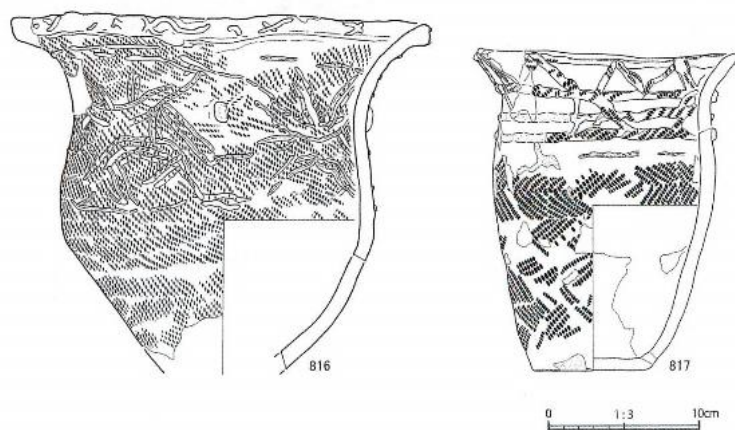
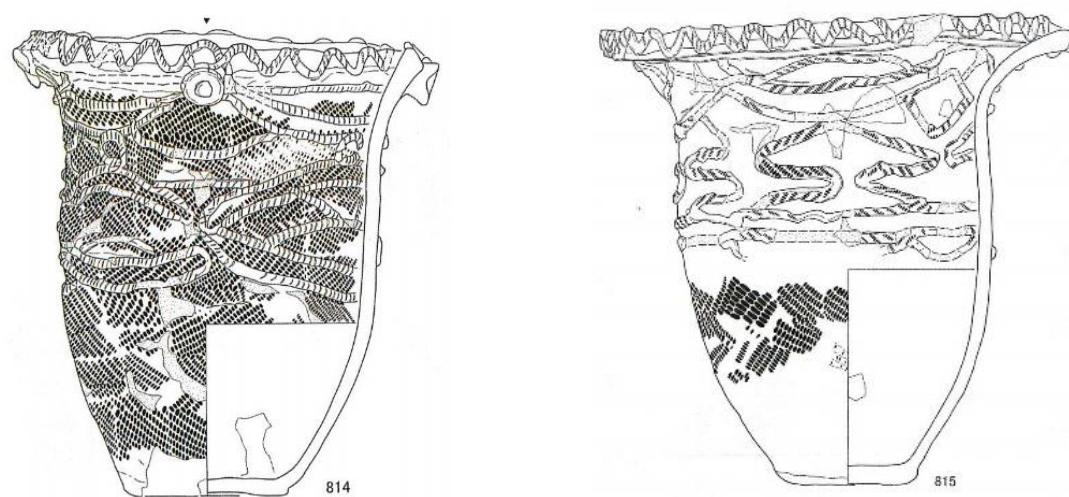
サイベ沢Ⅶ式段階の報告について未消化であることは否めず、多くを語る材料を持ち合わせていないわけだが、全体的な流れとしては胴部中央まで広がった文様帯が突起周辺まで範囲を縮小・局限化し、簡素化していく過程であり、それと連動して突起も小型化していくものととらえられる。また地文は多くの研究者に指摘されているように結束羽状縄文がなくなり、斜行縄文か綾繰文のある縄文に切り替わっていく。

ほぼ同じ文様帯の構成で貼付によるもの（842）と沈線によるもの（881）があること、文様帯が縮小化し、突起付近に局限化された段階にあっても貼付によるもの（855・856—906・909～911・915 見晴町式）があることからすれば、一概に貼付による文様帯が古く（円筒土器上層 d 式）、沈線による文様帯が新しい（円筒土器上層 e 式）という型式差は、成り立たない可能性も考えられる。これらについては並べて掲載すべきであったと反省しているが、単に貼付のほうが多く採用される傾向があったというだけで、同一モチーフを沈線で施文することも併行して行われていた可能性が推考される。

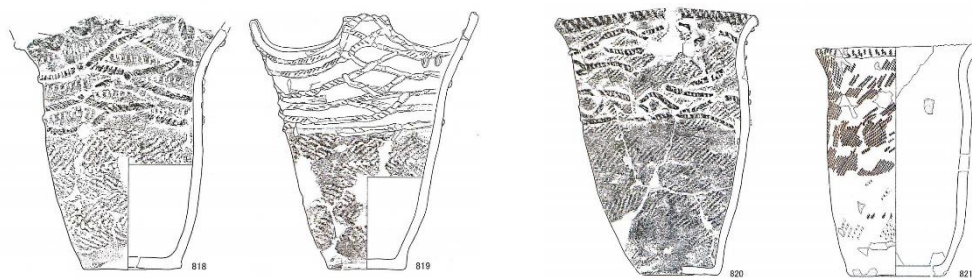
また、無文地に貼付で文様帯を構成していたものが、サイベ沢Ⅶ式段階になると縄文を全面に施文後に貼付をするようになると定義化されてはいるが、818 と 819、882 と 883 のように似通った文様構成の土器で両者がみられることを踏まえると、これらについても傾向の域を出るものではないのかもしれない。とりわけ 882 は無文地に円筒上層 e 式相当の属性とされる沈線文で文様帯を描いている土器である。そうすると、地文の縄文を施文後に文様帯を構成するものが優勢であるとしても、無文地に文様帯を施すものも、円筒土器上層式の終り近くまで一定数残っていたという可能性は十分に考えられるのではないだろうか。



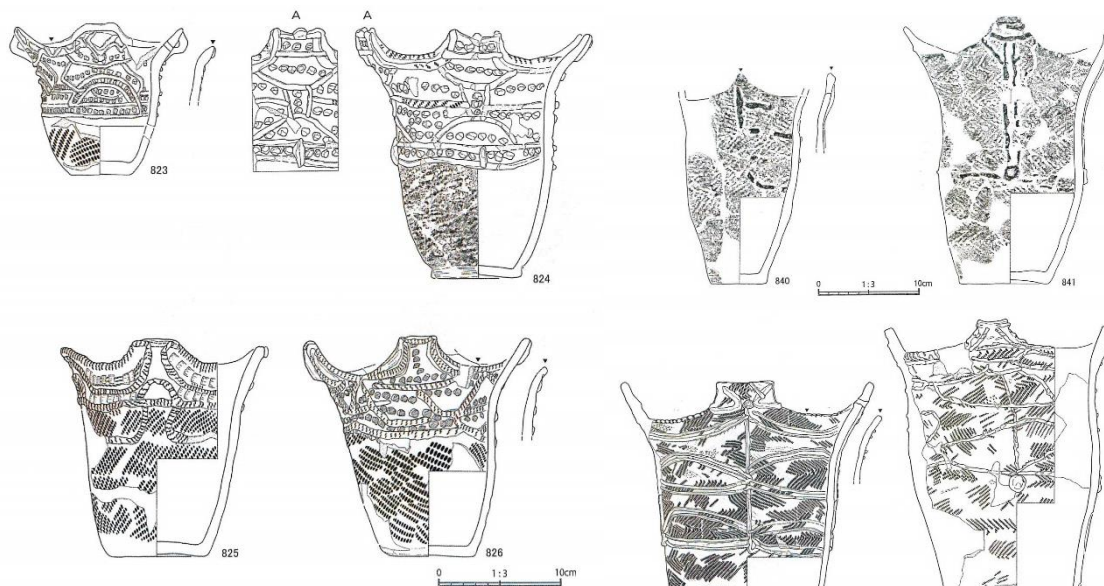
サイベ沢Ⅶ式古段階・円筒土器上層c式相当 (792~795・812・813)



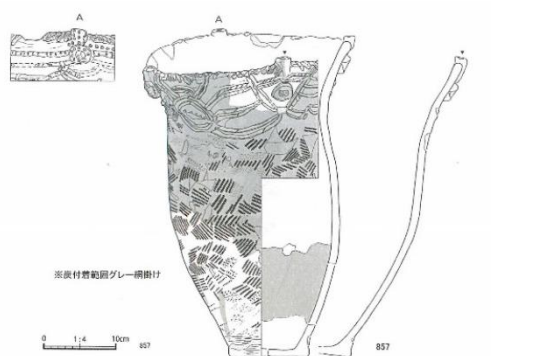
サイベ沢Ⅶ式古段階・
円筒土器上層d式相当
(814~817)



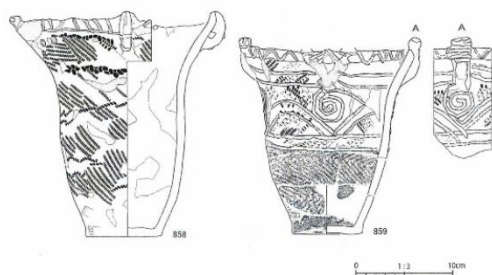
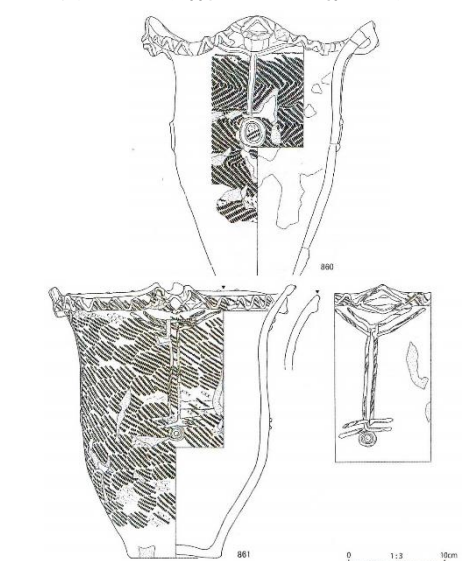
サイベ沢Ⅶ式古段階・上d式相当 (818~821)



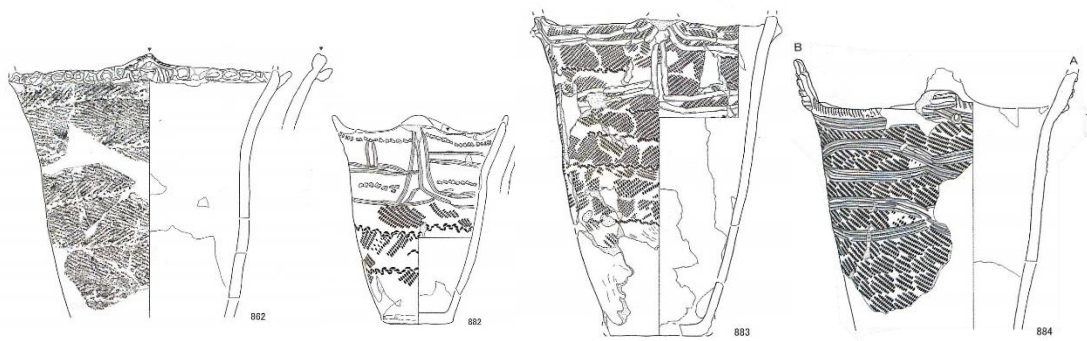
サイベ沢Ⅶ式古段階・上c式相当 (823~826)



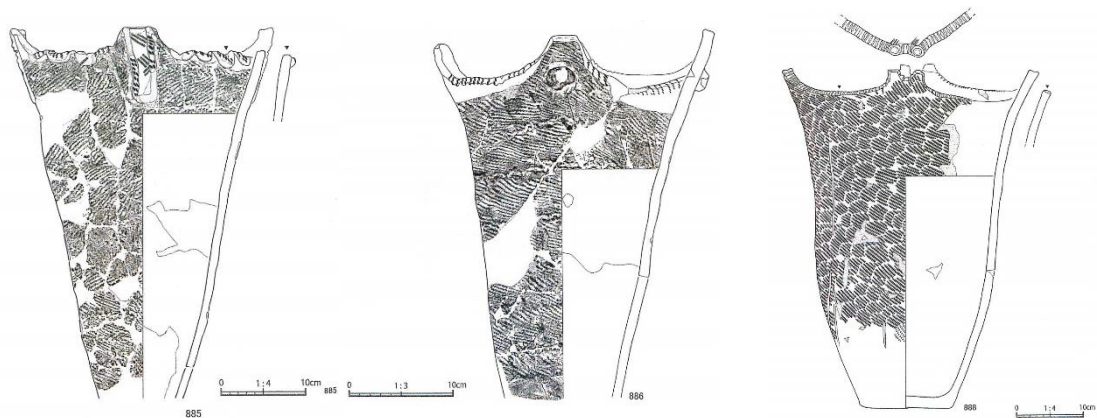
サイベ沢Ⅶ式古段階・上d式相当 (840~843)



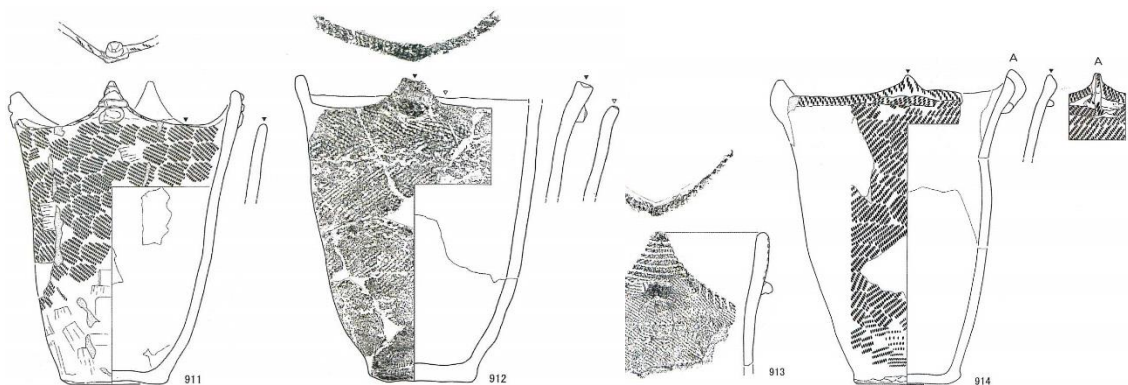
サイベ沢Ⅶ式古段階・上d式相当 (857~859) サイベ沢Ⅶ式古段階・上d式相当 (860・861)



サイベ沢Ⅶ式新段階・円筒土器上層 e 式相当？ (862・882～884)



サイベ沢Ⅶ式 (885・886・888)



見晴町式 (911～914)

北海道最南端域という遺跡の立地によるものかも知れないが、正直なところ、館崎遺跡出土のサイベ沢Ⅶ式相当土器と青森県で報告されている円筒土器上層 d 式と e 式（上述のとおり、両者は同時の可能性はあるが）では、ほとんど違いを見出すことはできなかった。

サイベ沢式を設定した資料は福田裕二が既に指摘しているように、すべて破片掲載である（福田 2005）。現在でも道南～道央部にかけてサイベ沢Ⅶ式だけは用いられているが、冒頭でも触れたように高橋正勝氏によるサイベ沢Ⅶ式設定に関する証言（高橋 1972a）、すなわち、北筒・余市両式土器の発生により、サイベ沢Ⅵ式すなわち円筒土器 c 式以降の道内の円筒土器上層式に東北地方の円筒土器とは異なる変化が生じたという型式成因に関する説明が型式設定当時に有効視されていたならば、今一度、サイベ沢Ⅶ式について、本当に円筒土器 d 式との違いがあるのかどうか、問い直す必要性は「ある」ように考えられる。

改めてメルクマールの問題—属性の優先序列について

かつて上層 b 式のメルクマールについては、いわゆる馬蹄形圧痕（地虫状の縄圧痕）、上層 c 式のメルクマールについては半截竹管状工具による充填刺突であるとしていたが、その後、知内町森越遺跡で両者が共伴することが大島直行により指摘された。

実は館崎遺跡では、すでにその前段である円筒上層 a2 式においても両者、すなわち馬蹄形圧痕（542・559・568・591・595 等）と充填刺突（476・506・528・609・615～619）と両者の併用（622）がみられている。

同じ意味合いの記号的な文様について、他の施文具で代用することは普通に行われていたと考えざるを得ず、胸骨文が貼付によるか沈線によるかの違いで新旧の型式を分かちように、判定の指標として、単独の要素（属性）を過度に信頼することは非常に危険であると思われる。

型式認定において特徴を表わす諸属性をできるだけ抽出し、それが誰にでも客観的に検証できるように数値化することが大切だということを提起しているが、上述のような混乱に陥らないためにも、型式判定するに際しては、さらにそれら諸属性の優先序列（着目すべき属性の順位）というものを意識しなくてはならないであろう。

第一には全体的な器形や胎土、突起形状や文様帯幅、胴部が膨らむとか底部周辺がくびれるといった造形上のクセ。第二には文様帯の構成とパターン。次に地文の共通性であるとか、地文の施文方向等が来て、最後に個々の文様の施文具、すなわち刺突か縄の押捺か、貼付か沈線かの観察結果になるのが、重視すべき指標属性の序列として妥当であると個人的には考えている。

もちろん全属性を比較した上で総合的に型式判断すべきであるが、たとえば胸骨文という文様構成が共通していながら、一方が貼付でもう一方が沈線だから沈線を用いた土器が新しく、両者の型式は異なるというように、施文要素一つで速断してしまうことなどは、その属性が視覚的にわかりやすいものであればあるほどに誤認を招きやすいものであると懸念される。

「かねてより土器型式は、土器のもつ諸要素の組合せで設定すべきであると主張されてきた。しかし、実際には、諸要素の詳細な分析を踏まえて土器型式を設定した例は少ない。さらに、後述するように土器の諸要素は種々のあり方を示し、単純なまとまりを示さないという現実がある。したがって、どのような要素を土器型式設定の基準にするかによって、土器型式の示す時間的・空間的な幅に差が生ずることになる」

（岡村・吉岡 1981）

土器型式の諸属性を数値化する方法（セリエーション）の有効性について

館崎遺跡の整理報告については、上述のとおり、個体復元した土器の諸属性について可能な限り、最大限、計測・数値化することに努めてみた。数百個体掲載した土器のいくつかについては型式誤認をしているし、気づいていない間違いは他にもあるかも知れない。属性分析の結果に基づく諸型式の再定義や型式間の線引きについてもあくまで暫定的なものであり、修正される余地があることは言うまでもない（数百個体の観察で正解を導き出せるほど生易しいものでないことは、トライした自分自身が深く痛感しているところである）。

しかし、一方で、館崎遺跡の報告で試したセリエーションの方法と方向性そのものは、間違っていないと確信している。属性の数値化に基づくデータが蓄積されれば蓄積されるほどに、土器型式の具体性・客観性も必ずや高まると私をして予見されるからである。土器型式について漠然と「こういう文様が多い傾向がある」「こういうものもみられる」と言うのでは、個々人の型式

観によって「認識の差」が必然的に起こり得るだろうが、たとえば「円筒上層b式2,000個体のうち地文が結束羽状縄文のものは1,900個体ある」というように数値化・具体化が進めば、たとえ数個体の型式誤認があったとしても、はるかに型式観が共通化・客観化（具体的なものとして可視化）し、出土層位や共伴事例に対する主観的な誤謬も相当に回避解消できると考えられる。

実際、館崎遺跡の復元土器については一度序列した後で、バラバラにして、もう一度序列してもほぼ同じものになるかどうか、つまり誰が組んでもだいたい同じ変遷になるかどうかを検証してもいる（サイベ沢Ⅶ式を除く）。その数百個体のデータが、やがて数千個体、数万個体になれば、個々の土器型式の真の諸特徴は平均値としておのずから浮き彫りになり、時間尺としての土器型式の確度・信頼性も飛躍的に高められるであろう。その型式の中での細かい変遷過程、諸段階さえ解明し得ると期待される。

数値化・データ化の作業については、その遺跡の整理において行われ、報告書に記載されるのが望ましいであろうが、すでに報告済のものであっても、掲載実測図から相当数の属性を抽出し数値化することは可能である。例えばサイベ沢Ⅶ式として報告されているもの、円筒土器上層d式、e式として報告されているものについても復元土器の実測図から数百個体分の属性を数値的に起こして比較検討を行えば、今回の館崎遺跡の整理報告で明らかにし得なかったことも、必ずや具体的に解明されるであろう。

繰り返すが、数値化されたデータが蓄積されればされるほど、型式の定義・条件は自ずと定まってくるし、豊富にデータ化されれば誰でもそれを元に具体的な検証やアプローチを試みる事が可能になる^{註12}。その結果、間違った型式名で報告された土器についても、客観的に修正することが可能になる。そしてネットを介すれば、検証材料として膨大に蓄積された数値データを研究者の誰もが共有できるようになるであろう。

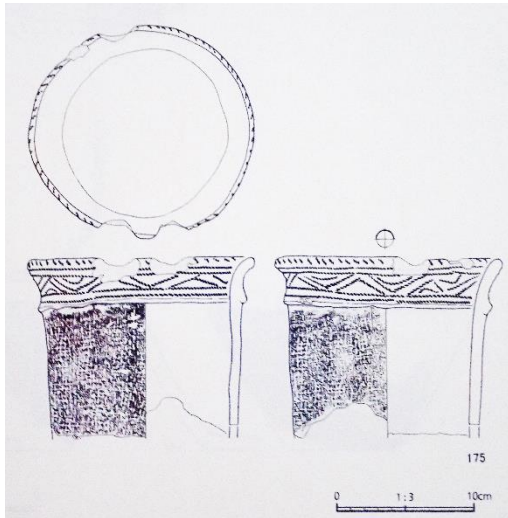
少なくとも、個々の担当者が、共伴等の出土状況や型式的諸特徴および各自の型式観から、既存の定義の土器型式の中に位置づけていく作業よりは、型式誤認のリスクを大幅に低減できる合理的かつ有効な方法（真理解明への着実な近道）と言えるのではないだろうか。

土器の研究に取り組まれてきた方の中には、本発表の内容について、不愉快に感じている方も少なくないのではないかと思います。実際、報告書刊行後に、私の報告内容について相当批判的な声が上がっている噂も人づてではあるが伺っている。しかし、土器研究の進展ということを考えれば、自分が明確に認識している問題点を、（ひるまずに）今この機会にこそ問わねばならないと思われた。何とぞ真意を汲み取ってご海容いただきたい。

私は北海道で発掘調査に従事するようになり約30年になるが、長万部町の臨職調査員として、佐藤稔さんの御指導を受けたのがはじまりであった（何の戦力にもならず佐藤さんにはご迷惑のかけ通しであった）。また、実家が苫小牧市であった縁で、今年9月に亡くなられた佐藤一夫先生からは学生時代以来多大なる薫陶を賜った。不肖の弟子であり、この場で師として先生の御名前を挙げることは、あるいははばかるべきことなのかも知れないが、佐藤一夫先生と、当時の苫小牧市埋蔵文化財センターの職員諸氏から考古学的な手ほどきをいただいたおかげで、何とかここまで勤めてこられたのだと思う。これまでに御指導・御鞭撻をいただいた諸先学の御厚情・御恩に改めて深謝いたすとともに、今回、道南考古学会からこのような発表の機会をいただいたこと、さらには準備段階から厚沢部町教委の石井様からお世話を受けたことに対し、心よりの御礼を述べて、本報告の終わりの御挨拶としたい。ご清聴ありがとうございました。

さらに広い視点で館崎遺跡出土の土器を見渡すと 神奈川県出向の成果（ごく一部）

1. 口縁部の打ち欠き

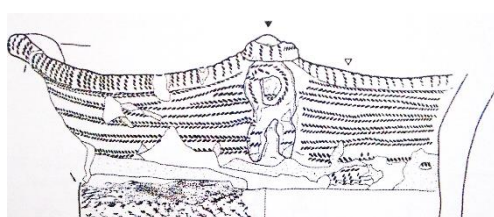


下層 d1 式土器 (175)

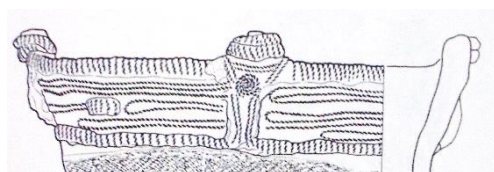


相模原市橋本遺跡第 122 号土坑出土 甕被りが想定される縄文時代中期の土器

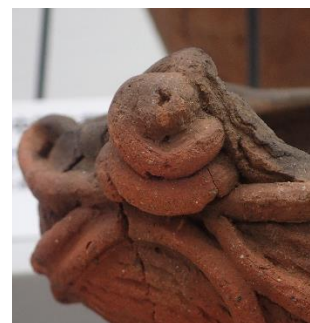
2. 蜷局（トグロ）状・鏡餅状突起



上層 a2 式土器 (512)

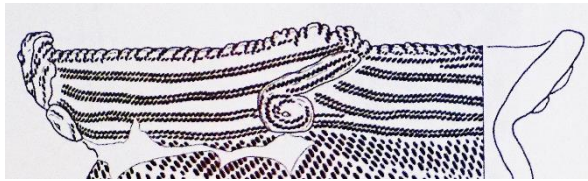


上層 a2 式土器 (576)

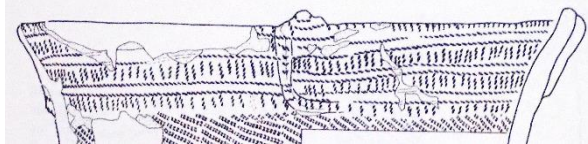


相模原市勝坂遺跡D区南集落出土
加曾利 E 式（中期後半）

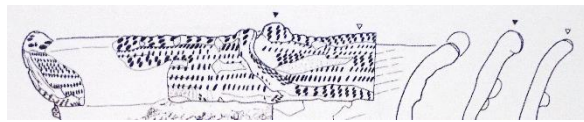
3. 突起横から斜めに渡す貼付



上層 a1 式土器 (361)



上層 a1 式土器 (366)



上層 a1 式土器 (367)



上層 a2 式土器 (470)

下端両サイドが瘤状に膨らみ男根状にも映る



相模原市磯部宮沢遺跡出土
勝坂式初頭・新道式? (縄文時代中期前半)



相模原市宮ヶ瀬遺跡群北原 (No.9) 遺跡出土
堀之内式土器 (縄文時代後期前葉)

これまでの出向中にこちら（関東地方）で撮った写真の大半が未整理で、文献等での確認も進んでいないので、ほんのごく一部の紹介にとどめざるを得ないが、ここまで4年3ヵ月（51ヵ月）出向した成果として、円筒土器を含む北海道の土器と何らかのつながりが窺われる属性について、地域も時期も異なる土器から様々に見出されている。

土器を観察し、個体同士を比べることで、違いを見極めて型式細分する。「分類作業」に没頭していると、つい「違い」にばかり意識が収斂^{しゅうれん}しがちになるが、時期や地域を超えて共通しているもの、表徴している記号としての意味において共通性が窺われるもの—本質において変わらないもの—についても同様の意識を向けることの重要性が痛感される^{註13}。

註

註1 ただし、この円筒土器の直立事例について長谷部は武藤の思い過ごしだと、確認もせずに一蹴した。

註2 ほんのごく一部である。円筒土器下層式は下層式で型式設定を巡るより複雑な混乱があったことは承知しているが、非常に長くなるので割愛した。（石岡 1999・茅野 2008）等に詳述されている。

註3 沈線文が木式土器の影響であるにせよ、器形が円筒土器上層式の形状を踏襲している以上、山内清男が何を言おうと、円筒上層e式も後続する見晴町式も円筒土器上層式の様式のうちにあると見なして良いであろう。見晴町

式のあと、道南地方では榎林式等、大木式土器の影響を受けた土器型式が拡がり、円筒土器上層式が終焉するようであるが、渡島半島から押し出された円筒土器様式が道央圏に移動して、萩ケ岡式、天神山式、北筒式等の在地化した円筒土器の母体となった可能性がゼロではないことを考えるならば、なおさらそうである。貼付か沈線かなどという些末な（しかしながら、わかりやすく人目につきやすい）文様要素の属性ひとつより、器形的特徴の共通性および（前後が繋がりそうだという意味において）系統だった型式学的脈絡の窺われる器形的特徴の方が本質性は高く、はるかに重要であると言えるだろう。

註 4 「しかしながら、セリエーションのみによる編年は、やはり層位的な検証抜きでは、その妥当性は保証されないのである。逆にいえば、層位的なデータが十分に得られる場合には、あえてセリエーションを用いる必要性はなくなるという理屈になる。したがって、わが国の縄文土器編年が、層序の発達している貝塚遺跡の層位的データを基本にして進められてきたことから、日本考古学にはセリエーションはついに積極的に採用されるところとはならなかったのである」（小林 1989）とのことであるが、筆者には貝塚遺跡や盛土遺構、捨て場遺構ほど、人為的な成因によって新旧の遺物が混在して共存する（廃棄の同時性の）リスクが高い場所はないと考えられる。それを疑いもなく同一型式の共存とみなし、出土した土器の型式学的な属性検証を行なう必要などはないという考えが、発掘担当者や土器の研究者に原理主義的に根強く浸透しているのだとするならば、どれほど層位的成果が蓄積されようとも一致した型式観など見いだされるはずもないであろう。その考え方を根本的に見直さない限り、型式認定をめぐる混乱と停滞は今後も続いていくのではないだろうか。

註 5 そうした心情・性向に対する自覚性・意識性が失われた延長線上に、（出土状況を重視するあまり型式学を軽視したという意味における）同根の問題としてあの旧石器捏造事件も起こったのではなかったか、ということを含めて思わないわけにはいかない。

註 6 ただし、沢に面して傾斜している地形への意識性は、働いていたであろう。

註 7 セリエーションについては小林達雄が述べている（小林 1989）ように日本考古学においては邪道とみなされ忌避されたようであるが、北米南西部からペルーの考古学研究では標準的かつ支配的な方法となり、目覚ましい成果を挙げたことも同時に紹介されている。しつこいようだが、考古学が物に事実を語らしめる学問であることを標榜するのであれば、調査報告者や研究者の側で要不要を勝手に決めつけてかかるのではなく、最大限数値化できる情報は引き出して記録化すべきではないのだろうか。将来的に真理の解明に結びつく可能性がある情報であれば、なおさらのことである。「（日本のように：筆者註）層位的なデータが十分に得られる場合には、あえてセリエーションを用いる必要性はなくなるという理屈」（小林 同上）によって、その気になればいくらでも引き出せるはずのデータ（研究材料）を引き出さずとも良しとして何となく決め込んでしまっている姿勢などは（そうした状況に何ら疑問を感じないで容認・追従してしまう空気も含めて）、ある種の油断、他国と自国、両方の発掘調査に対して高をくくっているようにしか映らない。その層位的なデータ、出土状況に対する客観性・真実性を過信し過ぎた挙句、（型式学的にデタラメな石器）捏造に気づかなかったのではなかったか。まったく同根の慢性的宿病であるにも関わらず、今もなおあまり変わっていない（のかもしれない）この状況について、自戒を込めて虚心に翻意する必要性を痛感するものである。

註 8 報告書掲載番号 11 のように微隆帯のあるものについて下層 d1 式の可能性が考えられたが、出土状況、器形や胎土、器壁の厚みの不均一などを考慮して下層 c 式とした。館崎遺跡出土の下層 c 式は後半期ないし末期のもので、下層 d1 式に近い要素が現れていると考えられる。

註 9 下層 c 式に文様帯幅の広いものが存在することや、下層 d2 式に文様帯幅が拡がること等を考えても十分あり得ることと考えたい。

註 10 この観点で改めて報告書を見直すならば、489～502 は、上層 a2 式の中でも後半段階、上層 b 式にずっと近い段階と考えられるもので、605～607 の土器の前後に配置すべきものであった。

- 註 11 突起上のくぼみや孔については様々なバリエーションがあるものの時期や地域を超え、すなわち長期間、広域で普遍化している可能性が窺われているが、意味的には通底したものではないかと考えている。
- 註 12 土器属性を数値化するに際し、整理期間や予算等の制約がある場合には、何を数値化・表記（掲載）するか優先順位をつけねばならないであろうが、基本的には、整理報告者でなければ数値化できない情報、なおかつ利用者目線に立って優先順位を考え、そこに限られた時間と労力を傾注することが正しいように思える。一見、重要そうに思える情報であっても、「胎土中に小石を含む」等、ほとんどすべての土器に該当する情報を備考欄に羅列するなど、利用される可能性が「ほぼない」と予見されるものであれば、それを記録して掲載することの有意性について再考吟味することも必要であろう。
- 註 13 あくまで理想ではあるが、細かいことに気がつく観察の目、時間も空間も超えた俯瞰的な想像力の目、そして日常感覚のごく普通の目、どれにも偏ることなく（常識というものととらわれることなく）3 種類の目で同時並行的に「見ること」を意識的に心掛けていたい—そんな目で物事や世界を見ることができたら、とは思う。

主要引用参考文献

- 青森県教育委員会 1975『中の平遺跡調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 第 25 集
- 青森県教育委員会 2004『三内丸山遺跡 25』青森県埋蔵文化財調査報告書 第 383 集
- 青森県教育委員会 2012『三内丸山遺跡 39』青森県埋蔵文化財調査報告書 第 520 集
- 青森県教育委員会 2014『三内丸山遺跡 41』青森県埋蔵文化財調査報告書 第 546 集
- 青森県史編さん考古部会 2002『青森県史 別編 三内丸山遺跡』青森県史友の会
- 石岡憲雄 1999「東北地方 前期（円筒下層式）」『縄文時代』第 10 号・第 1 分冊 縄文時代文化研究会
- 江坂輝弥 1970『石神遺跡』ニューサイエンス社
- 大島直行 1976「円筒土器上層式土器の認識に関わる 2・3 の問題」『北海道考古学』第 12 輯 北海道考古学会
- 小笠原雅行 2005「三内丸山遺跡周辺の縄文時代前期末から中期初頭の諸問題」『東北・北海道の縄文時代前期末葉～中期初頭土器の課題－資料集－』海峡土器編年研究会
- 小笠原雅行 2008「円筒上層式土器」『総覧 縄文土器』
- 岡村道雄・吉岡恭平 1981「土器型式の設定と聖山遺跡の土器群」『信濃』第 33 巻第 4 号・信濃史学会
- 長万部町教育委員会 2001『オバルベツ 2 遺跡 (1)』長万部町埋蔵文化財調査報告書 6
- 影浦覚 2020「円筒土器下層 c 式から上層 a2 式への形状変化とその背景」『北海道考古学』第 56 輯
- 影浦覚 2021「共伴神話は諸刃の剣—今、鈴木公雄論考を読み直すことの意義—」『泥人形』第 11 号・泥人形刊行会
- 鹿児島県埋蔵文化財センター 2002『上野原遺跡 (第 3 分冊)』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (41)
- 木古内町教育委員会 2004『蛇内遺跡』
- 児玉作左衛門・大場利夫ほか 1958『サイベ沢遺跡』市立函館博物館
- 小林達雄 1989「縄文土器の編年」『縄文土器大観 1 草創期 早期 前期』小学館
- 知内町教育委員会 1975『森越』
- 鈴木克彦 1982「円筒土器に後続する土器の編年」『考古風土記』7
- 鈴木克彦 1999「東北地方 中期（円筒上層式）」『縄文時代』第 10 号・第 1 分冊 縄文時代文化研究会
- 鈴木公雄 1969「土器型式における時間の問題」『上代文化』第 38 輯・国学院大学考古学会
- 高橋正勝 1972a「北海道における縄文時代中期の終末 (1)」『北海道青年人類科学研究会会誌』No. 9
- 高橋正勝 1972b「北海道における縄文時代中期の終末 (2)」『北海道青年人類科学研究会会誌』No. 10
- 高橋正勝 1981「北海道南部の土器」『縄文文化の研究 (2. 後期の土器)』4 雄山閣
- 立田理 2002「山越 3 遺跡のⅢ群 a-3 類土器の編年の位置と放射性炭素年代」『八雲町 山越 3・山越 4 遺跡』北

埋調報 166 (財) 北海道埋蔵文化財センター

立田理 2006「円筒土器上層 b 式からサイベ沢Ⅶ式土器の編年方法について」『北海道考古学』第 42 輯

(株) 玉川文化財研究所 2014『下北原遺跡 III』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書 27

茅野嘉雄 2008「円筒下層式土器」『総覧 縄文土器』『総覧 縄文土器』刊行委員会

デカルト (ルネ・) 1997 (初出 1637) 『方法序説』谷川多佳子訳・岩波文庫

函館市教育委員会 1979『見晴町 B 遺跡発掘調査報告書』

函館市教育委員会 NPO 法人函館市埋蔵文化財事業団 2014『函館市 サイベ沢遺跡』

長谷部言人 1927「円筒土器文化」『人類学雑誌』第 42 巻第 1 号 東京人類学会

福井純一 2013「北海道の「盛土遺構」とは何か」『盛土遺構を掘る 予稿集』北海道考古学会 2014 年度研究大会資料

※2014 年度は 2013 年度の誤記。タイトルも本文では「北海道における「盛土遺構」とは何か」である。

福井純一 2020「北海道の「盛土遺構」と「もの塚」」『芙蓉峰の考古学Ⅱ 池上悟先生古稀記念論文集』

福島町教育委員会 1985『館崎遺跡 一円筒土器文化における「土器塚の調査」一』

福田裕二 2005「亀田半島における前期末葉～中期初頭の様相」『東北・北海道の縄文時代前期末葉～中期初頭土器の課題－資料集－』海峡土器編年研究会

(財) 北海道埋蔵文化財センター 1985『尻岸内町 中浜 E 遺跡』北埋調報 22

(財) 北海道埋蔵文化財センター 1988『函館市 石川 1 遺跡』北埋調報 45

(財) 北海道埋蔵文化財センター 1994『七飯町 鳴川右岸遺跡』北埋調報 87

(財) 北海道埋蔵文化財センター 1997『七飯町 鳴川右岸遺跡・桜町遺跡』北埋調報 112

(財) 北海道埋蔵文化財センター 2000『八雲町 シラリカ 2 遺跡』北埋調報 142

(財) 北海道埋蔵文化財センター 2001『八雲町 山越 2 遺跡』北埋調報 163

(財) 北海道埋蔵文化財センター 2002『八雲町 野田生 2 遺跡』北埋調報 167

(財) 北海道埋蔵文化財センター 2003『八雲町 落部 1 遺跡』北埋調報 181

(財) 北海道埋蔵文化財センター 2005『森町 森川 3 遺跡』北埋調報 222

(公財) 北海道埋蔵文化財センター 2014『木古内町 木古内遺跡』北埋調報 304

(公財) 北海道埋蔵文化財センター 2015『木古内町 新道 4 遺跡 (4)』北埋調報 320

(公財) 北海道埋蔵文化財センター 2016『木古内町 大平遺跡 (2)』北埋調報 321

(公財) 北海道埋蔵文化財センター 2017『福島町 館崎遺跡』北埋調報 333

(公財) 北海道埋蔵文化財センター 2022『木古内町 幸連遺跡』北埋調報 369

三宅徹也ほか 1971『野木和遺跡調査報告書』青森市の埋蔵文化財 5 青森市教育委員会

三宅徹也 1978「円筒土器の概念とその崩壊」『青森県立郷土館調査研究年報』3

三宅徹也 1981「円筒土器」『縄文文化の研究』3 雄山閣

三宅徹也 1986「円筒土器下層式様式」『縄文土器大観』小学館

村越潔 1974『円筒土器文化』雄山閣 (初出は上記であるが、本稿では、村越潔 1984『増補 円筒土器文化』に拠った)

森町教育委員会 1977『森町 オニウシ遺跡発掘調査報告』

大和久震平 1960「円筒上層式の細分」秋田考古学 16 号

山内清男 1929「関東北に於ける繊維土器」『史前学雑誌』第 1 巻第 2 号・史前学研究所

山内清男 1964「縄紋式土器・総論 図版解説」『日本原始美術 I』講談社

山梨県教育委員会・日本道路公団 1987『釈迦堂Ⅲ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第 22 集

山梨県教育委員会・山梨県県土整備部 2014『上コブケ遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第 296 集

吉崎昌一 1965「北海道」『日本の考古学』Ⅱ